

---

# 遠き日の約束

蒼炎鬼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遠き日の約束

### 【Nコード】

N8024C

### 【作者名】

蒼炎鬼

### 【あらすじ】

一枚のカードが織り成す不思議な物語。カードがもたらすのは幸運か不幸か。それとも…奇運か。

## 序章：死による開幕劇（前書き）

後書きには毎回キャラクターたちの会話劇があります。  
暇な人は読んでやってください。

## 序章：死による開幕劇

「ふっ！　でえりゃ！」

力強い声が部屋に響き渡る。そこにいるのは12歳の少年リア・ロウズとその兄、ライア・ロウズだ。

リアの拳はライアの顔をかすめ、続けざまに放った脇腹への蹴りは空を切る。

「どうしたリア？　こんなんじゃ俺に1発も当たんないぞ？」

「なんだよ…さっき、顔に…掠った…だろ…」

肩で呼吸しなんとか会話を続けるリア。一方のライアは余裕の表情でリアを見ている。

「こうなったら………」

リアはおもむろに懷から一枚のカードを取り出した。カードには『人形を紐で操っているピエロ』の絵が描いてあった。

「『トリック・ピエロ  
詭計道化』……！」

リアが叫ぶとカードは光り、消滅した。視界を遮られるほどの光が収まるとリアの服装が変わっていた。先ほどまで道着だったリアはサーカスに登場するピエロの服装になっていたのだ。白と黒のチエックの服、頬には赤い涙と黒い星のペイント。頭には赤と黒のチエックで二股の帽子。

喜劇の語り部、闇の嘲笑者。そんな異名がライアの頭に沸いた。その光景には一瞬戦慄を覚える。

「これなら勝てる！ 行くよ！」  
「おいおい…ちょっとま」

ライアの言葉は最後まで出ずにリアは突貫する。低空で跳び両腕を振り上げ、一気に振り下ろす。ライアはまともに喰らい頭が地面に近づく。リアは着地と同時に体を反らしバック宙をする。その際に振り上げられた両足はライアの顎に当たり、ライアも同じく体を反らす。

ライアが倒れ、リアが立ち上がるとリアは口を開いた。

「やった！ 俺の勝ちだね兄さん」

ダンスグレヒロ  
「舞踊道化だな…ガクッ」

「うわ…ガクッて効果音は普通自分から言わないって」

リアの服装は前の道着に戻りライアを起き上がらせる。二人は部屋の隅で座り会話を続けていた。

「お前は強くなったな…」

「うん…そうだね。自分でもわかるよ」

「けど、強くなったからといって…お前は誰も殺すなよ」

「うん…わかってる。誰も殺さない」

俯くリアに対してライアは小指をたてて手を出してきた。

「これは？」

「『ユビキリ』だ。だいぶ昔の契約方法だな。嘘ついたら針千本飲んでもらうぞ？」

「ユビキリ…」

リアはライアの手の形を真似した。小指以外の4本の指を折り曲げ拳に入れる。そして小指だけを立てライアの小指に絡ませる。

「ユービキリゲンマン　嘘ついたら針千本飲ーます　指切った

これで契約完了だ。約束だから。な？」

「うん。約束！」

ビー！！

ビー！！

部屋に警告音が鳴り響く。リアは驚いて立ち上がったがライアは座ったままだった。

「シヨケイセントウシュウリヨウ！　シヨケイセントウシュウリヨウ！　ハイシャハシヨケイスル！」

機械的な音声が終わると部屋の入り口から数人の男が入ってきた。

「来たか…」

「兄さんどういうこと！？　今日は処刑戦闘の日じゃないのに！！」

「もう俺たちしかないんだよ『落ちこぼれ』はな」

ライア表情はどこか寂しげだった。しかし、リアは納得がいかずライアの前に立ち男たちの壁になった。

「今日は処刑戦闘はされない日だよ！　僕たちを殺す意味がない！」

「わからんか？　お前らは所詮は『似非人間』。いらなくなれば殺し、また次を作ればいいんだ。だけ『R-1A』貴様は邪魔だ」

「何がアールワンエーだよ！　僕はリアだ！！」

バン

乾いた発砲音。放たれた弾丸は無情にもリアの心臓を貫通した。

「リア…俺を助けてもいいことはなかったのにな…」

「安心しろ『RA-1A』。貴様もすぐにあの世逝きだ。義弟の後を追わせてやる」

「あいにく…俺はあいつには会えないな。あいつは天国、俺は地獄行きだ」

バン！      バン

銃声は二発。ライアは両腿を打たれ地面に倒れた。痛みに堪え、呼吸は荒くなっている。

バン！      バン！

また二発。今度は両肘。完全に四肢の動きを封じられ身動きが取れないライア。一人の男はライアへ近寄り銃口を頭へと突きつける。

「何か言うことはあるか？『作り物』よ」

「道化は狂い、踊りだす…狂った道化は泣き出して…涙で海を創ったよ…溺れ溺れたピエロさん…怒り怒ったピエロさん…最後は笑って死にました…」

バン

最後の銃弾はライアの脳を貫通し彼を絶命させた。

「くだらん最後だったな。行くぞ。撤収だ」

「隊長！それは…」

一人の男は何かを指差していた。それはリアが先ほどまで持っていたカードだった。

カードの絵柄は骸骨。しかしただの骸骨ではなかった。血の涙を流し、何かを喋っていた。唇を読むと…

『サヨウナラ兄サン。約束八守ルヨ』

と言っていた。言い終わるとカードは消え、男たちはその部屋を後にした。残されたのは虚空を見上げる少年と地面に伏した兄だけだった……。

## 序章：死による開幕劇（後書き）

リア（リ）「はい始まりました！『遠き日の約束』！司会のリア・ロウズです！そしてえゝこちらはアシスタントの！」

ライア（ラ）「ライア・ロウズだ。よろしく」

リ「兄さん兄さん」

ラ「何だ？」

リ「一話目から主人公死んじやったよ！！」

ラ「誰が主人公だよ？」

リ「僕だよ僕！！」

蒼炎鬼「違います」

リ＆ラ「今の誰だ！！？」

ラ「お。もう時間がないな。今回はここまで！じゃあ次をお楽しみに」

リ「あゝ！兄さんずるい！おいしいところだけ持っていった！！」

## 第一幕：一・転がる石のように

繊細でありながら強くしなやかな筆の動き。『彼』の描く絵はおよそ他の人間に真似ができるものではない。

『彼』の呼吸はなく、被写体を見つめ眉一つ動かさずに筆を進めていく。

「何時見てもスゴいねえ…。ただ絵を描くだけなのに不思議と他人を惹きつける。特異な才能だねえ。そう思わないかい？」

『彼』を遠目に一人の女は隣に立つ筋肉質の男に話を振る。

「ああ。そうだな。」

「つれない返事だねえ…」

「そう思うんならそう思えばいいだろ。あいつが気になるんなら一枚描いてもらえばいい。」

男は女に言い、その場を去った。

「そうかい。なら、そうさせてもらうよ」

女は『彼』に近づき、おもむろに声をかける。どうやら、先ほどまでの被写体きやくはいないようだ。

「ハア―イ ちょっといいかい？」

「なんですか？」

彼女は『彼』の双眸を見た瞬間、戦慄が走った。理由は不明。しかし、間違いなく『彼』は何かを秘めていた。

『彼』は話しかけてきたが動かない彼女を見て首を傾げ、もう一度同じ問いかけをした。

「なんですか？」

『彼』の声は優しく、すべてを癒し、包み込んでくれるような優しく、力強い声だった。彼女の予想とは裏腹な可愛らしい声。彼女は一瞬の旋律を瞬時に忘れた。

「あ、うん。悪いね…できれば、あたいを描いてくれないかい？」

彼女の問いかけは『彼』の心を躍らせた。『彼』は頬を緩め満面の笑みで口を開いた。

「僕なんかの絵でよろしければ…いいですよ」

「そうかい。じゃあ、頼んだよ」

「はい！　じゃあ、そこにお座りください」

彼女は『彼』の指示に従い、鉄製のパイプ椅子に腰を下ろした。

「一つ聞いていいかい？」

「なんですか？」

「あんだ…人を殺したことってある？」

空気が凍った。物理的ではなく、精神的な意味で。その場には多くの人がいるオープンカフェ。しかし、『そこには『彼』と彼女しかない』。他に人がいるのにもかかわらず、その『場』には二人しかいなかった。『彼』は彼女の放った殺気を体に浴び、四肢が震える。

「聞こえなかった？ 面倒だけでもう一度言うよ。殺人を犯したことはあるかい？」

「……………」

『彼』は俯き、四肢だけではなく体をも震わせる。張り詰めた空間。空気が重いカフェ。しかし、それは次の瞬間に跡形もなく砕け散った。

「……ふ」

「ん？ なんだい？」

「ふふ……ははは……あははは！！ あゝ苦しい……なぜいきなりそんな事を聞くんです？ 僕は人を殺したことなんてありませんし、これから人を殺すことだって絶対無いですよ」

オープンカフェはいつもの賑わいが戻ってきた。いや、戻ってきたという表現はおかしかった。オープンカフェは『さつきから雰囲気は変わっていなかった』。『彼』の笑いに女は呆氣に取られ、つられて笑った。

笑いが収まった後、女は『彼』に質問した。

「人を殺すことは絶対じゃない。って言ったよね？ それは何故だい？」

「約束したんです。誰かはわかりませんが、僕は『誰も殺さない』という約束を」

女の問いに『彼』は微笑み優しい笑顔で言い切った。その言葉に満足したのか女は席を立ちあがった。

「そっか。わかった。ごめんね、もう行かなくちゃいけないの。絵はまた今度に、ね？」

「そうですか…。わかりました。えつと…」

『彼』は名前を言いたいのだろうか？ 女はそれを察し自分の名前を教えた。

「レンナ。レンナ・ノルイよ。じゃあね絵描きさん」

「あ…あの！ 僕はリア・ロントといいます！ 今度来たら最優先で受け付けますから！！」

レンナと名乗った女はオープンカフェを出る。しかし、後ろから聞こえた声に一度足を止め、クスリと笑った。

『彼』、リア・ロントの石はここから始まり、終わりに向かう。  
物語の終わりに。  
ものがたり  
さか

## 第一幕：一・転がる石のように（後書き）

リア「はいどうも〜リア・ロウズです　今回はお客がいません！

と言うわけで、キャラクター紹介でもしましょうか？　しましょう

！　え〜っと…今回の紹介の資料は…ありました　今回はボク、リア・ロウズですね。

名前はリア・ロウズ、好きなものは特になし、趣味はなし…ツマンナイ紹介だな〜。

身長は152cm。体重は41kg。得意なことは体術。ん〜微妙な紹介ですね…。

次回はリア・ロントさんをゲストに呼ぶつもりです！　お楽しみに

〜

## 二：出会い

「今日はここまでかな…。あなたが最後のお客さんです。ありがとうございます」

顔をほころばせ今日最後の客に礼をする。ひしゃたい客の女は頬を赤らめてその場を去っていった。

「あれ？」

ふとリアは筆を見つめる。筆の先が焼けていた。

「なんで筆が…？」

有り得ない現象だった。いくら使い込まれた筆といっても『焼ける』ということはなかった。否、問題はそこではなかった。問題は何故筆が焼けている、ということだった。

リアの疑問は更に深まった。それは筆だけでなく、他の道具までもが焼けていた。本来焼けるはずのないプラスチックで作られたパレットまでが焼けていたのだ。

「おかしいですね…何故パレットまでもが…」

瞬間。世界が変わった。リアの周りにはサーカスに使われるような玉乗り用の巨大な白と赤の色で染められている玉。曲芸の舞台であるステージ。そして、それを囲むのは客が1人もいない観客席。だが、客ならいた。先程までオープンカフェで絵を描いていた少年が。

ステージの中心では紳士のような礼をする道化ヒエロが立っていた。ま

まったく動かない道化。はじめ、リアは人形と思っていた。しかし、道化は動き出した。

「ようこそ、我が曲芸師の館へ：今宵は貴方が、貴方だけが私のお客……。どうぞ、最後までお楽しみください」

有り得ない状況、有り得ない景色、有り得ない経験。リアは困惑した。急に自分がいる場所が変わり、急に客だと言われたのだ。

「あなたは誰ですか？」

リアは問う。しかし、道化からの返答はない。ただ不気味な笑みを浮かべリアを見つめつづけている。

「前座では部下が失礼を働き、まことに申し訳ありませんでした。よもやあのような事を聞くとは……」

「前座？ 部下？ 一体何の事ですか？」

「ですが、私はそのようなことは決して言いません。安心してお楽しみください」

リアの言葉は道化の耳には入ることは無く右から左へと抜けていった。それどころか、話すらかみ合っていない。

リアは立ち上がり周りを見渡す。

何度見ても奇妙な光景だった。先程までいたオープンカフェとは違い、サーカスを観るために、そして、自分が磨き上げた曲芸を披露するために用意された一つのテント。そして、客が楽しむことといたら只一つ。道化が見せる曲芸や喜劇を見物するだけであった。一歩ずつ客席へと歩を進めるリア。しかし、その足は道化の言葉で止まった。

「お待ちください。当館はお客様と共に劇を作っていく館。どうか、私めの考えた劇の役者<sup>キャスト</sup>になっていただきたく思います。どうでしょうか？」

「どういうことですか？」

「至極簡単な答です。私の考えた劇は1人では決してなせぬもの、そこでお客様と共に劇を作ろうと思った次第です」

まるで、大勢に聞かせるような芝居じみた話し方。しかし、その話し方にはまるで違和感を感じない。

溜め息を吐き、リアは口を開いた。

「いいでしょう。ですが、貴方の名前を聞かせてくれませんか？道化。では少し名を呼ぶ時に抵抗がありますので…」

道化はにやりと笑ってまた一礼した。

「失礼致しました。私はリア。あなたの心。貴方と対面できたことを嬉しく思います。では、劇を初めましょう。あなたを中心にした物語<sup>ストーリー</sup>を…」

そう言うと、道化は消えリアは先ほどまでいたオープンカフェに戻っていた。しかし、あたりは暗く先程の時間から数時間が過ぎていた。

そして、もう一つ不思議なことに筆やパレットといった道具がすべて消えていた。代わりに、テーブルの上に一枚のカードが刺さっていた。

「さっきの光景は…夢？」

リアは混乱する頭を無理やりに整理しテーブルに刺さっている力

ードを抜いた。そこには…

「『人形劇をする道化』…ですか」

そのカードはリアには見覚えが無かった。しかし、何か懐かしい感じがカードからにじみ出ていた。

「先程の道化は…これだったんでしょ…」

リアはカードを懷に収め、誰もいないオープンカフェを後にした。

『カエツ テキタヨ…ニイサン…』

カードに描かれた道化は誰にも聞こえる事のない小さな声でポツリと呟いた。

## 二：出会い（後書き）

リア・ロウズ（略・ロウ）「はいはい」リア・ロウズです  
今  
回のゲストは、名前が似ているリア・ロントさんです」

リア・ロント（略・ロン）「どうも」。ここは何ですか？

ロウ「まあまあ。さっそく自己紹介してもらいましょう！」

ロン「いまいち状況が読めませんが、僕はリア・ロントです。身長は172。体重は52ですね。趣味は風景画や人物画、つまり絵を描くことです。絵を描いていると心が静まりますからね」

ロウ「なるほど」。でわでわ、性格などを教えていただきますよう」

ロン「性格は、自分で言うのも変ですけど、大人しいですね。喧嘩はあまりしたくないですし、日なたでゆっくり絵を描くか寝てるほうが僕は好きです」

ロウ「ふむふむ。ではこれからのこの作品の見所、読みどころを教えてくださいませんか？」

ロン「そうですね。あまりわかりませんね」

ロウ「ありやりや。では最後に一言お願いします」

ロン「気軽に評価や感想、指摘するところ等がありましたら作者・蒼炎鬼にお申し付けください」

ロウ「ありがとうございます。次回のリアの『あとがき会話』のコーナーは真に勝手ながらお休みさせていただきます。申し訳ございません。では次回をお楽しみに」

### 三：原石の採集（前書き）

今回は後書きがありません。

### 三：原石の採集

「どうだったの？」

少年はレンナに問う。するとレンナはにやりと笑って口を開いた。

「ありゃあ大した能力の持ち主だよ。間違いない」  
チカラ

「へえ…じゃあ、会いに行ってみようかな」

少年は座っていた机からふわりと飛ぶ。比喩的な表現ではなく『実際に飛んでいた』。

「お取り込み中か？」

出入り口の柱を叩きやってきた筋肉質の男は二人に聞いた。

「いやもう終わったよ。それに、オレはレンナが話したっていう人に合ってくる。じゃあね。あ、あと…アイアン。あのね…」

少年は浮遊を止め自らの足でその場を去った。すれ違い様に男アイアンにある伝言を残して。

「何て言っただい？」

「『石は調べるまで宝石かどうかわからない。』だとさ」

「つまり、あたいの話は信用してないってことか…」

「そうみたいだな」

アイアンはレンナの怒りを受け流し、その家屋の奥に入った。

舞台は移る。

リアは夜空を見上げ思考の海へと航海していた。

いわく、レンナという女性からの質問。

いわく、道化の言葉。

すべてが謎だった。彼は今日1日で起こった現象を整理していたが、一向に終わる様子はなかった。

時が過ぎ、今日の寢床を探すリア。彼には家がなく、大体は野宿をしている。趣味の風景画を美術商に売り生計を立てていたこともあったが、自分の絵の完成度と斬新な絵で芸術関係の巨匠を唸らせた。そしてその数日後には毎日のように、雑誌のインタビューなどが殺到するために自主的に風景画を描くことはやめていた。

ため息を吐きリアはここ、「ワノール」の街の中心。噴水広場に寢床に決めた。寢床といってもベッドはおろか、寝袋も持っていない。『寝る』というよりはただそこに落ち着く。といったようにも感じられる。

「今日のアレはいつたいたんだっただけでしょうね…。それに…。」

リアは懷からカードを取り出した。それは、先ほどまでいたオーブンカフェの机に刺さっていた『人形劇をする道化』の絵柄を写したカードだった。

「このカード…トランプでもないようですし、かと言って特別なカードには…見えませんね」

リアはカードを見る角度を変え、様々な角度、方向からカードを観察する。しかし、特に変わった様子も見られない。だが…。

「何故か、懐かしい感じがします…」

と。リアが言った。

「何が？」

突然、背後、それも息がかかるくらいの距離で声が聞こえた。驚き、リアはすぐに後ろを振り向く。そこには誰もいない。だが、人知を超えた『何か』があった。

『何か』というのは噴水広場になら必ずある『噴水の水』だった。噴水とは目で楽しむもの。確かに『これ』も見様によつては楽しめるだろう。巨大な      リアの頭部ほどの水球が浮いているのだ。

「じぼっ！」

肺に水が流れてきた。呼吸をすればするほど顔面      頭に纏わりつく水球が肺に入りリアを『空気中』で溺れさせている。

「あははははははははははははははは！      嘘お！？      そんなものも対処できないのか？」

視界が水でぼやけ、水を通しての声だったがそれははつきりとりアの耳に入った。子供の声だった。

「……………！」

「ん、何？      苦しい？」

無邪気だが、すべてを悟っているかのような声。少年が指を弾くとリアに纏わりついていた水球が弾けた。

「ゲホッ！ ゲホッ…。あなたは…何者ですか？」

「オレ？ オレは…そうだな。『ピエロ』って呼んでよ。そのほうが今はしっくりくるし」

「ピエロ、ですか。今日は不思議なことがよく起こりますね」

眼鏡をくいと上げ、少年に注目する。少年の服装はまさしくピエロだった。白と黒のチェックの服。先端に白い玉がついているとんがり帽子。顔には大きな赤い唇と目を中心にしたひしがたのペイント。可愛らしかったが、それ故に、不気味だった。

子供ならもう寝ているであろう夜中。それにもかかわらず噴水広場にいる少年。完全にピエロになりきり、性格は飄々としていて掴みどころがない。恐怖でひざが笑うのが感じ取れた。情けない。と思っていたが体は正直だった。

「ねえ。」

少年はリアに話しかけある一点を指差した。

「それ何？」

それはカードだった。何故かはわからないが少年はカードに興味を持っていた。リアもカードに視線を向けるが次の瞬間、リアは後方へと飛ばされた。

「ぐ…！」

木に当たり衝撃は死んだがその反動として体中を激痛が走った。口の中には血の味さえ感じた。

口腔に溜まった血を吐き出しなんとか体勢を立て直す。しかし、

瞬間的にリアは身をよじった。

少年の拳が頬を掠める。その鋭さと速さのある拳はリアの頬を容易に裂いた。

「こんなものか。ツマンナイ」

度重なる危機的状況からか。リアの足の震えは止まっていた。カードを持つ腕を突き出し少年にカードを見せた。

「この絵柄。なんだかわかりますか？」

「『踊るピエロ』？」

「先ほどまで、この絵柄は『人形劇をする道化』…だったんですよ」

そう。リアの視線がカードに流れ、彼は『絵柄が違う』ことに驚いていた。ついさっきまではリアの言うとおり、『人形劇をする道化』。だが今は少年の言うとおり、『踊るピエロ』だったのだ。

少年は眉をひそめ、問いかける。

「だから何？」

「いえ、ただ言いたかっただけです」

ただ言いたかっただけ。そんなくだらない理由で少年の楽しみを増加させてしまった。

少年はどこからか剣を取り出し、リアに向かって突撃する。

リアは避けなかった。いや、避けられなかったのか。少年の剣はリアを貫いた。ように見えた。

「え？」

「残念ですが、僕はここですよ？」

笑みを含んだ声、少年が振り向くとそこには微笑を浮かべ眼鏡をかけた少年がたっていた。木の上に。

「どうやって」

「どうやってそんなところまで？　ですか？　ただ歩いただけですよ。こんな風に」

力をこめずに枝を踏む。すると、踏んだ後ろには衝撃波が発生し着地点から完全に止まるまでの道は削り取られていた。時間にして一秒もない時間。音速以上の速さだった。

少年は驚き、動かなくなった。戦意喪失したと言ってもいいのかもしれない。

リアと少年が対峙して数分。少年はハッとなり、口を開いた。

「すごいね。でもまだ原石の状態だよ。いずれまた会うよ。それまでじゃあね」

少年は急に吹いた強風とともに消えた。いつのまにか夜は過ぎ、朝日が昇るような時間になっていた。リアは伸びをしたあと、上から降ってきた1枚の紙をつかんだ。そこには、

「ギルド『サーカス館』。あの子はこのギルドの一員だったんですね。裏には地図が描いてある、行ってみましょうか」

リアは足元に刺さっていた『道化のカード』を引き抜き右のポケットにいれ、紙　ギルド名刺に描かれてある地図を頼りに歩き出した。

#### 四：始まりは唐突に…（前書き）

今回より書き方を変えてみました。  
携帯の方は読みづらいでしょうがご了承ください。

#### 四：始まりは唐突に…

鋭い袈裟切りがリアの右肩を掠める。それは服を裂くだけにとどまりリアには傷一つついていなかった。

対立するアイアンとリア。それは数分前に遡る。

\* \* \*

「ここですね…」

リアがたどり着いた場所は普通の酒場だった。名前は『自由人』。恐れることはなく自然と酒場に運んだ。

そこには、筋肉質の男がソファで寝ていて、黒のマントを羽織りとりがり帽子を深々と被った老人が席に座っており、カウンター席には昨日自分に不思議な問いかけをしてきたレンナが座っていた。

一瞬、リアは息を呑んだ。その場に足を踏み入れた自分が不安もなく、恐怖も無いことに驚いていた。その酒場には夥しいほどの死体で溢れかえっていた。様に見えた。

現実には『そう』ではなく、三人が三者三様に別な行動をとっていた。

ソファで眠りつつける男。

カウンター席で酒を飲みつつける女。

テーブルで何やら難しそうな本を読んでいる老人。

目を擦り、その酒場の中を確認した後、リアは口を開いた。

「あの…。ここは…」

「ん？」

レンナが振り向いた。すると、彼女は驚いたような顔をリアに見せた。

「あれ… あんた昨日の……」

「昨日ぶり…ですね。レンナさん」

笑顔で返事を返すリア。

レンナはまだ状況を理解できずにいる。その証拠に口をパクパクさせている。

「え、あ…そうだね。でもどうしてこんな所にいるんだい？」

「いや、昨日の夜に『ピエロ』に会って…そしたら、このギルド名刺をもらったので…」

『ピエロ』。その単語にレンナ以外の二人も一瞬、反応した。

先程まで寝ていた男はソファから起き、リアを凝視する。

精悍な視線がリアを刺す。その鋭さは岩をも穿ちそうな視線だった。しかし、リアは動じなかった。

すると、男はソファから立ち上がりツカツカとリアに近づく。

「お前、たしかリア・ロントとか言ったな？」

「え？ ええ。そうですよ」

男の声は太く遅しく、それでいて癒される声だった。だが、リアにとつてはそんなことは問題ではなかった。

男は更に質問してきた。

「お前、強いのか？」

「あの…言ってる意味が…よくわからない、んですけど…」

「アイアン止めな。どうしてあんたはいきなりそんなことを聞くんだい？ リアに失礼だろ」

レンナがアイアンと呼ばれた男を制止する。しかし、そんな抑制の言葉もむなしく男　アイアンは続ける。

「俺と戦りあってみねえか？ お前、武器は何を使う？」

「僕は体を動かすのは得意ではありません。のんびりと絵を描いていたほうが…」

リアの言葉はアイアンの蹴りによって悉く散った。リアは酒場『自由人』の入り口へと吹っ飛び、向かいのコンクリートの壁に激突した。

「グフッ…！」

あきらかに致命傷となる一発。口に溜まる血液。衝撃と同時に体

を走る電撃にも似た痛み。

リアは片膝をつき、湧き上がる吐き気を抑えることもできず地面に大量の血と共に吐瀉物を撒く。

「そんなもんか。ツマンネエな」

どこかで聞いた台詞。リアは昨晚の一戦を思い出していた。少年が属するであろう『サーカス館』、そこには好戦的なものが多いのかという考えが彼の脳の一部に生まれた。しかし、そんなことは今考えるべきではなく今はどうすれば最善の方法で戦闘を回避するかの方が重要だった。

\* \* \*

そして今に至るわけである。

アイアンは店の奥にあった木刀を持って襲い掛かってくる。一方のリアは武器は持たずお世辞にも徒手空拳とは言いがたい構えで対峙している。

だがそんな構えで、いや、そんな構えだからこそ先程の動きは有り得なかった。

明らかに当たるであろう一撃を最小限の動きで見切り、体勢を崩すことなく後ろへとステップを踏み距離をとる。

おかしい雰囲気が出た。それはリアから広がってアイアンの行動範囲だけを包んだ不思議な雰囲気だった。

リアと対峙するアイアン。彼は違和感に気づく様子もなく、何故か苦しい表情をしているようにも見える。

「有り得ねえだろ……いくら手加減してやってるとはいえ、素人が俺の剣を避けるなんざ……あっちゃいけねえだろ……」

（それにあの表情……）

リアは笑っていた。何かを馬鹿にするでもなく嘲笑うでもなく、ただ純粹に微笑んでいた。その笑みが不気味で不愉快だった。

「あの……もう止めませんか？ これ以上はお互いに嫌な思いしかし

ないと思うんですが……」

おどおどとした表情でリアは問い掛ける。おどおどとした、『さきほどと変わることのない表情で』。

「ちっ……！」

アイアンは止まらない。それどころか、更に速度を上げリアに剣戟を加える。

だが、リアには当たらなかった。袈裟切りはステップでかわされ、上段からの一撃は寸でところで左右に回避され、突きは剣を滑るように避けられた。そのどれもが『ギリギリのところでかわされていた』。

だが、あれほどの鋭さと速さは昨夜の『ピエロ』の一撃と同威力、またはそれ以上。それ故にギリギリで避ければ速さから生まれる衝撃と鋭さから生まれる目に見えぬ斬撃がリアの体を赤く染め上げる。かけていた眼鏡は最初の蹴りでどこかに落としていた。

肩で呼吸する二人。リアは急にカードのことを思い出し、右のポケットに手を入れる。しかし『カードは無かった』。一瞬だが、リアの動きが止まった。アイアンはそれ見逃さず、瞬時に背後へと回りリアの脇腹へと木刀を振るう。

間違いなく必殺の一撃。『それ』は風と同化しリアを壁に叩きつける。はずだった。

リアは吹き飛んだが、木刀を打ち込まれた部分を払い平然と立っていた。

「これで僕の負けですかね……」

急に倒れたリア。彼の体力はすでに限界だったのだ。アイアンは驚愕した。あの一撃には間違いなく殺意をこめて打った。いままでその一撃は誰にも避けられたことはなかった。だが、この男は避けた。

味わったことのない敗北感。それは重く、苦く、辛いものだった。………。」

アイアンはリアを担ぎ酒場へと戻った。

## 終幕：五：不幸な幸せ（前書き）

久しぶりの更新です。

作者の都合で後書きのキャラクターたちの会話劇は不定期にやらせていただくことになります。

それを楽しみにしている方がいれば誤ります。

## 終幕：五・不幸な幸せ

「さーて…アイアンはいまごろ『原石』と戦ってるころかな」

昨夜、リアと激しい戦闘をした少年は噴水広場にいた。

誰かを待っているわけでもなくただ噴水の縁に座っている。

ちょうどその頃、リアはアイアンと激しい戦闘をしている。が、

少年にはそんなことはわからずあくまで机上の空論だ。

「もうそろそろ終わったかな？ うん。終わってる」

瞑目し、確かめるように首を縦に振る。少年は酒場『自由人』に足を運んだ。

「ねえママあ…さっきまでそこにいたピエロさんは？」

「そんなもの『初めからいなかったわ』」

名も知らぬ親子の子供はたしかに少年の座っていた場所を見て言った。

\* \* \*

「終わった。」

やけに棒読みな口調でアイアンは酒場へと戻ってきた。

「おかえり。で、どうだった？ 強かったの？」

レンナは問う。しかし、アイアンはそれに答えずリアをソファに投げた。

ソファに落ち一度だけ体をバウンドさせるリア。だが、一向に起きる気配がない。

「その気になれば殺れたわけね」

レンナは笑みを含んだ声を出した。だが、アイアンは「いや…」

と否定した。さらに続ける。

「俺は手加減はしてねえ。けどな、こいつは手加減してたと思うんだよね…」

アイアンの言葉にレンナは驚いたがアイアンは続ける。

「こいつは俺の剣をギリギリで避けやがる。そんだけ動体視力がよく、尚且つ俺の剣を避けれるスピードがありながらも…こいつは俺に攻撃を加えちゃいねえんだ」

アイアンが怒りをあらわにする。

「ならば…」

店の奥から声が聞こえた。その声は老人特有のしゃがれた声だがなぜか勇ましく聞こえる。

「その者…リアと言ったか。その者は不幸じゃな。いや、幸せともいえるの」

「ワイ爺…なんで？」

レンナはワイ爺と呼ばれた老人に話を振った。すると、老人は続けた。

「それほどの反応・直感・行動力をもちながらそれを扱うことに躊躇いが有るのじゃろ。幸福な身体力じゃが、優しすぎてしまう不幸な性格…と言うことじゃよ」

「するつてえと…こいつは…」

「間違いなく原石だよ」

リア以外の三人は入り口を向いた。そこには少年が立っていた。

「たっだいまー」

「リズ！ あんた、あたいのこと信用してなかったのかい？」

レンナは少年 リズに対して怒りをあらわにする。

リズは愛くるしい笑顔で口を開いた。

「なっはっはっは 信用はしてるけど、やっぱり自分で確かめないと…的なの？」

「的なつてなんだよ…」

ガクツと頂垂れてアイアンが突っ込む。

「結果的にリアはどうするんだい？」

「え、どこにいるの？」

ソファに視線を向けるレンナ。そこにはスヤスヤと寝息をたてて

いるリアがいた。

「俺と戦って体力が尽きたんだとよ」

「へえ……」

珍しいものを見るかのようにリズはリアを観察している。

リズはリアの額に掌を添えた。

「何をするつもりじゃ？」

「ま、黙ってみててよ」

全員が息を呑む。店に入る微風の音すら聞こえるほどに辺りは静まっていた。

白く、細く、それでいて頼れるようなリズの手はリアの額に添えられたまま動かない。

「我、全を統べ、一を統べ、命を統べるもの。汝、我が声聞きし時、万物の理を超え、我と同じよ」

詠唱。だが、それは詠唱だがひとつの歌のようでもあった。

リズの掌を中心に何かの波紋が広がる。波紋は広がり数メートル広がった後にリズの掌に戻り、弾けた。

「今の詠唱は……なんじゃ？」

「意味はないけどねー。何か魔法使いみたいじゃん？」

「相変わらずだねえ……」

「ま、直るもんでもねえがな」

えへへ、とリズが笑う。すると、その数秒後リアが目を覚ました。

「お、起きたみたいだよ」

「気分はどうだい」

「大丈夫です。体にもそんなに残るほどの怪我は負っていませんから」

両腕を振り上げたり肩を回したりと体の調子確かめるリア。顔や体には数個の切創があるものの動かす分には問題はなさそうだ。

「あのよ……」

アイアンから彼とは思えないほどの弱い声がリアに発せられた。

「さっきは、悪かったな。強そうな奴を見ると戦いたくなっちゃう

んだ」

リアは微苦笑して答えた。

「僕は…強くは見えないと思いますよ」

その言葉にアイアンの背後に立っていたリズはかぶりを振って答えた。

「いや、間違いなくリアは強いよ。君は力の原石だ。磨き様によってはとんでもない宝石になるよ。オレが保障する」

リズの言葉を咀嚼するのには数秒の時間を要した。

「つまり、リアはこのギルドに入らないかってことだよ。どう？」

レンナからの勧誘。しばらく悩みリアは答えをだした。

「いいですよ。入ります」

「じゃあ、改めて悪かったな。それと、これからよろしくな。アイアン・ラッサムだ」

アイアンは右手を差し出し、リアもそれに答え硬く握手を交わした。

「あたいとは初対面じゃないから必要ないだろうけど…あたいはレンナ・ノルイだよ。いつもは右腕に包帯を巻いてるんだけど今日はしてない。よろしくね」

次はレンナとの握手。しかし、今のことを気遣ってなのかリアは左手を差し出し、左手で握手をした。

「わしとは初対面じゃな。ワイズ・コロファじゃ」

年相応の皺だらけの手を差し伸べるワイズ。笑顔でそれに答えるリア。

「最後はオレだね。オレはギルド『サーカス館』のギルド長リズ、リズ・アルカナフィン。ギルド長だからって畏まなくてもいいよ。よろしくね」

年は12、3あたりだろうか。そんな子供がギルドの長を務めているのが意外だったがリアは笑みを浮かべリズと握手を交わす。

「えと…リア・ロントです。迷惑をかけるかもしれませんがよろしく願います」

いかにも初対面の人を使う敬語だった。だが、そんな敬語すらリアが使うと違和感がない。

新たな仲間をリズ、レンナ、ワイズ、アイアンは温かく迎え入れた。

終幕：五・不幸な幸せ（後書き）

気軽に評価・感想・指摘などをよろしくお願いします。

## 第二幕：一・真否なる神秘（前書き）

今回は自分の中で一番長い話です。携帯の方は少し大変です。

## 第二幕：一・真否なる神秘

「リア。お前、『神秘』って信じるか？」

不意にアイアンから聞かれリアは悩む。

神秘。人間の力では計り知れない不思議なこと、不思議な現象。

「神秘ですか。そうですね、この目で見る事ができれば…あるいは」

リアらしい答えだった。『百聞は一見にしかず』と言うように、同じことを百回聞いたところで一回実物を見たほうがわかりやすいつまり、現実に見れば信じられるという答えだ。

「なるほどな。確かに見れば早い」

アイアンは納得した様子でソファに寝そべった。

リアがギルドに『入社』してからすでに一ヶ月が過ぎていた。すでにリアは『サーカス館』の一員でありギルドに発注される依頼も数えるくらいだが 付き添いとしてだが こなしている。

「でも…」

リアの言葉にアイアンは起き上がった。

「神秘は…自然が織り成す一種の芸術だと僕は考えています。昔見た『蔵書』にはそうは書かれてはいませんでした…」

「『蔵書』？」

その言葉にワイズが食いついた。リアがここ一ヶ月で知ったことはこのギルドの人数は自分を含め五人しかいないこと。そして全員が変わり者だということ。そして個人の名前、大まかな性格だけだった。

ワイズは年がら年中本を読み、この世にあらん限りの知識を蓄えようとする人間だった。無論、世界の知識を蓄えることはできるわけがなく、酒場『自由人』兼ギルド『サーカス館』の酒庫兼倉庫にはワイズが集めた古文書などが保管されている。

「ええ。内容はあまり深く目を通していませんが…代償と覚悟があ

れば人間にも神秘が『使える』。と言った内容だったはずです」

「ほお。興味深いの……」

「代償と覚悟ね……覚悟はあっても神秘を使つたための代償がないとダメってことか」

「ええ。多分そうでしょうね」

酒場の雰囲気为重くなった。しかし、

「たっただいま」

その雰囲気はまるで砂の城のように崩れ去った。砂の城を崩したのはギルド長のリズであった。年齢は12。無邪気すぎる声は時よりリアを戦慄させる。

「いい具合に雰囲気をぶち壊したね。こんな壊れ具合は逆に清々しいんじゃないかい？」

リズの後に続いたのは右腕に包帯を巻きつけた女、レンナ・ノルイだった。左腕には買ひ物袋がぶら下がっていた。

「あ、おかえりなさい。レンナさん、リズ」

「リア。『さん』付けは止めてっていったよね」

レンナの言葉にリアはたじろぐ。事実、リアはリズ以外のギルド員は『さん』付けで呼んでいる。アイアンやワイズは構わないらしいが、レンナだけは別だった。

彼女は『さん』付けされることを好まずに呼び捨てにするように言う。しかし、リアにはできなかった。根本的に優しすぎる性格なために年齢に対する上下関係を考えてしまい呼び捨てにすることができないのだ。だが、言葉遣いは誰に対しても敬語になつてしまふ。

「あ、いや、でも……」

「その優しすぎる性格はリアの長所じゃ。レンナ、無理を言うてはならん」

「長所だけど短所よ。このままじゃ使い物になりやしないわよ」

「ん……ま、確かにそうだな。でもなリアの意も汲んでやれよ」

レンナを宿める男二人。その様子をリズは笑って見ていた。

リアはうるたえるばかりでどこか取り残された感があった。

「レンナは暫く『あれ』だから…今のうちに仕事に行こうかリア」  
「リスと…ですか」

一瞬戸惑った。数回ではあるが依頼をこなした。だが、リスとは一回も依頼を請け負ったことがなかったのだ。

右手を顎に当てしばらく悩んだあとにリアは決意した。

「いいですよ」

「じゃあ、この依頼にしよう 報酬もなかなかだし二人じゃないとできないらしいし」

そう言ってリスが渡してきた依頼書にはこう書かれていた。

＜場所：ワノール教会＞      ＜依頼内容：闇払い＞      ＜報酬：三十万イェン＞  
＜補足事項1：必ず二人一組であること＞      ＜補足事項2：命の保障はない＞

「さあ行こー！」

元氣よく右腕を空      天井があるので実際は天井      に突き上げ意気揚々とリスはギルドを後にした。少し遅れてリアもギルドを後にした。

\* \* \*

「あの、リス」  
「なに？」

やけに間延びした声でリスは返事をした。

「この、『闇払い』っていうのは何なんですか…？」

「そのまんまだよ。『闇』を『払う』んだよ？」

あたかも当然のように言うリス。しかし、リアはまだこの依頼の内容が理解できていないようだ。

ふと、リスはリアに質問する。

「ねえリア、『ダルク』って知ってる？」

「『ダルク』…いえ、聞いたことはありません」

「『ダルク』の元名は『DARK』。つまり『闇』から来てるんだ。この依頼は暗号……っていうとちょっと変な気もするんだけど、早い話がそういうこと」

言葉の意味を理解したリアは簡潔にまとめた。

「つまり、『闇払い』と言うのはその『ダルク』と呼ばれるものを『払う』、つまり討伐すると言うことですか」

「ん。まあおおまかに言っちゃえばそうだよ。……………ちょっと厄介だけどね」

最後の呟きはリアに聞こえることは無かった。

そうこうしている内に彼らは『自由都市ワノール』の中心に位置する『教会』に来ていた。教会といっても参拝する者は無く修道士も数人しかいない廃れた建物だ。しかし取り壊されることはなく、廃れてはいてもその神聖さには廃れや穢れがなかった。それ故にリアは信じられなかった。神聖な場に『ダルク』　『闇』を払えと依頼してることが。

足を進めるのを躊躇するリアだがリズはお構いなしに教会へと足を踏み入れる。

そこでリアは信じられないものを見た。

教会の入り口に足を踏み入れたリズの姿が一瞬、『歪んだ』。自分の目を疑うリアだったがその光景を現実として受け入れずにリアは頭を振りリズの後をつけた。

教会の中はいたって普通だった。規則正しく並べられた木製の長椅子、礼拝堂の奥には神父用の机。そして、教会に入り一番最初に目にするであろう正面にある絢爛たるステンドグラス。しかし、そこには人どころか猫の子一匹いなかった。

「すいませーん。ギルドの者なんですけどー。すいませーん」

通常より少しだけ声量を上げ声を出すリズ。だが、リズの言葉は教会の壁や天井に飲み込まれていった。

「いないんですかね？」

「教会は24時間営業じゃないのかな？　すいませーん」

「24時間『営業』、て…どんな営業ですか？ 探してきましょうか？」

リスの横に立ち問うリア。  
「辛抱強く待てば来るんじゃないかな？ とりあえず参拝客のフリでもしてよう」

リスの提案を受け入れリアはリスの隣に座る。  
辺りを見回し誰もいないことを確認するリア。リスは退屈そうにあくびをしていた。

「それにしても…」

口を開いたのはリアだった。

「なんでこの教会には参拝する人がいないんでしょう」

「神がいないからじゃないかな？」

「神…ですか」

不思議そうな顔をしながらリアは続けた。

「神って一体何なんでしょうね…この世界 『ガイア』 を創り、人を創って」

「神は寂しがりなんだよ」

リアの言葉にリスが割って入った。

「神はね孤独だったんだ。そして、孤独を癒すために世界を創った。ガイアでもまだ自分は1人だ。だから、人間を創った。すると今度は優越感に浸りたくなった。『私はお前たちを創ったのだから崇めなさい』ってね。そして教会が生まれ人間は神を崇めるようになった。神は寂しい思いから開放された。でもいずれ神は寂しい思いをしてしまうことになる。だから人間は神を崇めつづけた。するといつの間にか人間は神を崇めることが当然になっていた」

「あの…言ってる意味がわからないのですが…」

「ようするに神様は自分勝手なんだ。そしてワノールに住む人たちも自分勝手。つまり神様を崇めなくなっただけ」

「そして神はこの町に愛想をつかしいなくなっただけ…」

「そういうこと」

「ここは教会ですよ。神様の悪口は他所でして下さいね」

聞き慣れない女性の声が二人の耳に入った。

奥の扉の方を振り向くとそこには一人の修道女が立っていた。

「すいません。呼んでも誰も来なかったんでつい愚痴を言っちゃって」

笑いながら頭を掻くリズ。リアはただ苦笑いするしかなかった。

「少々立て込んでおりました…何か御用ですか？」

「オレたちはギルドから来たんだ。『闇払い』の件でね」

にやりとリズが笑った。その笑いは子供のような悪戯な笑みだった。リアにとっては不気味そのものであった。

リアにとって人の性格や本質を見抜くのは簡単だった。注意・観察力が高いリアのみが持つている能力だ。だが、未だにリズの本質は読めなかった。飄々としている性格だが、先程のように何かを悟ったような言葉を発する時もある。彼の性格は謎だった。

リズの言葉に修道女は明るい笑顔を見せた。

「だから、教えてくれない。この教会のこと」

「ええ。申し送れました。私はリーナと申します。実は…最近までこの教会には八人の修道士がいたのです」

「ふんふん。それで？」

「三日前から一夜おきに人が死んでいるのです」

「死んでいる？」

聞いたのはリアだ。リズは口元に手を当てなにやら考え込んでいる。

「ええ…それも、全身から精気を抜かれているのです。朝に私が駆けつけたときには虚ろな目で眠っていました」

「精気…精神と気力を抜いて殺されている…犯人に心当たりは…あるわけですね。精気を抜くなんて人間には出来るものじゃないですし」

「リア」

リズは急に口を開いた。

「言ったよね。これは『闇払い』だって。犯人は『ダルク』だよ」  
「『ダルク』…『闇』、ですか」

「そ。犯人は『ダルク』。これは決定してるんだ。でもどうも腑に落ちない点がある。リーナ、なんで教会に『ダルク』が出るの？」

リズの言葉には敵意とも呼べる『何か』が混じっていた。リーナは口を開くが、

「それは…」

と口籠もるだけだった。

リズの声の成分は『何か』が大半を占めていた。リーナはまるで催眠術にでもかかったかのように『口を開き真実を伝えた。』

「あらゆる人の憎しみ、妬み、恨み、その全てが教会に集まってしまったようです。ここはすべてを包み込む神聖な空間。あらゆるものを許す慈悲の極致。ここに溜まった『それ』は形を成して『変わって』しまい、人を襲うようになりました」

「わかった。ありがとう」

「……………いえ」

「じゃあオレたちは今日から教会の警備をするよ。『闇払い』も兼ねてね」

「おねがい…します」

リーナは深々と頭を下げ二人を奥の部屋に招き入れた。

\* \* \*

「あれ、リアとリズは？」

怒りが収まったのかレンナがアイアンに問い掛ける。

「ようやく収まったか。二人なら『闇払い』に出掛けた。教会にな」  
「教会か。人と人ならざるものとの『境界』でもあるな」

「ワイ爺…今のはシャレかい？ もしそうなら引くよ…」

有り得ない。といった顔でレンナは視線だけをワイズに送る。

「違う。本当のことを言っているのじゃ。教会は死者と生者との境界線としての役割を持っており、故に死者の弔いなどは教会を使う

じやる。『ヘル』、または『ヘヴン』に近いのは教会じゃ。言った意味がわかるか？」

黙考するアイアンとレンナ。やがてレンナは口を開いた。

「つまり『ダルク』は死者に近い生者ってことかい？ あたいも何度か奴と戦りあったけどあれは『人間の意志』だろ？ 生者も死者も関係ないし、そもそも人としての形が無いんだから」

「たしかに。ありや闇って言うより『影』だからな」

アイアンとレンナは何度かダルクと戦闘したことがある。

しかしその二人が、いや戦ったことのある二人だからこそ『それ』を表現する言葉が見つからない。

「あ」

不意にアイアンが声を漏らす。

「よく考えてみりゃ『あいつ』は人間だな。誰よりも、いや何よりものほうが正しいな。『奴』は何よりも人間を欲している。それだけは間違いないな」

その言葉にレンナが続いた。

「そうだねえ。『あれ』が人間の意志っていうなら確かにそうだね。おや……」

レンナは何かに気づいたのか酒場の外へと歩き出し空を見上げた。空は曇天。それを見てレンナは怪訝そうな顔を浮かべた。

「どうしたのじゃレンナ」

「こりゃ、一雨くるね。リズが心配だ。あたいは協会に行くよ」

「おい。ちよつと待」

アイアンが言い終わる前にレンナは酒場を立ち去った。

\* \* \*

「ここですいません」

「ありがとー」

リズは子供らしくキッチンとお辞儀をした後に部屋のドアノブを捻り中へと足を踏み入れた。それに続くようにリアもリーナに会釈を

した後部屋に入った。

部屋の中はきれいに片付けられていた。来客用のベッドが窓を隔てて二つ。机はベッドの隣に壁と向かい合うように二つ並べられていた。窓から縦に両断すれば左右対称になるほどにキッチンと並べられていた。

「何か御用の際はお申し付けください。それでは失礼します」

リアは左側のベッドに座り、リズは窓の近くに椅子を置いて座った。

リーナがいなくなったことを確認するとリズは口を開いた。

「大変だね」

「え。何がですか？」

「『闇探し』だよ。ダルクは日中は活動をしていない。文字どおり闇になってるから探索は夜にしかなくちゃいけないんだ」

「あの、ダルクについて聞いてもいいですか？」

「いいよ」

リアの表情がまじめになる。もともと、彼自身は普段からまじめなほうだが気を引き締めたと言うほうが正しいのかもしれない。

「ダルクは…何故人を襲うんですか？ それに先程リーナさんが言っていたこと　あらゆる人の憎しみ、妬み、恨み、その全てが教会に集まってしまった。ってどういうことですか？」

リアの質問はダルクの本質を調べるものだった。普段からの癖なのかリアは説明するたびに眼鏡をくい、と上げる。

少しの間黙考したリズは口を開いた。

「ちょっと難しいからちゃんと聞いててね。もう一回しゃべるのはいやだから」

「ええ。その点に関しては心配は無用です」

「ダルクは『人間が生み出したんだ』。あ、質問の時間は後でとつてあるから今は話を聞くだけにして。ダルクの元はただの『感情』。それは人間が持つ唯一の個性といってもいいかな。ねえリア。君は感情って自在にコントロールできる？」

リアは黙ったまま首を横に振る。

「できないよね。それは当然。誰だってできないんだから、できる人がいるわけがない。感情っていうのは外から貰うんじゃない、体の中から湧いてくるものだからね。嬉しい、楽しい、面白いっていうのは極自然に生まれるモノだ。でもね」

一呼吸おいてリスは声のトーンを一つ落とした声で話を続ける。<sup>せつめい</sup>

「怒りや憎しみ、妬みっていう一般的に自分も他人も不快にさせる『負の感情』ってのは自分から出すこともあるけど……大抵は他人が原因になることが大きいよね？ そんな『負の感情』の塊なんだよダルクは。ここまでで何か質問はある？」

「いえ……続きをどうぞ」

「嬉しいとか楽しいとか幸せになる『正の感情』は体内から対外へと放出される。でも怒りとかの『負の感情』は他人から与えられてるようなものだからいつまでも体に残るんだ。そして、その『負の感情』は溜まりすぎれば危険なんだ。自我を崩壊させ間違った方向へと人を導く。大半は怒りや憎しみの大本を殺しに行くんだけどねでも稀に『負の感情だけ』を大本に送る人間が現れる。でも『負の感情』を与えた人間にはそんな感情を送られても意味がない」

リアが首肯する。

「ように思われるけどね。さっきも言っただろ？ 与えられたものは体に溜まるって。もし『負の感情』を相当数の人間が一人に送った場合はどうなると思う？」

「『負の感情』が……あふれ出す……？」

「その通り。でも体内に溜まったものが溢れてもそれはずっとその人に憑くんだけ。そして、『負の感情』が視認できるようになったものがダルクだよ。ダルクは『人間を核』にして生まれた『自業自得の産物』なんだ」

「待ってください。じゃあ憑かれた人はどうなるんですか？ 憑かれただけなら助け出すことは――」

「できないよ。あれはもう人間じゃないんだから。『負の感情』つ

てのは『人間の一部分』なんだ。ダルクは人間の意志が作り出した怪物だ。ダルクは本能的に人間を求めている。憑かれた人がダルクになるんじゃない。ダルクになった時点でもう憑かれた人間はダルクに取り込まれている。だから、『人間に戻りたい』という願いが生まれ本能的に人間を襲っているんだ」

「なるほど…。リーナさんが言っていたあらゆる人の憎しみ、妬み、恨み、その全てが教会に集まってしまった。と言うのは、一体どういう…?」

「それは『感情の送信対象』が教会だったただだよ。なんで教会に『負の感情』が送られるのかはわからないけど。これでオシマイ。質問はある?」

「いえ、大丈夫です。しかし……………」

リズの言うことは信憑性がなく、どちらかと言えばオカルト系の話のようにも聞こえる。信じられる要素は一つとして存在しなかった。

しかし、もしリズの言ったことが真実ならばそれは『神秘』とも言えることだ。

「肉体の殻を捨て他人に憑依することで永遠の命を手にする…」

ふとリアはそう漏らした。

「何言ってるの?」

「いえ…さっき、『サーカス館』でアイアンさんと話していたことを思い出して」

「アイアンと? 珍しいね」

「ええ。そうだ、リズは『神秘』を信じますか?」

「有り得ない現象のこと? 信じるも何もオレは『使える』から」  
一瞬。リズに戦慄した。殺気を放つでもなく、敵意を放つでもない。リズに何故かリアは戦慄を覚えた。

あたかも、それが常識のように話すリズ。リアはそのとき、リズの本質が掴めた気がした。

（この人は…底が無いんだ。性格を読もうとしてもあなたは僕と似

ている節がありますね。無論、少し歪んだ相似点ですが…)

コンコン

ドアの奥で誰かがノックをする音が二人の耳に入った。

「……………どうぞ」

警戒は一瞬。すぐさま警戒を解き二人はドアのほうを見る。そこにはリーナが立っていた。

「あの…お二人は今…用事がございますか？」

「うん。オレはないよ」

「僕も今はありませんよ。どうかしたんですか？」

リーナは微かに震えていた。それに気づいたリズは少しだけ口元を緩め部屋へと招き入れた。

「いいよ。入ってきてても。ここなら安全だから」

リアよりも早くリーナの心中を察したリズにリーナは内心驚いていた。しかし安心したのか、体の震えは止まりリアの隣に腰を下ろした。

「すみません…私は普通の人よりも怖がり…なので、だから…」

「大丈夫ですよ。リズも言ったようにここは安全です。リズがいますし、頼りにはならないでしょうが…僕もリーナさんの盾にはなれますから」

リアの微笑はすべてを許してくれるようなそんな慈愛に満ちた笑顔だった。

そんな中、リズは窓の外に視線を向け苦い顔を浮かべていた。

「どうしたんですかリズ？」

「……………雨が降るね」

どこか、怒気を孕んだようなリズの声。リズの予言を聞き窓に近づき空を眺める。

空の色は気持ちすら暗くさせるような灰色。まるで、教会を『闇』で覆い隠さんとしているようだった。

## 第二幕：一・真否なる神秘（後書き）

リア・ロウズ（略・リア）「ひさしぶりなキャラクター会話劇です！」

リズ・アルカナフィン（略・リズ）「へええ、これが会話劇か。あ、どうも」リズ・アルカナフィンです」

リア「おお、何やらテンション高めの人が出てきましたね。よろしくお願ひします」

リズ「こちらこそどうぞよろしく」

リア「はいよろしく」でわでわ！ 自己紹介をしてもらいましょう」

リズ「さっきも言ったとおり俺はリズ・アルカナフィン。身長は156。体重は42gだよ」

リア「ほおほお。42『グラム』ですか」

リズ「42kgでした」

リア「今回は楽しいですね。じゃあ趣味は？」

リズ「趣味や好きなもの、嫌いなものは秘密です」

リア「ほおほお。それは何故！？」

リズ「作者が何も考えてなかったらしいです」

リア「ひどい話だ」

リズ「まったく」

リア「でわでわ気を取り直して！ 第二幕が始まりましたが…今回はどんなお話なのでしょう？」

リズ「そうですね。リアの心の成長や仲間の大切さ。裏切りや葛藤…そんなこんなが詰まったお話です！」

リア「おお！ 難しそうですね」

リズ「まあ、今のはすべて嘘ですがね。本当はリアのダメダメっぷりがわかる作品ですよ」

リア「嘘ですか…『嘘はつかない』ってのが特徴を聞き及んでおり

ますが…」

リズ「作者曰く、会話劇ではキャラが壊れるほどに楽しんだほうがいいらしいです！」

リア「そうなんですか…どこまでも適当ですね。蒼炎鬼は…」

リズ「そうですね。時間が来たようです。次回を…」

リア&リズ「お楽しみに…」

## 二：深き『闇』

ポツ      ポツ

窓から聞こえる不規則な雨音。それを聞いてリズは言葉を発する。  
「やっぱり降ったね…」

どこか怒りを孕んだリズの声。リアはそれを快くは思わずに口を開いた。

「リズは雨が嫌いなんですか？」

「どうしてそう思うの？」

「リズの声に怒気が含まれている気がしたので」

リアの台詞にリズは目を見開いた。しかし、それは驚きから来るものではない。

ひどく小さい溜め息を吐きリズは口を開いた。

「雨は…好きじゃないんだ」

「でも…嫌いでもない…ですか」

「よくわかってるね。オレは雨の日に…」      をしたから…」

一番大事な部分を聞き取れない音量で話しリズの視線は窓に向きなあった。

（割り切ったはずなんだけどな…なかなか慣れないんだね…）

どこか悲しみを背負ったような雰囲気のリズに、リアはかける言葉が見つからず眼鏡を外し、溜め息をついていた。

急にリアの服の袖が引つ張られる。先程から座っていたリーナだ。

「あの…リアさんはいつも敬語なんですね」

どこか恥じらいのある声だった。リアに一目惚れでもしたのかリーナの頬は赤く染まっていた。

「ええ。砕けた話し方は相手に対して失礼だと思っているので」

「そうですか…。…あの、リアさんは…」

必死に言葉を探すリーナ。その姿は可愛らしく思わず抱きしめたくなるような姿だった。

リアはリーナに微笑む。それだけで彼女の顔は真っ赤に染まり視線を地面へと落としてしまう。

「リア。ホストのほうに向いてるよ。なんでわざわざウチのギルドに入ったの？」

悪戯な笑みを浮かべてリズが聞いた。リアは考える間もなく即答する。

「僕は自由に生きたいですから。誰かに縛られるのは嫌なんです」  
微笑を崩さずに答えたリア。しかしリズはその答に満足せず、またしても窓に視線を向けた。

（なぜあんなに空を見てるんでしょうか…？）

「リアさん…あの、私はもうお部屋に戻りますので…」

少し残念そうな顔を浮かべ、リーナは立ち上がる。

「送りますよ。少しの距離ですけど用心するべきでしょう？」

扉の前まで歩きドアに手をかけたリーナは振り向き、戸惑っていた。

「そういうわけですので、リズ。行ってきますね」

「……………」

窓に視線を置いたまま右手をひらひらと振るリズ。リアはリーナと共に部屋を出た。

「リズは神秘を信じますか？」

不意にリアの問いが頭をよぎった。リズは口元を緩ませ、静かに口を開いた。

「『神秘』は『サーカス館』では君以外の誰もが使えよ。リア…」

リズの言葉は内と外を隔てる窓に飲み込まれていった。

\* \* \*

教会の廊下は大して広くもなく細くもないごく普通のスペースだった。しかし、リアは『何か』を感じ取っていた。それは自分だけが感じたものなのか、それとも隣を歩いているリーナも共に感じて

いたかはわからない。しかし、わかることは只一つ。この空間には『何かが在る』ということだけははっきりとしていた。

「リアさんは…リズさんのことをどう思っているのですか？」

不意にリーナから問いかけられた。リアはそれほど長い時間ではないが考え、答えを導き出した。

「仲間…と思っっていますよ。こちらには来ていませんが、あと3名ほど仲間がいます」

「仲間ですか…私にもいました」

俯いたままリーナは続ける。

「同じ修道女でした。神に純潔を捧げ共に神に従うことを…でも…彼女は………」

嗚咽を堪えリアと繋いでいる手すらも握り締めながらリーナは言葉が続けていた。

急にリアは足を止めた。

「リア……さん？」

リアはリーナを抱き寄せた。その行動はリーナにとっては完全に予想外で、頬だけでなく耳まで真っ赤に染めている。

震える体を抱きしめたリアは同情の震えを堪え口を開いた。

「辛かったでしょう…でも僕たちが必ず『闇』を…ダルクを討つてみせます」

「リアさん……」

顔を上げたリーナは頬に涙を流していた。リアは人差し指で涙をふき取り微笑む。

「あなたになら…私の純潔を…」

リーナの顔がリアに近づき唇が触れ合う。ほのかに香る香水の香り。ほんのりと湿った唇。しかし、それで終わりではなく、リーナは自らの舌をリアの口にねじ込んだ。官能的な舌の動き、そこから漏れるリーナの甘い吐息はリアの思考力を失わせるには十分だっただろう。しかし、思考力が失ったリアは本能的に彼女を襲うことはなかった。いつまでも続く接吻は徐々にリアの思考力を回復させ

ていった。

唇を離したリーナはどこか恍惚の表情を浮かべリアと対峙している。

「よろしければ：夜は、私の部屋に」

「騙されるんじゃないよ！」

勝気でハスキーな声。その声には聞き覚えがあった。廊下の奥に視線を向けるとそこにはレンナが立っていた。痛々しい右腕の包帯は肩辺りまで巻かれている。息を切らして立っている姿を見る限り彼女は急いでここにきたのだろう。

「レンナさん！　あ、レ、レンナ！」

慌てて言い直すが今はそのことすらもレンナにはどうでもいいことらしい。レンナの双眸はすべてを穿つかの如く鋭い視線。その視線の先にはリーナがいる。だが、レンナのあんな鋭い瞳はリアは見たことがなかった。まるで、仇を見るような、どこか、復讐者のような瞳だった。

レンナは口を開くが、彼女の口から出た言葉はリアには信じられないものではなかった。

「リア：そいつが『ダルク』だ！」

瞬間、リアの体はレンナのはるか前方、リアからすれば後方へと引き寄せられた。リアを引いたのはリーナだった。

「ぐ……！！！」

服を引っ張られ首にかかる圧力は人間のものではなく巨大何かが服を引きちぎらんかのようにだった。

「リア！」

レンナは女とともに前方の闇へと姿を消したリアを追った。

\* \* \*

「だから甘いんだよ……リア。甘えを捨てる。目を逸らすな。現実を凌駕しろ。神秘にたどり着くんだ……」

リズは先ほどと変わらずに窓の向こうの雨を見ている。だが、口元は可笑しそうに柔らかく歪んでいる。その顔は窓に映り自分の顔を見ることができた。

「俺とリアの笑った顔は似てるんだね…フッフ」

リズは笑っていた。さも可笑しそうに、無邪気に。だが、その笑いはきつと嘲笑<sup>わら</sup>っていることと気づけるのはもう一人の笑顔の持ち主だけだろう。

\* \* \*

「リーナ…さん、ゲホッ!!」

首にかかる圧力は無くなり細くなっていた気管が戻り空気を大量に取り込んだ。リーナの顔は闇に紛れて見ることはできないが、もはやそれがリーナと思えることは無かった。

彼女の周りから立ち込める黒い霧のような『何か』。清楚な雰囲気など微塵も無く今は体を求めてさ迷う娼婦のような荒く甘い息遣い。

そこにいるのは文字通り『闇』に堕ちた修道女だった。

「私は…いままである欲望に蓋をしていました…それはとても罪深きこと」

リーナの『体のどこか』から彼女の声が聞こえた。

「そう。私は神に従う…はずだった。でも…わた…し、は…」

「リーナさん！ 気をしっかり持ってください。あなたは友人と神に全てを捧げたのでしょ。う。ならば、あなたには」

立ち上がりリーナの肩があつたであろう部分をつかむリア。諭そうとするが彼女には『闇』が憑いている。そのとき、リズの言葉を思い出した。

「ダルクは本能的に人間を求めている。憑かれた人がダルクになるんじゃないくてダルクになった時点でもう憑かれた人間はダルクに取り

込まれている。だから、『人間に戻りたい』という願いが生まれ本能的に人間を襲ってるんだ」

何かが頭に引つかかっていた。あの時リスは『人間の意志』がダルクを生み出すといていた。そして、『ダルクになった時点で憑かれた人間はダルクに取り込まれている』ともいていた。ダルクに形が無いと推測するならばここにいるのは、『ダルク』と言うのは『生霊』ではないか。

その小難しい考察は体ごと『黒い鞭のようなもの』で引つ張られてきた道を返された。しかし、それでもリアの考察は終わらない。（生霊の集合体なんだろうか…でも生霊が一人の人間に憑くということが在りえるんでしょうかね？ いや、現にこうし在りえているんですから在りえてるんですね。しかし、なぜリーナさんがダルクに憑かれたのでしょうか？ いや、そんなことは後で考えましようか…それより今は、どうやってダルクの動きを封じるか考えないと…。図を使うのもいいですね…本能的に人間を襲うのなら獣より楽ですけど、畏がありません）

「うわっ！」

急に背中に何か当たった。いや、当たったというよりは衝突のほうに正しいのかもしれない。リアの足元にはレンナが倒れていた。

「レンナさ…だ、大丈夫ですか？」

「『さん』付けで呼ばなくなったら大丈夫だよ」

「それだけ言えるのなら大丈夫ですね…フフ」

やさしい微笑を浮かべリアは服についた埃を払いレンナに手を差し伸べる。

「行きましょう。ダルクの『確保』に」

レンナの眉が一瞬だけ反応した。

「『確保』？」

「ええ、『確保』です」

深いため息をつきレンナはリアの手を払って立ち上がった。立ち上がったレンナはリアに視線を向けるがどこか冷たい視線だった。

「あつそ、じゃあ頑張つて。あたいは目的が違つから」

「え……レンナの目的は何ですか？」

「ダルクの……だよ」

「え、すいませんがもう一度言ってもらえますか？」

「『抹殺』」

リアは生涯初めて血の気が引いた。全身が寒くなり感覚は鈍くなるが心臓の鼓動だけは妙にはつきりと伝わり体が心臓の鼓動に負けて揺れている感覚すら味わった。だが、リアは表情を変えずあくまで微笑を浮かべて口を開く。

「わかりました。では一緒に行きましょう」

「あんた聞いてなかった？ あたいはダルクの……」

「聞いていましたよ。だから一緒に行きましょうダルクを『抹殺』するために」

急にリアの考えは変わった。いや、変わったというよりは『合わせた』のだろう。レンナの考えに。

レンナは信じられず聞き返す。

「あんたは『確保』が目的でしょ。なんで『抹殺』するの？」

「『確保』はあくまで可能ならばの仮定。それがだめならば『抹殺』するしかありません。危険かつ希少な獣は『確保』が第一条件ですがそれが無理ならば『殺す』必要に迫られるでしょう。違いますか？」

リアの言葉はレンナを諭すには十分だった。レンナはかぶりを振った。

「じゃあ、あたいの指示通りに動いて。準備するものがあるならさつさと持ってきてね」

「わかりました。では部屋から必要なものを持ってきます。先に行つていただいても結構ですよ？」

「もちろんそうさせてもらつわ」

「では『闇』でお会いしましょう」

レンナとリアは別れた。しばらくして、リアは足を止め苦しげな

表情を浮かべていた。

「僕は、たとえ『闇』に堕とされた人でも…助けただけなんですよ。レンナ」

リアは仲間には決して見せない表情をし、俯いたままリズのいる自室へと走った。

### 三：思いは『闇』へ…（前書き）

小説家になろう〜秘密基地〜にリア、リズのイラストがあります。  
描いてくださった黒雛 桜様ありがとうございます。

なお、今はアイアンとレンナを描いていたみたいです。

### 三：思いは『闇』へ…

「ふーん。で、俺に頼みに来たんだ」

どこまでもつまらなそうにリズはリアの要望を聞く。リアがここに到着したのはついさっき。息を切らしながら扉を開けリズに協力を申し立てたのだ。

しかし、リズは聞き入れる気はなさそうだ。

「何故ですか？」

「レンナが来てるんならレンナに任せればいいじゃん。俺は弱い者いじめはしたくないの」

「弱い者……いじめ」

リアはこの少年に恐怖した。リアは体験している、ダルクの力をその身に受けたことのあるリアは信じられなかった。服を引っ張られていたからよかったものの、もしそれが首を握っていたら、と考えるだけでも恐ろしい怪力だった。そして自分を瞬時に連れ去ったあの瞬発力。だが、リズはそれを知らない。いや、知っていてもリズは、この少年は今と変わらずつまらなそうな顔をしてこう言うだろう。

「レンナが殺してくれるから大丈夫」

徹頭徹尾狂うことなくリズの答えはリアの考えと合致した。

リアの喉を何かが嚙下する。切らした息は元に戻り、リアは掛けていた眼鏡を外す。

「わかりました。ではレンナさんにお任せしますよ…僕は、僕には…『殺す』なんてこと出来ませ

「いつまで甘えるんだ…？」

リアの耳にはリズのつぶやきがはつきりと聞こえた。それを聞いた上で彼は聞きなおす。

「甘える…？」

「聞こえた…？ なんでもないよ。いつてらっしゃーい」

どこまでも子供じみた無邪気な素振り。リアにとってはどちらがいつものリズなのかということはわからないが一つだけわかることがある。

リズは今回は協力してくれないということが。

「わかりました。行つてきます」

踵を返しリアはドアノブに手を掛ける。だが、ドアノブに手を掛けた手はピタリと止まりリアは前のめりに倒れた。

「あれ…力が入らない？」

「どうしたのリア？」

「いえ、何か急に力が抜けて…」

必死に力を入れようとするが体には何の命令も出来ない。一方、脳はいつもと変わらずに動いている。おそらく、脳から発せられる電気信号が四肢に行き渡っていないのだろう。

「もしかして、ダルクに触った？」

「え、触りましたよ。その時はリーナさんの姿をしていましたから」「そついえばそうだったね。ま、深いところまでは侵食されてないから意識を強く持てば大丈夫だよ」

（深いところ？ 侵食…？）

リアの脳に新たな疑問が浮かび上がった。ダルクの事柄に関する脳内レポートは既に十数枚になるつかという量だ。

曰く、ダルクとは？

曰く、闇とは？

曰く、侵食とは？

曰く、負の感情。人間の意志。生霊とは？

そして、『人』とは何か…。

様々な疑問が脳を行きかう中リアはリズによって部屋の隅に運ばれた。

「ありがとうございます」

「礼はいらない。たぶん今日一日は動けないからそこにいてね」  
感情がない声、とでも言えいいだろうか。リズの声はただの音

の羅列にしか聞こえない。しかし、リアにとっては『それで十分だった』。

「すみません……」

「……………」

リズの姿は部屋から消えた。

（あなたは『昔』から何も変わりませんね…）

リアは無意識に思った。口には薄く笑みを宿しながら。

\* \* \*

「ただいま」

ほどなくしてリズとレンナは戻ってきた。傷どころか埃すら服にはついていない。

「リーナさんはどうなりましたか？」

一歩気になって聞いていたことを聞く。しかし、その答えはリア自身、よくわかっていた。だがそれでも、聞かずにはいらなかった。

レンナは言った。

「あたいらが殺<sup>け</sup>したよ」

リアはその言葉を聴き自らを悔いた。助けられなかった憤りが体を駆け巡る。

「死んだものは元に戻すことはできないよ。それは機械も人間も同じだよリア。割り切れ。でないと…潰されるよ」

リズの言うことはいつも正しい。それはリアが一番知っていた。

誰よりも観察力・洞察力が優れているリアにとっては嘘をついたかどうかなど、簡単に見極められる。この1ヶ月、リアと、アイアンと、レンナと、ワイズ。4人と暮らしてわかったことは多くはないがリズ以外の3人の性格。リズとの歪んだ相違点。そして、リズは嘘をつかない。ということだけはリアは知っていた。でも、知っていたからこそリアをそれに抗いたくなった。表情を変えず、口は薄く緩め、微笑の仮面を被りながら、どこまでも愚かに。どこまでも

滑稽に。

「そうですね。わかりきっていたことでした」

「今日はここで休んで明日の朝早くにギルドに戻るよ」

リズの提案に逆らうものはいなかった。

「リア。何処かに行くのかい？」

レンナの視線の先には壁に手をつき何とか二足で立つリアの姿があった。

「ええ。体も動くようになったことですし、少しこの教会を探索しなくなりまして……」

「以外に子供っぽいところもあるんだね。なんかそんな風には見えないけどな……」

「少しは童心に返らないと生きる楽しみが失われてしまうんですよ」  
びっこを引きリアは部屋を後にした。その姿はどこか悲しみに包まれ、後姿だというのに泣いているように見えた。

「嘘が下手だね。リアは」

「あんたは嘘をつかないけどね」

「正直に生きてるんだよ。俺は嘘をつけないから。嘘は………下手だから」

また窓に視線を送るリズ。その姿もリアと同じで悲しみに包まれていた。

レンナはリズをそっと抱きしめた。

「無茶しちゃだめだよ。さっきだって…なんで『使った』んだい？」

「リアが見てなかったから。彼はたぶん…何も知らないからね」

温かい腕の感触がリズの首に絡まる。姉弟のような、親子のような姿だった。

\* \* \*

「確か…こっちははずでしたね」

四肢の命令伝達は75%ほど回復を見せていた。しかし、右足だ

けは動かない。びつこを引く足はまるで超重量の重りをつけているかのように動かない。リアは必死に体を動かしリーナを探す。もう、この世にいないことをわかりきっているはずなのに。

「あれだけ優しかったリーナさんを殺すなんて……リズならしない。するわけがありません……」

じゃあレンナは？

ひとつの疑問が浮かび上がる。レンナはリーナを知らない。否、知っているはずがない。彼女は自分とリーナが接吻していたところしか見ていない。自分としては誰にも見られたくないところだったのだが、それはもう過ぎてしまったことなので今更悔やんでも仕方ないことだ。レンナは、レンナならリーナを殺せる。結論としては『彼女はリーナの性格を知らないから』。

いや、もし知っていたとしても彼女はリーナを殺すだろう。

理由としては簡単だ。自分たちの目的は『闇を払う』こと。最小限の犠牲は払ってでも『闇を払う』ことが自分たちの最終目的なのだから、それがもし、自分やリズに憑いたとしても彼女は、いや彼女だけでなく『自由人』の仲間仲間であつたものも簡単に殺すだろう。

想像するだけでも気分が悪くなってきた。

「きつと生きているはずです。きつと……きつと……」

己を動かす魔法の言葉。否、自分を操る呪詛の命令だ。リアは在らぬ希望を呪いのように吐きながら必死にリーナと接吻した場所を目指す。

## 終幕：四；『闇』の中の光

数十分後、リアは部屋に戻ってきた。その姿を見てレンナ、リズは何も言わない。

「……………」

何も告げずにベッドに横になり眠りに着くリア。二人は何も言わない。

「……………」

静かに眠るリアを見つめ続けるレンナ。彼女は何も言えない。

「……………」

窓の外の空を見続けるリズ。彼は何もしない。

「あなたたちは…人間ですか」

不意に聞こえたリアの声は怒りを孕んでいた。彼は怒っている。何に對してかは不明だが明らかにその感情は怒りをもっている。

「どうだろうね。リアはどう思う？」

素っ気無く返すリズ。その答えに更に腹を立てたのかリアはベッドから起き上がり口を開いた。

「質問に質問で返さないください！ 僕が聞いているんです…！」

「何に對して起こってるんだ？ 俺たち？ レンナ？ 俺？ 違うよね…。」

1オクターブ低いリズの声。その声を発するときには大体は説明などだが、時より本気で起こる際にも声は低くなる。

「……………」

「何故何も言わない。本当は気づいているんだろ、怒りの矛先を向ける相手が違うってことに。でも、結局は我が身可愛さのために相手に答えを求める。それは自分で解決する問題だ。違う？」

鋭い視線はリアの体に突き刺さる。錯覚とわかっていてもリアは鋭い何かが喉元に突き立てられているように感じた。

「…わかつているんですよ。怒りの対象は…レンナさんでも、まし

てやりズでもないことなんて。でも……そうでもしないと……」

「潰されちゃダメだよ……」

レンナは左腕だけでリアを抱き寄せる。豊満な体は良質なクッションのように感じた。

「自分を責めちゃいけない。あんたは誰も殺しちゃいないんだろ。だから、今回の経験はこの上なく辛いものだと思う。でも、罪の意識に潰されちゃダメだよ。人生の先輩としてのアドバイスをあげる」

レンナは更に強く、だが優しくリアを抱きしめる。

「泣きたいときは泣けばいいんだよ」

「そんな……当たり前のこと」

リアは静かに眠りについた。

「ごめんねレンナ。俺はリアを怒らせることしかできなかった……」  
珍しくリズは自分から他人に謝った。よほど自責の念があったのだろつ。

それを見てレンナは微笑んでいた。

「何いつてんのさ。あたいらは仲間だろ？ 時には怒ってやることも必要さ」

「そうだね …… よし！ 今日のもう寝よう」

「そうね。そうしましょう」

レンナはリアをベッドに寝かせ自分はリズのベッドを占領した。

「おやすみ」

「あ！ ずるい……俺もベッドがいい！」

「もう遅いよ」

レンナはベッドに潜りこんだ。それを見ていたリズは渋々、壁に背をつき眠りに入った。

「おやすみ……リア。おやすみ……レンナ」

\* \* \*

真夜中、光はなく闇しかないワノールの噴水広場。そこには一つ

の人影があつた。

「大変ですね。この時間は誰もが寝ている。なのに僕は起きている。本来いてはいけないはずの僕が……。さて、僕はいつ『到達』したんですたっけ？ 急ぎましようかね…フッフ」

光無き広場には不気味な笑い声が響いていた。

終幕：四；『闇』の中の光（後書き）

気軽に評価、感想、指摘などがあると嬉しいです。

### 第三幕：一・進化

「……………」

酒場『自由人』の隅の席でリアは何もせずに座っている。

教会の『闇払い』の依頼から1週間がたった今でもリアは一言も口を開くことはない。

「リア…何か食べるかい？」

当然、リアからの反応はない。今は慣れたものの教会から戻ってきたときのリアは痛々しく、思わず目を覆いたくなるほどに憔悴していた。だが、それでも彼は何も口にせず<sup>うすくま</sup>にただ酒場の隅で膝を抱え蹲<sup>うすくま</sup>っている。

「放っておいたほうがいいよ。今はその方が……ね」

どこまでも愛らしい笑顔。ギルド『サーカス館』のギルド長、リス・アルカナフィンは右腕に包帯を巻いた女、レンナ・ノルイに笑顔<sup>うすくま</sup>を向け言った。

「だが、実際のところどういうことじゃ……？」

リアには聞こえないように小声でレンナに問いかける老人。ワイズ・コロファはリアに視線を向けた。

「わかんないんだよ…あたかも詳しいことは。でも、多分……教会で何かあったんだろうね」

当事者のレンナは口ごもり、真実を語ろうとはしない。それはリスとて同じことだった。

以前、ワイズはリスにも同じ事を聞いたが、

「俺は必要なことを言っただけだけ」<sup>うすくま</sup>と言われた。勿論、それだけのことで真実が映し出されることはなく、無論、真実を自らの手で見出すことは不可能だ。

「でも…そろそろ本題に入ってもいいんじゃないか？　なあ、ギルド長？」

我慢できない。と言ったようにリアとは違う位置に座り酒を飲み

続けている男、アイアン・ラッサムはリズに言った。

「そうだね。リアのことも気になるけど…まずは1番大事なことを話そうか」

リズの雰囲気が変わる。先程までは本当に無邪気な、年相応な少年だった。今は違う。外見は子供だが雰囲気は子供ではなく、雰囲気は大人だが外見は大人ではない。どこか矛盾を感じてしまう雰囲気。静かにリズは口を開く。

「1週間前。俺はリアと教会に行ってダルクを見つけた。まあ、見つけたのはリアとレンナだったけどね」

レンナが首肯する。リアは話を聞く気がないのか、未だに酒場の隅にいる。

「あたかも一瞬、戸惑ったよ。なんせ、ダルクが『見えなかった』んだから」

「見えなかった？　どういうことだ？」

不思議に思ったのか、アイアンがレンナの言葉に問う。

「そのままの意味。あたいはリアと女がいちゃついている様にしか見えなかった。女がダルクだったなんて考えもしなかった。でもね、女の目を見て理解した。『この女はもう死んでる』ってね」

「ではダルクは…『死人にとり憑いた』とでも言うのか？」

今度はワイズがレンナの説明に口を挟む。だが、実際ダルクを知るものならば誰もが問いたくなるものだ。ダルクは『負の感情』を一身に受けた人間。それが何故死体に憑くのか、それは誰もが疑問に思ふこと。

レンナは続ける。

「話を続けるよ。あたいはリアに『そいつがダルクだ』。って言った。すると女はリアを引っ張っていった。人質にするつもりだったんだろうね」

「本来、ダルクは人間を見たら本能的に襲うよ。それはみんな知ってるよね？」

首肯はせずとも全員は理解していたらしい。先程までの雰囲気と

は違い、重苦しい雰囲気<sup>おほつき</sup>が皆を包んでいる。リズは話を続けた。

「でもその女はリアを襲うようなことはせずにそのまま連れ去ったんだ。理由はわからないけどそれには知能があっただんだ」

「信じられんな…感情が知能を持つなど」

「うん。俺も信じられないよ。今まで駆逐してきたダルクは直線的な攻撃をしてきたから倒すのは簡単だった。でも、この前のは知能を持ってたんだ。明らかに、ダルクは進化してる」

「それは考えすぎなんじゃないでしょうか？」

少し疲れた雰囲気<sup>おほつき</sup>の声、その声の主はリアだ、目の下には隈<sup>くま</sup>が作られている。恐らく、1週間寝ていなかったのだろう。覚束<sup>おぼつか</sup>ない足が『それ』を語っている。リズ以外の全員がリアを見るが、リズはリアを見ずに問う。

「どうしてそう思うの？」

「逆の発想ですよ。『ダルクが意思、または知能を持った』ではなく『ダルクによって死人が一時的に蘇生され自由に動けるようになった』と仮定してみただけです。『負の感情』は人を凶行に駆り立てます。それは、生きている者の行動ですから行動力にもつながるわけです。そのせいで死人が一時的に蘇生され、死人の感情の容量を『溢れさせる事がなかったら』と考えてみただけです。ですが、リーナさんは常に注がれる『負の感情』をあの場で溢れさせてしまった。と思ひまして…」

リアの推理、否、想像はどこか真に迫る言い方だった。話の流れは完全に芯が通り、結論が証明できずともその場にいた全員を納得させるには十分な威力があった。

「実は…この1週間、ずっとそのことを考えていたんですよ…。脳だけを稼働させて他の事は手に負えなくなってしまうって…申し訳ありませんでした」

頭を下げるリア。それは彼女にとっての精一杯の謝罪だった。皆が小さいため息を漏らす。

「別にいいよ、気にしてはいたけどあんた何も聞いちゃくれなかつ

たしね」

「そうじゃな。ワシらも怒りはすれど行動に出ることはなかった。故に今、罰を与えたいがな」

「おう。それには大いに賛同するぜ爺さん。なにをしてやろうかあゝ？」

「とりあえず、おつかいってことで、よろしく」

リアは謝罪をし終わった後、強制的な贖罪おっかいをさせられた。苦笑を顔に浮かべながら買い物に出かけていくリアの背中を3人は見ていた。例によって、リズは興味無さげだ。

「何故ワシらには逆の発想がでなかったのじゃろうな……」

「オレにはそんな頭がねえからでてくるはずがねえな」

「あたいはあそこでリアが出てくるとは思いもしなかったよ」

「別にいいんじゃない？」

リズの言葉は3人を振り向かせた。

「リアが元気になったんだし。ね」

「そう……だね」

「う……うむ」

「おう。あいつはオレたちに必要な存在だからな」

「俺はいつかリアに全部話そうと思うよ。俺たちのことを……全部……ね？」

悲しげな瞳はリズの顔には似合うものではなかった。

静寂が辺りを包み込んでいた。

### 第三幕：一・進化（後書き）

リア「今日も元気にいってみよー      リアの会話劇！ ドンドン  
パフパフー」

アイアン「何だここは？      酒がねえ。帰る。」

（アイアン退場）

リア「ええ〜……………帰っちゃったよ。どうすればいいんだろ？」

レンナ「やれやれ……………あいつは昔から自分勝手だからねえ」

リア（略・リ）「あれ？      あなたは？」

レンナ（略・レ）「あたいはレンナ。レンナ・ノルイだよ。身長・  
体重・スリーサイズは秘密。女は秘密が多いほうがいいのさ。さっ  
きの茶髪はアイアン・ラッサム」

リ「……………た、頼んでもないのに自己紹介してくれました！ レン  
ナさんですね。フムフム。で、アイアンさんとはどれくらいの仲な  
んですか？」

レ「あいつは……………まあ、そこそこだよ」

（レンナ赤面）

リ「いろいろと深そうな仲ですが……………あえて聞きません      それで、  
今回のお話はどんな内容なんでしょう？」

レ「そうだねえ。一言で言うなら……………『序章』的な話かな？」

リ「序章、ですか？」

レ「意味があるかもしれないし、ないかもしれない。そんな内容の  
話だよ。ま、読んでいけばわかるけどね」

リ「そうですかあー      では、お時間が来たようです。次回もお楽  
しみに〜」

レ「そういえば、ワイ爺が活躍するとかしないとか……………」

## 二：邂逅

「とりあえずはこれで終わりですね……でも、アイアンさんは怒るでしょうね」

やれやれといった雰囲気ではリアは両手に買い物袋を下げている。その中身はワイズからのお使いの品の本数冊、レンナからのお使いの食材。そして、一番軽いはずが量が多すぎるために一番重いリズのお使いのお菓子だ。買った物を見たところリズは甘いものが好きらしい。その証拠にチョコやキャンディが多い。だが、問題はそこではなかった。リアの最大の疑問点はその量にある。12歳の少年がこれほどの量を食べきれるのが謎だった。

「リズならきつと食べるでしょうね……。でもキャンディ20本も買うのは恥ずかしかったですねー……」

一人小声で『自由人』への帰路を歩くリア。そこで彼は不思議な『モノ』を見た。

身長はリズと同じか少し小さい程度の子供。それだけならどこにでもありそうな景色だ。しかし、その子供は大人が数人でようやく持つような黒棒を片手で持っていた。黒棒の先端には大きく弧を描いた鎌が付属している。もちろん身長が足りないために柄の部分は地面を擦っている。

よく観察してみると鎌の刃の先端には赤い液体が付着しているようにも見える。見て見ぬ振りをして、リアは少年とすれ違う。

「見つけた……………」

静かに、だが確実にその声はリアの耳に入った。自分の顔面に迫り来る大鎌はスピードを上げリアの頭上を裂く。もしリアが屈んで避けていなければ今頃は口から上を地面に落としていただろう。

一瞬にして身の危険を感じ取ったリアは、体勢を戻しワノールの町を疾駆する。だが、両手には荷物がありうまく走れない。助けを呼ぼうにも恐らく、こんな凄惨な追いかけっこを助けてくれる善良

な人はいないだろう。それ以前に、周りには人という人はいなかった。意を決しリアは一人で襲い掛かる少年から逃げる。

「僕は…あまり…体力…は……ないんで…すよ」

何かに助けを求めることもせずにリアは駆ける。少年は息を切らすことなく黒棒を地面と水平に下げ、まるで滑空するが如くリアを追う。少年の顔は黒のフードで隠されて見ることはできない。だが、時より見える瞳は爛々と赤く輝いている。まるで紅玉ルビーのような瞳。

「死ね……ピエロ」

残像を引きリアの前へと少年は現れる。地面と水平に構えていた大鎌はリアの脇腹を一瞬のうちに貫通し先端は反対方向から突き出ていた。

「生憎…僕は死ぬわけにはいかないですよ」

リアの声は遙か遠くから聞こえた。少年が振り向くとそこには今自分が斬った人物が息を切らして立っている。

「なんで…」

「さあ、何ででしょうかね。では、もう二度と会わないことを願います」

おどけた口調で言ったあとリアは逃げるように足早にその場から消えた。

「ピエロ…全てを識りつつ無知の振る舞い。世界が愛し、世界を憎むモノ。古より変わることはない姿は、月下に映え、闇にて輝け…」

少年はその場から存在を消した。去り際に残した言葉の真意はわからない。

「リア。君は俺より道化だよ。君の物語、存分に楽しませてもらうよ」

先ほどまで少年の立っていた場所にはリズが立っていた。口元には薄い笑みを浮かべて。

\* \* \*

「遅れました…フウ…」

「おせえ！　いつまで待たせんだよ。で、酒は？」

アイアンがリアに頼んだものは酒だった。それも一本ではなく『二箱』というかなりの無茶ぶりだ。

「後で店の人が持つてきますよ。さすがに二箱は無理です…」

「じゃああたいらの分は買ってきたのかい？」

レンナは邪悪な笑みを浮かべてリアに問うた。

「買い物袋を見せ、リアは口を開く。

「ご安心を。しっかり買ってきてますよ。ワイズさんは本でしたよね。それに、レンナさ………すいません。レンナは食材でしたね。…

…あれ、リズは何処かに行ったんですか？」

「リズは二階で寝てるよ。『お昼寝の時間』』って言ってたから起こさないほうがいいよ」

忠告はしたからね。とレンナは最後に付け加えた。

「でも…今寝たら夜に寝れなくなりますよ？　起こしてきますね。チヨコやキャンディが溶けてしまうんで」

そう言うところではカウターの隣の階段から二階へと上がった。

『自由人』の二階は一階と大して変わらずカウターと出入り口を除いたら景色は同じだった。二階の一席ではリズがスヤスヤと寝息を立てて寝ている。素直に起こすのもいいがリアはいたずらを思いつき一階へと戻った。

「レンナさん。氷もらいますよ」

「『さん』づけはやめな」

もはや恒例になりつつある二人の会話。リアは苦笑しながら二階へと足を進める。

足音を消してリズへと近づく。右手には氷を握って。

そろりそろりと近づきリズの首筋に氷を当てる。すると、

「ふぎゃあああああ！」

まるで猫のような悲鳴を上げてリズが飛び起きる。しかし、飛び

起きたはいいがテーブルに寝ていたものだからそのまま床に落ちた。  
「おはようございます。リズ。こんな時間に寝たら夜に眠れなくなりますよ。それと、頼まれたお菓子を買ってきました」

そう言いリアは買い物袋をリズに手渡した。少し涙目になっていたリズだが買い物袋の中を見た瞬間、愛らしい笑顔へと変わった。

「うわー ホントにキャンディ20本買ってきてくれたんだ。嫌がらせだったのに……」

「……今何と？」

「いや、買ってきてくれたのは嬉しいけど……まさか本当に買ってくるとは思わなかったよ。ハハハハハ」

屈託のない笑顔がそこにはあった。ため息を吐き、リアは苦笑する。

「シャワーを借りますね。走ったので汗をかいてしまいました」

リズはキャンディを口に頬張って嬉しそうだった。一階に戻るとそこには酒の箱が積まれていた。配達されてきたんだろう、アイアンが無愛想な顔でサインをしている。

顔を動かすとワイズが買ってきた本を読んでいた。すでに本の虫状態。

今度は体ごと視線をカウンターの奥にある厨房へ。するとそこではレンナが何やら唸っている。きっと今晚のメニューを考えているのだろう。

リアを含めた全員は家がなく、ここに住んでいるのだ、そのために食事もここで作っている。作るのはほとんどの場合がレンナだがごくたまにリアも作る。どちらの料理も評価は高かった。

リアはゆっくりと店の奥にあるバスルームへ向かった。

（あれは何だったんでしょうね……？）

脳裏をよぎるのは大鎌を持った少年。赤く輝く瞳は綺麗ではあったが恐怖もあった。だが、何より不思議に思ったのは『自分自身』だった。鎌で斬られた感覚は『確かにあった』。上半身と下半身が別離したという実感もあったのに何故か『生きていた』。少年と距

離が離れた場所に自分は立っていた。

「さつきは何で助かったんでしょかね……？」

流した汗は新たに生まれた湯の流れによって落とされた。脇腹に違和感を感じ右手を添える。しかし、何もおかしいことにはなっていない。

「斬られたんですからね…普通は死んでいますよね……ゴホッ！」

急に咳き込むリア。口からは唾液とともに赤い液体が溢れ出した。シャワーによって排水溝へ流れる血液、それを見たりアは嘲笑った。

「今さらですか…ゴホッ！ ゲホッ……ケホッ……」

赤の奔流は口内を廻り溢れた赤は排水溝へと流されていった。

ただ空しく、湯は流れるだけだった。

### 三：襲撃（前書き）

不定期更新をお許してください。

最近の仕事が始まり更新が更に遅れますが長い目で見てやってください。

### 三：襲撃

「ふう……」

ホコホコと頭から湯気を出し、リアはカウンターに姿を現した。

「なんだ、風呂に行つてたのか」

「ええ。帰りに少し走つたものですから」

『少し』とリアは言つたがあれが少しではないことは本人が一番よくわかつている。

それを聞いたアイアンはリアに問う。

「走つた。走つた…ねえ、なんでだ？」

「え？」

「何で走つた？ 走つて帰つてくるほど道は暗くねえだろ。それに  
買い物袋持つたまま走る理由がわからねえ。何で走つた？」

アイアンの問いは正しかった。両手に買い物袋をさげたまま走れば、中の物が無事とは限らない。ワイズの本などは無事だと断言できるがレンナの食材はそうとは言えない。むしろ、無事と断言する  
ほうが無理な話だ。

リアは言葉を詰まらせることなく口を開いた。

「実は…ちよつと会いたくない人を見つけてしまつたんです。それで、見つからないように走つてきたんですよ。極力、買い物した  
ものには衝撃は与えないようにしましたから…大丈夫だとは思つんですけどね」

子供の言い訳に近い屁理屈だとリアは思つていた。しかし、彼の言うことには何故か信憑性が高い。リアの屁理屈にアイアンは納得したのか、何も言わずに酒を飲み続けた。

手持ち無沙汰になつたリアはレンナがいるキッチンに向かった。

「何か手伝いましょうか？ レン…ナ。」

「もつと自然に言えればいいのにね。今は別にないよ。リアと遊んでたら？」

少し残念そうにため息を吐き、レンナは手をひらひらと振った。リズと遊んでやれという意味なのだろう。リアはそれに従った。

階段を上がってふと気づいた。何故この酒場には二階があるのか、と。

（お客は来ませんし…、何ででしょうかね？）

そんなことを黙考しながら階段を上り終えたリアは視線を動かす。先程までリズがいた席には自分が買ってきた、否。買わされてきたお菓子の袋が詰まれているだけだった。リズの姿が見当たらない。

「おかしいですね。リズのことですからてつきりキャンディを舐めながらチョコでも食べていると思っただけですけどね」

「ひゃはあお　　ヒア、どほひはお？」

後ろを振り向けば、そこにはリアの予想通りの姿をしたリズが立っていた。口に含みすぎているために上手く話せていない。

「ダメですよ。立ったまま物を食べるのは。それと、口に物を入れたままだべらないことです」

「ん　　」

両頬をパンパンに膨らませながら笑顔で返事をするリズ。子供らしい素直な返事にリアは微笑む。

急に服の袖に引力を感じリアは前につんのめる。

「え？」

袖を引っ張っていたのはリズだ。「こっちへ来て」と言う意味なのだろうか。リアはそれに従い買い物袋が置いてある席にリアとは向かい合う形で座った。

「どうしたんですかリズ」

「はおえ、へえふひほ？」

「口に入れたまま喋らないでください。食べ終わるまで待ってますから」

急いで口の動きを早めチョコを咀嚼し飲み込むリアの姿はどこか小動物を思わせるすがただった。そんな姿を口元のみに笑みを浮かべリアは静かに見物していた。

すべてを飲み込んだのを確認したリアは再度問うた。

「それで、どうしたんですリズ？」

「ゲームしよう。つまないんだもん」

「ゲームですか。いいですよ、どんなゲームですか？」

「順番に数字を言っていくゲームだよ。20を言ったら負け。数字は一回に3までしかいえないからね」

実に単純なルール。それゆえに攻略法は無いと思われる。が、このゲームはマンツーマンでやる際には確実に勝てる必勝法が存在する。

「シンプルですね。じゃあ、僕から始めますよ。1, 2, 3」

「4, 5, 6！」

妙に張り切ってリズが数字を口にする。

「7だけです」

いたって冷静に、だが口元には笑みを浮かべたままのリアは一度だけ数字を口にした。

「ん……8, 9。どうぞ」

「そうですね……10, 11。はい、どうぞ」

少し考え、リアは数字を口にした。

「12。……13, 14！」

「15です。僕の勝ちですね」

「う……負けたあ！ アイアンとなら絶対に勝てるのに」

必勝法。それは『最後の数字の5つ前の数字を言う』こと。そしてもう一つは、『残りの数字を4の倍数に1を加えた数』にして相手に順番を渡すこと。前者は後者のように必ずできるとは限らないが、後者は数字が大きいほどに条件を満たし易く、条件を満たすチャンスが増える。相手に順番を渡し、数字が帰ってくる際に相手の言った回数を記憶しておけば確実に勝てるのだ。

相手が3回数字を言ったならば自分は1回。2回なら同じく2回。そして、1回ならば最初と逆に3回数字を言えば、負けはない。簡単な引き算だ。リアはこの手の問題は理数系の自分にとっては楽な

もの。むしろ、体力を使う行動の方が苦手なのだ。

数回ゲームを繰り返し、結果は言うまでもないだろう。リアの全勝である。

リズは地団駄を踏み悔しがっていた。

「なんでそんなに強いんだよ！」

「フフ、すいません。実は、必勝法が存在するんですよ」

「必勝法！？ 教えて教えて！」

「いいでしょう。リアにだけお教えしますよ。耳を貸してください」  
リアは必勝法をリズに教えた。さっきの方法を二人が知っているとなれば、この勝負は完全な『運』のみの勝負になる。規定の数字が4の倍数に1を加えた数の場合は後攻が勝ち、それ以外ならば先攻が勝つと決まってしまう。故に、このゲームは必勝法を知らないものたちが行くと盛り上がるゲームではあるが。知っているものたちが行くとどこまでもつまらないゲームになる。

リアに必勝法を伝授されたリズは意気揚々とアイアンに対戦を申し込みに階段へと走って行った。だが、階段の一步手前で彼は立ち止まりリアに言った。

「無理しないでね」

その言葉の意味が何だったのかはリア自身がわかっていた。だが何故、何故リズがそのことを知っていたのかまでは知らない。どこかで見ていたのだろうか。それはないだろう。彼はリアが帰ってくるまでの間、二階の、ちょうどこの席のテーブルで寝ていたのだから。

リズに恐怖を覚え、彼は二階のベランダに出た。『自由人』は無駄とも言っていいほどに広い。二階にはベランダがあり、そこからは噴水広場を中心に広がっていくワノールの街が一望できる。

優しい風がリアの銀系のような髪を撫で、撫でられた銀系は風が止むと同時に彼の首筋や耳を撫でる。心地いい風は一瞬で過ぎ去り、突如、突風がリアの顔面を叩く。

「んっ……！」

突風により眼鏡がずれ視界がぼやけた。だが、そのぼやけた視界の中ではつきりと『見えた』ものがあつた。本来なら眼鏡をかけていても視認できる距離ではないことをリア自身理解していたが考えるより体が動いた。瞬間、リアは体を真半身にずらし『襲ってきた者』を回避した。判断が遅れ、それによる行動がコンマ数秒遅れていれば、おそらく彼の頬は深くえぐられていただろう。

轟音が、『サーカス館』に響いた。

#### 四：逃走と反撃（前書き）

更新が遅れすぎていることをお詫びします。

#### 四：逃走と反撃

眼鏡を掛け直し店内に視線を向けるリア。そこには、先ほどまでいなかったレンナ、ワイズ、アイアン、リズが二階に立っていた。

「こりゃ……いったいどうだった？」

腰に挿してある短刀に右手を添えた状態で誰かに問うアイアン。

「さあね。久々に来たお客さんは窓からの不法侵入のうえに器物破損のおまけ付き。請求は高くつくよ」

さつきまで料理をしていたのか左手にはおたまを持ったレンナが言った。

「若いもんは物騒じゃな。まずは話し合いをするべきじゃよ。無論、動きを封じてからじゃがな」

左手にはリアが買ってきた本。右手には先端が渦を巻いている櫂<sup>かし</sup>の杖を持ちながらワイズは二人を制止した。

「けっこう強気なお客さんだねー。殺そうか？」

どこまでも無邪気に『殺す』というリズ。それは恐ろしくもあったが、リアは同情した。

「お菓子を滅茶苦茶にされたからって安易に殺してはダメでしょう？ あとでまた買ってあげますよ」

「ホント やったあ」

歓喜の声は一瞬で消え、リア以外の四人は。いや、リア以外の四人もベランダに出た。だが、四人はベランダに出るだけでなくそこから飛び降りた。ただ一人、リアを残して。

「ま、待つてください！」

リアの声は四人には聞こえることなく、彼らはワノールの街に消えていった。

取り残されたリアは恐る恐る再度店内に視線を向けた。そこには、予想通りと言うべきか、『ダルク』が『在った』。だが、教会で見るときよりも黒く、暗く、醜悪な雰囲気纏っており、外見は人の

それとはかけ離れてどちらかといえば獣に近い。数歩後ずさり、リアはベランダの手すりに捕まった、はずだった。

「……」

重力により体は地面に引き寄せられる。抗うことができるわけがなかった。在ると思っていた手すりは丁度、『リアが手をつける部分のみ』が切り取られていた。リアは瞬間的に犯人がアイアンであると確信した。

先程、アイアンは短刀に手を添えた。そして、ベランダへの滑空とともとれる跳躍。その瞬間、彼は手すりを切り取った。そして、今に至る。

元々、ベランダは脆い物だったのだろう。リアの全体重の付加に手すりは耐えることができずに木が折れる音が聞こえた。頭から地面に向かうリアは死を覚悟し瞑目する。

だが、衝撃は思っていたより無く頭ではなく背中と腰に衝撃を感じた。

「ったく。おい、ダイジョブか」

「アイアンさん……」

目を開けて視界に入っただのは腰まである茶髪を後頭部で一本に結わえた少し吊り目の男、アイアンだった。

「行くぞ。ここいらは戦<sup>ヤ</sup>りづれえんだ。場所を移す」

「はい。わかりまし……た」

そう言いながらリアはアイアンから降り彼の後を追った。後ろでベランダが砕けていく音が

聞こえたが気をとられること無く二人は走っていた。

\* \* \*

店内は凄惨な光景だった。椅子や長机は破砕され先程までリアたちがいたベランダは跡形もなくなっている。

店の中心には『獣』が浮いていた。四足で立ち、尻尾は無数の『闇』の触手。顔は無く、あるのは『異形』。『獣』は闇を引き五人を追った。

\*\*\*

リズ、レンナ、ワイズは噴水広場に来ていた。どうやら、アイアンだけが残りリアを助けに行ったのだろう。

「ここまで来れば大丈夫じゃないかな？」

息を切らすことなくリズは二人に問う。

「そうじゃな。それにこれほどの広さならばワシらも全力が出せる」  
リズ同様に息を切らすことなくワイズが言う。『自由人』から噴水広場までの距離は短いとはいい難い距離をワイズは走った。外見年齢は70以上はあるように見えるが、それを感じさせない運動能力がワイズにはある。

「でも…あいつは何をやってるんだい？ リアだって一人で逃げれるだろうし」

呼吸を整える様子すら見せずレンナは悪態をつく。どうやら、レンナはリアは一人で逃げられると考えて置き去りにしたい。おそらく、他のメンバーも同意見だったのだろう。

だが、アイアンは違った。リアを助けることを前提に行動していた。

「アイアンはぶつきらばうに見えて誰よりも仲間を信じるからね。アイアンが助けたってことはリアはもう仲間なんだよ」

「そんなものかねえ…」

リズの一言はレンナの機嫌を悪化させた。

「レンナは好きだもんね」

意地悪っぽく少し目を吊り上げてリズが笑う。それに反論するレンナの頬は赤い。

「好き！？ ち、違うよ。あたいは…リアだって成長してきてるだろうから…って思っただけ……で、アイアンがどうかは……ない」  
「アイアンとは誰も言っておらん。リズは『好き』としか言うたらん」

ワイズの一言が聞こえたレンナは鋭い眼光で彼を睨みつけた。だが、言われたことを思い返し直ぐに顔を紅潮させる。

「楽しそうだなオイ。オレがなんだって？」

ほかの三人と同様に息を切らすことなくアイアンは噴水広場に姿を現した。少し遅れてリアもアイアンの背後から追ってくる姿が三人は確認できた。だが、彼だけは息を切らし疲労困憊している。運動能力はお世辞にも人並みとは言えないリアだ。ここまで追いつけたことに賞賛の言葉でも送るべきなのだろう。

そう思ったのかレンナは無理に話を変えリアに近づき、四つんばいで地面に崩れ落ちている彼の背中をさする。

「大丈夫かい？ よく走ってこれたねえ、体力ついたんじゃないかい？」

「さす……がに……ここま……で、はしつ……て移動……は辛いで……す」  
途切れ途切れだが言葉を発するリア。それを見てアイアンは口を開いた。

「なさけねえんだよ。男なら体力あって何ぼだろうがよ！」

「アイアンさん……『適材適所』って言葉、わかりますか？」

「あ？ 知るか。爺さん、どういう意味だ『テキザイテキショ』って」

「簡単に言えば一番力を発揮できるところに人を配置する。ということじゃ」

「やれやれといった感じで肩をすくめワイズはアイアンに教えた。

「で、その『テキザイテキショ』が何だっ言っただよ」

「僕は肉体派ではなく頭脳派なんですよ。だから、あまり走るの得意じゃないんです」

呼吸は完全に整い、いつも通りのリアがそこには立っていた。

「そんなのタダの逃げじゃねえか」

正論である。だが、どう頑張ってもリアは体力などを鍛えることができない。鍛えたとしても既に体力の最大許容量は限界まで溜<sup>たま</sup>っているためにリアのこれ以上の体力増加はありえないのだ。

そんな会話をしているとワイズが杖を地面にたたいた。コツンという自分にとつては心地良い音だとリアは思っていた。だが、そんな考えは文字通り『闇』に飲まれる。

リア以外の全員がリアの背後、さっきまで自分が走っていた方向に鋭い視線を送っていた。振り向くのを一瞬拒絶しなくなったが、リアは立ち上がり眼鏡を指で掛け直した後、後ろを振り向いた。時間にして僅か二、三秒の動作は不意に首にかかる力によって中断され彼はアイアンの隣へと強制的に移動させられていた。

「今のつて……さっきのかい？」

「多分ね。でもまさかリアを狙うとは思わなかったけど」

「一番弱いやつから。とか思ったんじゃないのか？」

「『ダルク』に思考があるのか？ とすればワシらはどうすればいいのじゃ？」

皆、口々に言葉を発している。この場で冷静な人物はおそらく、『サーカス館』のメンバーだけだろう。噴水広場には多くの人間がいる。子供、大人、老人、男、女。様々な人間がいるが皆一様にココから蜘蛛の子を散らすように逃げた。

「でも…今は昼間ですよ？ 『ダルク』は昼は闇や影に潜んでるってリズは言いましたよね！？」

もつともらしい訴えだった。以前、リズは教会でこう言った。

『ダルクは日中は活動をしていない。文字どおり闇になってるから探索は夜にしないといけない』

と。確かにこう言ったのをリアは覚えている。

「言う必要はないと思ったんだ。稀に、ホントに極稀にだけ『ダルク』は日中でも活動できるタイプがいるんだ。オレたちは…『ブラット』って呼んでるけどね」

「『ブラット』？」

リアは聞き返す。

「『漆黒』<sup>ジ・ヘイト・ブラック</sup>を擦ったんだよ」

リズは答えずに代わりにレンナが答えた。

「漆黒に…闇ですか……」

リアの台詞には哀愁が感じられた。それを感じ取ったのはリスだった。彼はリアに問うた。

「どうかしたの？」

「いえ。少しだけ……いえ。何でもありません。ところで……」

顔を上げ立ち上がりアイアンが引つ張った所為で更にズレた眼鏡を右手で直し自分に突進してきた『モノ』が向かった先を見つめた。『あの『ダルク』はどうするんですか？』

彼が指差す方向には木に追突し体の半分をそれに貫通させて動けなくなっている『ダルク』がいた。

腰から短刀を抜きアイアンが数歩前に出る。

「じゃあねえな。俺が殺<sup>ヤ</sup>つてやるよ。直ぐに終わんだろ」

『ダルク』に近づくアイアンだがその足はワイズが目の前に杖を出していることで止まった。片方の眉を吊り上げ、アイアンは言った。

「何だよ爺さんよお？ まさかワシがやるとでも言うのか」  
「違う」

ワイズの声には今までにないくらいに真面目だった。次の瞬間、『ダルク』は変異した。

『ダルク』の体を覆う闇は突っ込んで身動きが取れなくなった木にも纏わり憑き巨大な化け物に変わった。

「変体したぜ…オイ」

「いや…それを言うなら変身だよアイアン」

アイアンの一言は一瞬にして場の空気を緩めた。リスがアイアンに教える姿を見ると何故か微笑ましい光景だった。

「何笑ってんだよりア」

「いえ。でも微笑ましくて。それと、アイアンさんが言った『変体』ですが、変体で正解ですよ。体が変わるんですから」

「そうか。ま、どうでもいいがな」

そんな会話をしている中、『ダルク』、否『ブラット』が動いた。

枝に纏わった闇は触手のようにうねり、全員に攻撃を仕掛ける。

ワイズは触手の動きを予測し触手の攻撃範囲を出て。

レンナは軽やかに動き踊るように触手を避け。

アイアンは短刀で近づく触手を切り裂き。

リアは一撃こそ喰らいはしたがそれ以降は最小限の動きで回避し、  
リスの周りには偶然にも突風が吹き荒れ、触手は近寄ることもできなかつた。

（あの動き…人間にできるもんじゃあねえよな）

近寄る触手をすべて切り落としているアイアンは『彼』を見て思っていた。

「ワシがやろう。少し下がってくれ」

片膝をつき、ワイズは杖を地面に優しく突き立てた。

コッソ。音を言葉に直せばきつとこういう音だろう。コッソという音がした杖の先からは波紋が広がった。一定距離に波紋が広がったのを感覚で確認したワイズは静かに口を開いた。

「地よ。我が意に従いて動け……従わぬならば、その命を閉じる。

風よ。我が意に従いて動け……従わぬならば、我が意により動け」

「あれは……『魔術』？」

リアはワイズの姿を見て単語を口にした。

『魔術』。それは創造期前半に生み出され、創造期後半にほぼ滅びたといわれる人類が初めて人工的に生み出した『神秘』だった。

ワイズの周りの石畳が宙に浮き、高速で回転し『ブラット』に向かつていった。

聞こえた音は風を切る鋭い悲鳴<sup>おし</sup>だけだった。

## 五：追走（前書き）

1ヶ月更新ですが読んでくれるとありがたいです。感想、評価、指摘をお待ちしてます。

## 五：追走

「すごい…」

目の前の光景は凄惨というよりは芸術の域にあった。『ブラット』に突き刺さる石畳は不規則に、だが規則的に並んでも思える矛盾した光景。

「たまには体を動かさんとな、感覚が鈍ってしまう」

かぶっている尖がり帽子を杖を持った右手で直しワイズが立ち上がる。リア以外のメンバーは口元に薄い笑みを浮かべ『ブラット』を見ていた。

「久しぶりに見たねえ。ワイ爺の『魔術』」

レンナが口に出した言葉をリアは聞き逃さなかった。

『魔術』。確かに彼女はそう口にした。今の時代、『再生期』では見ることができず、その単語を聞くこともない。だが、リアは見た、人にあらざる能力を。浮くはずがない石畳が浮き、風はその動きを補助し、高速回転した石畳は『ブラット』の体を貫いた。

「ワイズさんは…魔術師だったんですか？」

ふと、リアはワイズに聞いていた。

「うん…？ そうじゃな。一般的に言えばそういう部類に入るのじやろ」

「一般的？」

「うん。俺たちは『到達者』って呼んでるけどね。ちなみに、リア以外の『サーカス館』メンバーは全員『到達者』だよ」

信じられなかった。あんな人智を超えた能力を自分以外の仲間が全員使えるということが。

「あの、『到達者』って…どういうことですか？」

聞き覚えのない単語にリアは首をかしげる。リアの適応力はかなり高い。『ダルク』や『ブラット』を見てもほんの少し物怖じするだけで、数分たてば完全に見慣れたものと勝手に理解しているのだ。

おそらく、それは環境においても効果は発揮されるだろう。しかし、『到達者』などという聞き慣れない単語には質問するしかない。

彼の質問にはワイズが答えた。

「『到達者』というのは『神秘』に『到達』した者のことじゃ。説明終了」

「はやっ…早いですよ！ もう少し詳しく教えてください」

「なかなか重い話じゃからなあ…疲れるんじや。リズにでも聞けばよろう」

ワイズの視線はリズに向けられた。リアもリズに視線を向けたがリズは『ブラット』を見たまま動かなかった。それを変に思ったのかアイアンが彼に近寄り肩を叩いた。

「おいどうした？ リズ？」

アイアンが揺さぶるがリズに反応は見られない。まるで、立ったまま意識を失っているかのように。

「リズ？ どうしたんですか？」

リアが言葉を発した瞬間、リズの周りで突風が吹き荒れた。至近距離にいたアイアンはそのまま吹き飛ばされ宙を回転した。

「うおっ！！」

空中で胎児のように体を丸め、リアの横に着地したアイアン。

「大丈夫…ですか？ と言うよりリズのあの様子は何ですか？ 『神秘』ですか？」

ステップを踏みレンナはリアの前に移動しリズとの距離をとった。包帯の巻かれている右腕をリアの前に出し、かぶりを振った。

「違うよ。あれは…あたいらも見ることがない。多分…」

吹き荒ぶ風はリアやレンナの髪を躍らせる。

「……………来る」

ただ一言。リズが呟いた。

刹那、『ブラット』が縦に両断された。鋭利な刃物に切られたような姿はリズ以外の全員を驚愕させた。『ブラット』が分離したのと同時にリズは前に跳び、その場から姿を消した。

「リズ!!」

レンナは叫んでいた。だが、彼女は叫ぶだけで一步を踏み出すことができていない。

そんな中、リアだけはリズを追っていた。『サーカス館』で唯一、『人間らしい』部分を残している彼だけが追っている。強風に煽<sup>あお</sup>られながらも一歩ずつ『ブラット』に近づいていった。

「リズを止めてきます。暴走なんてしたらここ一帯の人は消し飛びますよ。フフフ……」

冗談を口にし、笑みを浮かべた後に強風が吹き荒ぶ中彼はリズが消えた方向へと走り出した。

アイアンは右腕を上げ顔に当たる強風を緩和させ『ブラット』を見ていた。

尖がり帽子の鍔<sup>つば</sup>を掴みワイズは目を落とした。

レンナの腕に乱暴に巻かれている包帯の余分な部分が強風によって煽<sup>あお</sup>られている。彼女は乱れた髪を手櫛で直し溜息を一つ吐いた。

風はいつの間にか吹き止んでいた。

\* \* \*

風を切る音が聞こえた。

おそらく、リズが近くにいます。足を早める自分の心内<sup>こころうち</sup>には一切<sup>いっさい</sup>の恐怖もないことに恐怖していた。

(強くなっただけでしょうかね……)

考えるだけ無駄だと悟り、リアはかぶりを振った。振った際に陽光に照らされた髪は銀色に煌き、リアが走る度にふわふわと宙を泳いでいた。

「一体どこへ行ったんですかね。さっきのリズの様子…尋常じゃないですね。急がないと……」

(ああ……)

一瞬だが、リズの声がリアの耳朵を叩いた。

おそらく奥にいるだろうとリアの本能は示している。考えるより体が動いていた。

\* \* \*

風を切る音と風を斬る音が聞こえた。リズはすぐ近くにいます。だが、姿を視認することができない。

リアの近くの地面が決れる。下手に動けば命をなくす。本能的に察知し彼は一步も動くことはなかった。辺りには誰もおらず、暴風が吹き、石畳は数枚剥がれていた。

「リズ……どこですか？」

両腕で顔面に当たる風を防ぎながらリアは一言だけ言葉を発したが、この風の中で言葉を発しても文字通り掻き消されるだけということはリア自身理解していた。しかし、リアには確信にも似た強い思いがあった。

「リズなら聞こえるはずだ」という思いが。

風が止んだ。

そこには、『死神』と『ピエロ』が立っていた。

## 終幕：六：道化と賢者と死神と……

「リア……？ 何で来たの。来なくて良いよ。邪魔」

一瞬のうちにリアの隣にリズは姿を現した。

いつもと違うリズの雰囲気はどこか危うい雰囲気を漂わせていた。しかし、この場を去ればリアがここに来た意味がない。湧き上がる恐怖を必死に隠しリアは口を開く。

「僕にも何かできるかもしれませんよ？ 少しでも力になれば」

「

「そんなものはいらない。いいから帰れ。帰らないなら俺が殺す。」

途中で遮断された言葉はリアの口から出ることは無かった。

リズの声には感情がこもっていない。そんなことは誰が聞いても明確だった。しかし、それと同時にリアは悲しくなっていた。殺すといわれたことではなく、感情がなくなるとこまでも機械的な言葉はリズの本心ではないことが理解できたからだ。

リアの他人を見る眼はかなり高い。一度会話をするだけでその人物がどのような人間か、また、自分のことをどう思っているかということが本能的に理解できる。そして、他人の感情にも敏感なために今のリズの気持ちは簡単に理解できた。

リズは本心では嬉しがっているが、手伝いは本当に必要ではない。縦しんば必要だったとしてもリズは必要じゃないと答えるだろう。

それは他人を傷つけないという優しさからだ。

「リズの邪魔にはなりませんよ。僕なりに『あの人』をどうにかしてみます」

口元は薄く笑い、顔には笑みを貼り付け、優しい人間を演技するリア。実際、彼は優しいが今はリズの力になるために『わざと』笑みを作り、自分は大丈夫。と思わせている。すると、リズは納得したのか、目を閉じて口を開いた。

「わかった。でも、『あれ』を人間と思わないほうが良いよ。あれ

は『死神』。ヘルからの使いだ」

そう言って視線を前に戻と同時にリスは目の前の人物を指差した。それに合わせるようにリアも視線を前へと向ける。

そこには、『死神』が立っていた。身長はリスぐらいだが、自分の身長より遥かに長い黒のローブを羽織り、フードは顔を隠すように被っている。右手には巨大な木の棒が握られており、棒の先端には大きく弧を描いた漆黒の鎌がついていた。風が吹きフードが少し舞い上がった時に見えた顔はリスに似ている少年だったが双眸の色は猩猩<sup>しやうじやうひ</sup>緋のそれに近かった。

体の底から恐怖が湧き上がってくる。正直なところ、逃げ出した  
い。

だが、そんな考えは捨て去り無理にでも恐怖を拭い取るしか選択肢はなかった。何しろ、さっき手伝うと言ってしまった手前、何もしないで帰ればそれこそ足手まといに他ならないからだ。頬を伝う冷や汗を拭い取りリアは死神と対峙する。

「ピエロ………！」

ようやくリアの存在に気づいたのか死神は憎く声を出した。

「お久しぶりです。そんなに時間はたつてませんがね。どうし

」

たんですか。という最後の台詞は口から出ることはなく襟をリスに引つ張られ代わりに「ぐっ」とぐもった声が出てきた。勿論、襟を急に引つ張られたために尻餅をつき倒れるリア。だが、それは本当に間一髪だった。倒れるリアは一瞬だけ、眼前を左から右へ通り抜ける銀色の光が確認できた。それがなんだったかは言うまでもない。

「ホントに足手まといだね！次こんなことしたら今度は俺が殺すからね！」

リスの叱咤を受けているにもかかわらず、リアは眼前の光景を凝視していた。あれはいつたいどういうことなのか。少年が大鎌を振り回すのはまだ予想の範囲内だった。しかし、あの鎌を見ると何か

得体の知れない感情が湧き上がってくる。

あの鎌はおかしい。

怖い。

恐怖がリアの体を支配するのには数秒とかからなかった。体が震え、ともに動けなくなるリアはまたしても襟をリスに引っ張られ、後方へと引きずられる形で頭上に振り下ろされた大鎌を回避した。しかし、安心するには早かったようだ。振り下ろした鎌は遠心力を利用して地面すら切り裂き『死神』は体を回転させさっきの一撃より更に早く鎌を振り下ろした。

「っ！」

身体能力がお世辞にも人並みとはいえないリアが避けられるはずがない。避けられるはずがないのだが、彼は避けた。いや、偶然に避けたというべきだろうか。体ごと横に転がり紙一重で回避していた。

「チッ……」

『死神』は舌打ちをした後に鎌を引き抜こうとした。しかし、リスがそれを許さなかった。

腰を落とし、一瞬で『死神』に近づき彼の腹を蹴り、後方へと飛ばした。蹴りを放ち終わったリスは右腕を薙いだ。すると、次の瞬間『死神』の左腕が肘から斬り落とされていた。

『死神』は斬り落とされた左腕を無視し再びリアに襲い掛かった。鎌は右腕で担ぎ高速でリアに近づく。

リアはリスが『死神』を蹴り飛ばしたときに体を起こし立ち上がりどんな攻撃にも備えていた。しかし、彼には避ける術も迎え撃つ術もない。できることはただ一つ。殺されることだけだった。

「リアー！！」

リスが叫ぶが早いか、『死神』がリアを斬るが早いか。リスの耳に何か、高い音が聞こえた。だが、数秒後、辺りに静寂が訪れた。

「何とか間に合ったか」

意外にも、静寂を破ったのはその場にいるはずがないアイアンの声だった。額にはうっすらと汗が滲み出ている。おそらく、走ってきたのだろう。髪が汗で少し湿っていた。

「アイアン！」

リズの顔に明るさが戻った。さつき、リズの耳朶を叩いた高音はおそらく金属音、その正体はアイアンの『神秘』。

「ダイジョブかりア。死んでねえか？」

「ええ。結構ギリギリでしたよ。ありがとうございます」

リアの左腹部には『死神』の鎌の先端があつた。しかし、おかしいことにそれはリアに刺さっていない。『死神』が止めたのか、否そんな優しい性格ならばそもそも戦闘すら起こさないだろう。では何故？ 理由はただ一つ。アイアンの『神秘』のおかげだ。

よく見ると、鎌の先端が当たる部分のみ服の材質が変化していた。リアの服は綿素材で鎌という鋭い武器でなくても容易に引き裂ける。しかし、『そこ』は綿ではなく人間の力では決して破壊できない材質、『鉄』に変化していた。

アイアンは『死神』を一瞥すると右手の指をパチンと弾いた。

「……………」

『死神』は数回、後ろに飛び跳ねた後、姿を消した。

「消えたか。ま、後はダイジョブだろ」

「大丈夫って…何がですか？」

先ほど鎌が当たっていた箇所を摩<sup>さす</sup>りながらリアはアイアンに問う。いつのまにか鉄になった部分は元の綿素材に戻っていた。一方で、質問されたアイアンは面倒くさそうにリアに向き直り頭を掻きながら答えた。

「爺さんが後始末に行ってるはずだ。多分な」

信じられなかった。『死神』はリアから見ても明らかに人間の身体能力を超越していた。それをワイズが後始末に行くのはどう考えても無謀であり自殺行為に等しかった。その考えが顔に出ていたの

か、それともリアの考えを読み取ったのか、リズはリアの服の袖を引っ張る。それによって幾らか落ち着きを取り戻したリアはリズのほうを見やった。

「大丈夫だよ。ワイ爺だつて『到達者』なんだし。それに……」

ひと呼吸おいて少し憚る様にリズは口を開いた。

「ワイズは…リアよりも強いから」

それは、はたして安心していいのだろうか。不安がリアの心を取り巻く中、アイアン、リズはその場を去ろうとした。そして、少し遅れてリアも二人の後についていった。だが、リアはふと足を止めた。一瞬だけだが、左目に何かの反射光を感じたからだ。先ほどまで『死神』がいた場所を凝視するリア。そして、少しだけ口角を吊り上げてほくそ笑んだ。

すると、後ろからリズとアイアンの声が聞こえる。

「置いてくよー。リア」

「早く帰って酒飲みてえな。早く帰るぞ」

「あ、今行きます」

リアは踵を返しその場を後にした。

\* \* \*

「はあ、はあ…ピエロお……！！」

『何か鋭いもの』で切断された左腕を右手に持ちながら『死神』はワノールにおいて最大級自由区域、『欲望と絶望』、通称ダブルデュー区域にいた。この治安是最悪という言葉を借りても足りないほどに廃れ、腐りきった区域だ。強盗、恐喝、殺人、強姦。ありとあらゆることが許される場所、そのためかここにいるのは決まって悪人やヘルに片足突っ込んだ連中が多い。

『死神』は殺気を撒き散らしながらダブルデュー区域を彷徨っている。深々と被ったローブの中からは呪いの言葉が吐き出されている。だが、呪いの相手は抽象的過ぎるために他人には個人を特定できない。

左腕の切断で生じた激痛は、治まるどころか次第に熱に変わり彼の精神を蝕んでいく。足取りがふらつき視界がぼやける。ふらつく足で歩いていると。

「いてっ……」

急に何かと、いや誰かとぶつかった。目線だけ上に向けるとそこには外見から判断して下品な男が立っていた。下唇と左耳にピアスを付けており、髪はピンクに染まっている。

「てめえどこ見て歩いてんだあ！？ 殺すぞチビがあ！」

声の音程がおかしい。時折だが裏声が混じり口調も下品。おそらく麻薬中毒者か何かだろう。だが、『死神』はその声すら聞こえない。左腕を襲う高熱の幻肢痛は彼から聴覚を一時的に奪っていた。

呼吸が荒い『死神』を見て男は口を開いた。

「んだこいつ？ 興奮してんのかあ？ 最近溜まってるからなあ……  
こちらで又いとかねえと。へへへ、体にワリイよな……」

そう言いながら男は『死神』を押し倒そうとした。しかし、彼は押し倒さずにすぐ隣をすれ違った。上半身のみが。

「ジャ……ま、ダ……」

先ほどまで左腕しか持っていなかった彼の右腕には左腕の代わりに大鎌が握られていた。

斬りおとされた男の上半身は地面に崩れ落ち、下半身は仰向けに倒れ地面に赤く水溜りを作った。そんな凄惨な光景であるにも関わらず、周囲の人間は悲鳴一つあげるところかこちらを見ようともしなかった。

異常とも思える光景。だが、ここでは『こんな光景こそが通常』なのだ。道を見渡し、死体のなかった日などはない。それが、ダブルデュー区域の現状なのだ。

殺しがあっても見向きもせず、死体があっても干渉しない。だが、ある一人は殺した少年に干渉した。つばの広い三角帽子を被り、先端が渦を巻いている櫂の杖を左手に持った老人、ワイズは『死神』に干渉した。

「おぬし、先程まで右手に持っていた左手はどうした？」

そう。『死神』はさっきまで鎌の代わりに左手を持っていた。だが、今は左手はなく巨大な鎌を右手に持っていた。

「……識者」

『死神』は聴きなれない単語を口にした。だが、ワイズはその単語を聞いたとき口角を吊り上げて口を開いた。

「『識者』、識る者か。生憎とワシは識者ではないの。言うなれば……」

ワイズの杖が地面を叩いた。コツン。と音がする。そして次の瞬間、杖の叩かれた部分のみが勢い良く『死神』向かって伸びた。地面の先端は鋭く、人など容易に貫ける鋭さだった。

『死神』は持っていた鎌の刃の腹部分で防いだが、左腕が無いために鎌を支えることができない。大きすぎる武器が仇になっていた。しかし、なんとか半身を左にずらし鋭い土の『牙』を回避した。だが、牙のみに集中してしまったためにワイズにまでは注意が行き届いていなかった。急いで視線をワイズに戻すと彼は眼前にいた。

「『賢者』<sup>サガ</sup>と呼んでもらいたいの。小僧」

杖の先端を左手で支え、杖の中腹部分を持っていた右手は杖を地面と平行にし杖先を『死神』へと向ける。そして、『賢者』は口を開いた。

「神の鳴く声、見えざる槍にて闇を穿て。巨人の歩は地を揺り動かし破壊す。風の子は気まぐれに友と戯れ<sup>たわむ</sup>疾風の鎌を生み出さん」

ワイズの台詞の終わりとともに辺りに変化が起きた。

杖からは一瞬だが黄色い閃光が放たれ、『死神』を穿った。

『死神』が倒れると同時に辺り一面から先程と同じ『牙』が何本も突出し、彼に突き刺さった。

そして、最早息があるのかすらわからないが、追い討ちをかけるように『死神』の体が切り刻まれた。おそらく、カマイタチだろう。一瞬だが、ヒュッという風の音が聞こえたワイズは満足したのかそうではないのか、三角帽子を深く被った。

「やはり……か。『本体』はもつと強いのじゃろうな」

『本体』。ワイズは確かにそうつぶやいた。

「血を流さぬ時点で気づいてはいたんじゃがの。まあよい。サーカス館に帰るとするか……」

『死神』は閃光で空いた腹部からも、カマイタチで切られた所からも、地の牙で貫かれた部分からも、いや、それ以前にリスが斬りおとした左腕からも血を流していなかった。生物として絶対的に必要なもの、『血液』が『死神』には流れていなかった。

どこか疲れた足取りでワイズはダブルディー区域を後にした。血を流さぬ奇妙なオブジェを残したまま。

「ピエロ……。あの小僧のことが。ワシらにはどうすることもできないの。リス」

独り言を呟き、『賢者』は『道化の待つ館』<sup>ピエロ</sup>へと戻っていった。

#### 第四幕：一・懐かしき双煌

「ねえねえ。今暇？」

見るからに遊んでそうな二人組みの男が少女に話しかけた。

それが地毛なのか、金髪のボブカットの少女は近づいてきた手を払いのける。少女の右目には眼帯がつけられていた。

「残念だけど暇じゃないわ。あたしたちは今から行かなくちゃいけないところがあるの。行きましょアラシ」

少女はそう言つと、アラシと呼んだ少女の手をとり足早にその場を去ろうとした。しかし、男たちがそれを許さなかった。少女の腕を強引に引き壁に叩きつけた。隠密行動でもしているつもりなのか、少女は黒の外套を羽織っているのだが髪の色、そして今は真昼ということもあり目立つことこの上ない。

「あら……強引な男はどの国でももてないと決まっておりますのよ」  
高貴な喋り方をしてアラシと呼ばれていた灰色の髪をツインテールにした少女は男たちに詰め寄る。少女の腰には小剣<sup>レイピア</sup>が差してある。よく見ると壁に叩きつけられた少女の腰にも剣が2本差してある。しかし、こちらの剣はアラシの剣と形状が違う。鍔が丸く、片刃の剣。ジパング製の剣、『刀』だろう。

「ああ……俺強い強え女ダメなんだよね。お前にやる」

壁に叩きつけた男は虫でも払うかのような仕草をした後、壁に叩きつけた少女のほうに振り返る。

「マジかよ！ 最高だぜ、こんな女初めてだからよお……ふん」

もう一人の男はアラシに近づき細い体を嘗め回すように観察していた。それがアラシは気に食わなかったのか。右足を振り上げ、スカートがまくれ上がり自身の下着が露出するのもかまわずに男の顎を蹴り上げた。

「イゲッ……！」

聞くに堪えない悲鳴の後、アラシに近づいた男は仰向けに倒れ、

目を回していた。それを見てアラシは満足したのかしてないのか、腕組みをし倒れた男を睥睨し小さく鼻を鳴らした。

それを見ていたもう一人の男は壁の少女を口説くのをやめ、噛み付きそうな勢いでアラシに近づいた。

「てめえクソアマ！ 何してくれっ！？」

「良かったわね。それ以上前に進んでたら首と体がバイバイしてたわよ」

壁の少女は一瞬にして抜刀し男の首筋に突きつけていた。外套がふわりと浮きまだ風を纏っている。少女の瑠璃ラリスラスリのような左目が男を射抜く。だが、男は屈しなかった。左手で刀の刃を持ち少女を睥睨する。

「バカかてめえは！！ ジパング製の剣は引かねえと斬れねんだよ！」

それを聞いた少女は驚くこともなく口を開いた。

「だから？」

「俺が持つてる限り斬れねんだよバアカ」

それを見ていたアラシは深くため息をつき虫でも見るかのような目つきで男を見やる。

「愚かですわね。あなたの目はガラス玉か何かでできているのかしら？ シャル、やっておしまい」

「命令はしないでよね。ま、いいけどさ」

刹那、刃を持っていた男の『右手』がゴトリと落ちた。シャルと呼ばれた少女の右手の刀は男に掴まれたままだが、左手には新たに抜刀した刀が男の右手を斬りおとしていた。そう、元々少女は刀を1本抜刀しただけであって不利ではない。むしろ、動きが封じられた男のほうが不利な立場にあったのだ。

「痛みはあまり感じないようにしてあげたわ。しかも綺麗に斬ったからすぐにでも医者に見せればくっつくわ。じゃあね」

男が悲鳴を上げて去っていった方向と逆の方向へ二人は歩いていた。

＊ ＊ ＊

「買い物～。かいもの～ きょ～はお肉～楽しみだ～ 明日  
はリアが～作るんだ～」

自作の歌を歌いながら銀髪の少年はワノールの街を闊歩していた。  
右手にはアヒルの財布の紐を握っている。

「リズ。財布は首に掛けていてください。落としたりしたら大変で  
すよ」

少年の隣には少年より背が高いが少年と同じ銀髪で眼鏡を掛けた  
少年が立っていた。買い物帰りの為、両手で買い物袋を抱えて歩い  
ていた。

「大丈夫だいじょ～ぶ。リアは心配性だなー」

リズと呼ばれた少年は子供らしく無邪気に笑いながら地面のタイ  
ルの白い部分だけを跳んで遊んでいる。一方、リアと呼ばれた少年  
は苦笑しながらも微笑ましい光景を眺めていた。

リアが空を仰ぐとそこには雲一つない蒼天が広がっていた。風が  
吹けばリアとリズの銀系のように細い髪が舞う。平和な光景だった。  
「先日は死神と戦って…散々な一日だったね。でも、今日は何も起  
きな、てっ…！」

急にリズが尻餅をつく。理由は明白、すれ違う通行人にぶつかっ  
てしまったのだ。すれ違う予定だった通行人は振り返り、リズが持  
っていたアヒルの財布を拾ってリズに手渡した。ぶつかったときに  
リズが落としたのだらう。

「はい、どうぞ。でも今度からは気をつけて歩いてね」

財布を渡してきたのは少女だった。しかし、明らかに一般人では  
ないだらう。黒の外套を羽織り、隠密とは対照的なほどに明るい金  
髪のボブカット。右目を隠す眼帯。そして、極めつけは上手く隠し  
ている二振りの刀。観察力の高いリアは難なく見つけられたがおそ  
らく一般人は外套の中に隠された刀を発見することはできないだろ  
う。

財布を受け取ったリズは申し訳なさそうに頭を下げてリアのほうに詰め寄る。それに合わせるように少女もリアに近づいた。

「この子、キミの弟？　可愛いね」

「残念ですけど…僕とリズは兄弟ではありませんよ」

「そんなことはいいいから早く行きますわよシャル。私たちには時間わたくしがありませんの。以後、気をつけなさいな。では、ごめんあそばせ」

話し方や服装からして上流階級の娘なのだろうか、ドレスのような服だが動きやすいように少女の体のラインに合わせた服。しかし、肩から肘までは膨らみを持たせておりどこか高貴な服を思わせる。スカートは若干長く作られているが、動くのに邪魔になる長さではなく歩く姿には気品さえ感じられる作りだ。そして、ボブカットの金髪少女と違い銀灰色ぎんかいの髪をツインテールに纏めている。腰には小剣レイピアが差してある。だが、少女には鍛錬している様子は見受けられず、単に装飾品アクセサリとして身に着けているだけだろう。ツインテールの髪と同じ銀灰色の瞳がリアを睥睨する。

一瞬にして気圧されたリアは目を逸らした、しかし、視線を外した場所には金髪の少女がいた。彼女の瑠璃色るりの瞳と視線が重なる。

「あ…えつと、すみませんでした。うちのリズが…」

あわてて返事を返すリアを見て金髪の少女は微笑みながら言葉を吐いた。

「別にいいわ。でも今度からは気をつけてねリズ君」

リズを指差し、ウインクをした金髪の少女は先に行ってしまったツインテールの少女を追いかけた。

「はい。ばいばいお姉ちゃん」

リズが大きく手を振ると、それに答えるように金髪の少女が振り返り大きく手を振って返した。

「あの人……」

リアが金髪の少女の後ろ姿を見つめているのを見ていたリズは首を傾げながら口を開いた。

「どうかしたのリア？」

口元に手を当て何かを黙考するリア。そして彼の口から出た言葉は意外な一言だった。

「彼女：何処かで会ったことがあるような……懐かしい感じがしました」

\* \* \*

「何なんですかこの街は！ ナンパはされ、ナンパはされ。拳句の果てにナンパですわよ！ 信じられせんわ！！」

腕組みしたままアラシは怒りをはき捨てている。十割方ナンパの愚痴だが。

それを横目で見ていたシャルは苦笑しながら金糸の髪を撫でる。

「まあまあ。でももう少しなんでしょ？ アーバスの館。なら行きましょう」

「シャルトリュー。あなたはあのような低俗な輩が野放しにされているのが大丈夫だと思っていますの！？ ここには法も秩序もないですわ。私がここを統治すればよっぽどマシになるというのに……」

先程までシャルと呼ばれていた少女の名はシャルトリューという名前だった。シャルトリューは瞑目し、何かを教えるように口を開いた。

「『誰も統治めず見て見ぬ振りを』。それがここ、ワノールのルールらしいわ。諦めましょう。それにしても、さっきの……」

シャルトリューは空を仰ぎ目を細めた。それを見ていたアラシは腕組みをした状態でシャルトリューに問いかけた。

「どうしましたのシャル？」

「さっきのリアって人……あたし、どこかで会ったことあるかも……」

「何故そう思うんですの？」

アラシの問いにシャルトリューは背後を振り返り、優しい笑みをしたまま口を開いた。

「うん。懐かしい感じがした……離れ離れになった家族が会えたみ

たいな感じ……」

シャルトリュー、そしてリアはほぼ同時に望郷の念を感じていた。

#### 第四幕：一・懐かしき双煌（後書き）

リズ（略、リ）「毎度お馴染み！ キャラクター雑談のコーナー」

ワイズ（略、ワ）「今回から進行役が変わるのか。まあわたしには関係ないがの」

リ「ワイ爺だ。今回のゲストはワイ爺なんだね」

ワ「そういうことじゃ。わしの身長や体重を聞いても面白くはないじゃろうに…だから身長、体重は省くぞ。趣味は読書といったところじゃな」

リ「地味な趣味……まあお爺ちゃんだからね。そういえば今回の見所はわかるの？」

ワ「ふむ。新たに新キャラクターが登場したようじゃの。そのキャラクターは蒼炎鬼が考えたのではないそうじゃな」

リ「そうらしいね。たしか…ク…クロヒナ？って人が考えてくれたらしいね。聞くとところによると…蒼炎鬼が無理に書かせたとか…」

ワ「鬼畜じゃな。男として、いや人として終わっているのお…」

蒼「鬼畜ですみませんね…只今、連載ファンタジー『アンダーグラウンド』を執筆中の黒雛 桜様のアイデアで生まれた、シャルトリュー、そしてアラシを愛してやってください」

リ「そういえば、何で1ヶ月1話更新なの？」

蒼「作者の都合です。血を吐く努力をすれば2週間1話更新も可能ですが…作者の気分しだいです。もっと早く更新しろよと思う方はドシドシ感想にお書きください。こんな話を呼んでみたいというリクエストもお待ちしております」

## 二：黙考の銀、行動の金（前書き）

月の頭に更新予定でしたが遅れに遅れてしまったのを深くお詫びします。

## 二：黙考の銀、行動の金

金髪の少女と会ってから一言も口を開かないリアを見ていたリズは少しだけ心配そうに口を開いた。

「リア？　どうかした。さっきから変だよ」

リズの心配をよそにリアは俯いたまま何かを黙考していた。歩くたびに買い物袋の中のものゝ外に飛び出しかけるが、上手くバランスをとり再び買い物袋の中で泳がせていた。初めてそれを見たとき、リズは落ちてくる食材を拾おうとしていたが今は慣れたのか行動に出ることはなかった。

黙考していたリアは立ち止まり、さらに深い思考の海を航海し始めた。突風が吹こうと、雨が降ろうと恐らくリアは思考の海から帰港することはないだろう。それは『サーカス館』のメンバーなら誰しも理解していることだ。

以前の教会での一件。その後のリアの様は筆舌に尽くしがたいものがあつた。しかし、それは自分が助けられなかった女、リーナの為ではなく、リーナを侵食した『ダルク』の本質についてを考察していただけであつた。『ダルク』についての不眠不休の考察は約七日。実物を見てその恐ろしさを体験してさえ七日間という時間がかかつていた。

だが、今回は違う。『どこかで会った』という自分の曖昧な記憶の再認作業は時間が経つほどに薄れていくもの。それを長時間かけて思い出すのは困難以前に無謀な挑戦である。リア自身、それは分かきつっている事なのだろうが自分の性分とは厄介なものだと再認識させられたいた。

リアの性分は『理解できないことはその場で理解する』ということであつて、現在理解できないものとは『金髪の少女との接点、または記憶』。そのために、リアは思考、否。記憶の海の航海をしている。

「リア。リッアッ！……もう。しょうがない」

待ちくたびれたリズは腰に手を当て深くため息をつく。ため息を吐き終わるとリズは自分の鳩尾あたりに右手を添える。すると、彼の銀系のような髪がふわりと浮き、風によって踊り始めた。すると、一瞬にしてリズの周囲だけが突風に覆われる。

「あんまり痛くはしないからね。ふっ……！」

リズは右腕を先ほど急に起こった突風と共に右に薙いだ。一息おいて、刃と形を変えた風はリアの右頬をかすめ、彼の右頬に横一文字に赤い線を書き入れる。

「っ！！」

刹那的な痛みを右頬に感じリアの記憶の航海は唐突に終わりを迎えた。

「早く帰ろ！！」

紙袋を左に移動させ前を見ると、そこには両頬を膨らませプリプリと怒っているリズの姿があった。まだ、風の残滓がリズの周りにいるのだろうか銀系の髪を揺らめかせている。

「そう……でしたね。すみませんでした」

リズに己の非礼を詫び、再び歩み始めた。彼の頬から一滴の血液が流れる。

それを見たリズは自分のポケットから一枚のハンカチを取り出しリアの頬から流れた血液をふき取った。

「ありがとうございます。リズ」

微笑を浮かべ礼を言うリア。それに感化されたのかリズも笑顔を返した。しかし、そのすぐ後に俯いて口を開いた。

「へへ……俺がつけちゃったからね……」

頭を掻き恥ずかしそうにリズはそう言った。リズは気にしているようだが、リアは気にしてはいない。という意味合いを込めてリズの頭をなでた。撫でられたリズははにかみながら歩いていた。髪を撫でればさらりとした感触があり、はにかむ姿が本当にリズが子供だということが理解できる。だが、いつもはこのように無邪気な子

供だが実のところリアですらリズの事は知らない。否、それ以前にリアはその他の仲間のことも何一つ知らないのだ。

だが、そんな懸念は今には必要ではないらしい。別な懸念事項があった今起こったからだ。

「どうしたの？ ……リア？」

「前から来る人…少し様子が、おかしくないですか？」

「え？」

二人の目の前には、目の焦点が合わず呼吸すらしていないようにも見える男がフラフラと覚束無い足取りで歩いてきている。誰が見てもおかしいと感じるだろうが、決定的なのは『右手』だった。右手が無かった。しかも男の右手があった部分は黒い霧のようなものが漂っていた。

「『ブラット』……」

怒りを孕んだ声がリズの喉の奥から聞こえた。

男は覚束無い足でリアたちに近づく。

「どうするんですかリズ？」

リアたちは何も知らない一般人を振る舞い歩いていた。

男は近づく。

「俺たちが標的なら戦うけど……」

「違うならそのまますれ違うだけですな」

リズは頷く。そして二人はそのまま足を前に動かし続けた。

男は尚もリアたちに近づく。だが、襲ってくる様子は見受けられない。

そして、リアたちと『ブラット』は戦うことなくその場をすれ違った。

しかし、そのときリアの体が『ブラット』に掠っていたことは本人以外、気づくことはなかった。

\* \* \*

この街に似つかわしくない二人は悠々とワノールを闊歩していた。

一歩歩くごとに銀灰色のツインテールが揺れ動く。また、一方では一歩歩くごとに黒衣の外套が風に揺られて中空を舞い踊る。

「そつえば……」

声を出したのはアラシだ。何かを閃いたのか、それとも思い出したのか、彼女はシャルトリユーの方を向き言葉をつなげた。

「アーバスって何者ですか？」

「いきなり何を言ってるの？」

困惑の表情でシャルトリユーはアラシに向き直る。だが、アラシが問いかけるのも無理はなかった。

事実、彼女たちは只、『アーバスという女がワノールという街で情報屋をしている。会いに行けばお前たちの力にはなるぜ』。と言われこの地に足を運んだのだ。尤も、その情報を与えた『男』はかなり胡散臭いものだったのだがそこは敢えて突っ込まずにその情報をもらったのだ。

数秒前にアラシの言った台詞を脳内で反芻してからシャルトリユーはあるひとつの結論に至り、わざわざ口に出す必要もないことを言ってしまった。

「……そつえば、何者なんだろう？」

苦笑を浮かべ、頬を掻くシャルトリユーを見ていたアラシは腰に手を当て深くため息をついた。その姿はとても様になっていた。子供が言い訳をするかのようにシャルトリユーは両手を目の前でパタパタと左右に振りながら口を開いた。

「で、でもさほら！ 『女』ってことはわかってるわよ？ それに

ワノール  
……此処にいるってこ、と……も………わかつ、てる……」

言いながら徐々に萎んでいくシャルトリユーはどこか小動物を思わせた。ついには涙目になりながらアラシを上目遣いで見る始末。それを見かねたアラシは、またため息をつきシャルトリユーに言った。

「すみませんでした。私が悪かったですわ。もう少し深く聞かなかった私にも責任があります」

そう言つてアラシはシャルトリューの頭を撫でる。それは、まるで我が子をあやすかのように。

「うう……ありがとー！ アラシは優しいわー！！ 前いた組織とは大違い！」

叫びながらシャルトリューはアラシに激突、ではなく強く、きつく抱きしめた。

「いたたた……！！ 痛いです！ 少し離れてくださいませ……」

さば折りに近い拘束を耐え、アラシは声を出していた。シャルトリューは声に気づかず顔にアラシの年相応に膨らみがある胸の谷間に埋めた。埋めた顔から声が発せられる。

「やわらかい。いいなーこの胸」

顔に埋めたままの状態から離れる気がないシャルトリューをよそに、深くため息を吐くアラシ。公衆の面前でセクハラ発言しているシャルトリューに怒りは覚えなが<sup>メモリースライア</sup>りからの視線が痛いことこのうえなく、さらに男たちにとっては記憶媒体と呼ばれる半球体の物体に映像を記憶させていた。それを見つけたアラシはそっとシャルトリューを抱きしめ、耳元で囁いた。

「あなたから見て右前方、約30メートルほどにいる男達。それと左後方約10メートルほどにいる男。記憶媒体を持ってますわ……」  
「わかつてる……。アラシはあたしの後ろのお願い。前はあたしがやる」

会話を終わらせた二人は右手甲を合わせ、その場から姿を消した。二人は風になり、アラシは一度の跳躍でシャルトリューの後方にいた男に近づく。シャルトリューはアラシが移動したのを確認した後、彼女を越える速度で彼女の標的より遠い場所にいる男達の背後に、彼女より早く移動していた。

「その媒体、<sup>スライア</sup>置いてきなさい。置いていかなかったら首を置いていくことになるわ」

右手の刀を1人の男の首筋に突きつけ脅迫するシャルトリューの双眸には殺気や怒気はなかった。

「あなたもですわ。即刻、媒体をおいて去りなさい」

眼前に立ちはだかる男にアラシも言葉を吐く。だが、彼女はシャルトリューとは違い、双眸に殺気を付与し睥睨する。

アラシが脅迫した男は、彼女の気迫に押されたのか、記憶媒体を捨てその場から早々に姿をくらませた。

だが、シャルトリューが脅迫した男達は違った。記憶媒体が宙に舞った。それを合図に男達は、自分たちの背後に立っていたシャルトリューに攻撃を仕掛けた。彼女から見て右の男は体を屈め地面と水平に蹴りを放つ。それを予測していたのか、もしくは一瞬で蹴りに反応したのか、シャルトリューはバックステップを踏むと同時に左側の男の首筋に突きつけていた刀を首に押し付けながら引いた。

彼女の予想では、それでまず男のうちの1人は首を自分に斬られ死んだ。と思っていただろう。現実はその甘くないものではなかった。左の男は、首に突きつけられていた刀とは逆方向に旋回。左足を振り上げシャルトリューの左脇腹を踵で攻撃。後方に跳び、尚且つ自身の予想に反した反撃が彼女の反応を鈍らせた。防御が間に合わず男の攻撃は直撃した。外套がはためきシャルトリューの体勢が崩される。その隙を狙い、水平蹴りをした男が1歩前に出て右拳を下から突き上げる。回避は出来ず、防御するしかないシャルトリューは右手に持っていた刀の所為で左手1本で男の手を包むように防御した。無論、大の男の拳が年端も行かない少女の片腕一本で防ぎきれはらずもなくシャルトリューは上空に打ち上げられた。

「ぐ……………」

くぐもった声を上げ必死に男の手を掴んでいるシャルトリュー。

勝敗は目に見えていた。

## 二：黙考の銀、行動の金（後書き）

レンナ「ええ〜っと…評価、感想、指摘があれば蒼炎鬼までドシドシ送ってください」

アイアン「何やってんだレンナ？」

レ「今回は出番なかったからねえ……」

ア「なら爺さんはどうすんだよ？　今回に限らず殆ど出番ねえぞ？」

レ「あ……」

### 三：錆びる銀、怒り輝く金

妙に重い足取りでリアは歩いていった。彼のいつもの歩行なら、それだけで銀系のような髪が風に漂い揺れ踊るはずだが、今はそれがない。『サーカス館』の誰が見てもわかるほど彼は体調が優れなかった。

一緒に買い物をしていたリズ曰く、彼は『サーカス館』に帰ってきてから調子を悪くしたのではないという。リズの顔が不安で塗りつぶされていった。

「おいリア。大丈夫かよ？」

あくまでぶっきらぼうに筋肉質の男、アイアン・ラッサムはリアに訊ねる。だが、返答は決まっていた。青ざめた顔を振り向かせ、微笑のつもりが苦笑に変わりリアは口を開いた。

「だ、大丈夫ですよ……」

この台詞にアイアンはそうか。とは答えなかった。心配する素振りも見せずに酒を飲み始めた。それを見ていた赤髪で長髪で目立ちさらに極めつけは右腕に巻きつけた包帯がその存在をいつそう際立っている女性、レンナ・ノルイはカウンター席の奥から声をかけた。「大丈夫なわけないだろ？ 店の掃除はいいから奥で休んでな」

レンナの気配りにリアは微笑とはいえない苦笑を浮かべ首肯し、店の奥に消えた。

その直後、店の奥から物音が聞こえ『サーカス館』の仲間が急いで店の奥へ向かった。

\* \* \*

「シャル！」

男に持ち上げられたシャルトリューを助けようとアラシは腰の小剣を抜き去り、男たちに駆け寄る。が。

「動くなよ気が強えねえちゃん。そうしねえと……」

シャルトリユーを持ち上げた男は空いていた左手を彼女の腰元にしのばせ尻を触っていた。

尻を触られたシャルトリユーはビクリと体を震わせ頬を赤らめていた。その直後、目を見開いた。

「あつ……！ その刀……」

「更にこの女を辱めることになるぜ」

その一言にアラシの足は止まった。男がシャルトリユーの腰からもう一振りの刀を抜き、胸の辺りに切っ先を突きつけた。

男は胸の辺りに突きつけた刀を縦に引き、シャルトリユーの服を切り裂いた。

「ちよつと！！ 何すんのよ！」

右手だけをバタバタと震わせ自身の胸を隠す気もないシャルトリユーはかえって男らしかった。そしてその胸もまた年頃の少女のものではなかった。

そして、男は破滅の言葉を言ってしまった。

「なんだよ、胸ねえな。ガキくせえ顔にガキみてえな胸。マジでガキだなこの貧乳！」

どこかでブチツと音がした気がした。アラシには聞こえたのか剣を納め数歩後ろに下がった。

「だあれえがあ……」

男の右手を掴んでいた彼女の左腕の力が強まるのが男の手に感じられた。

次の瞬間、シャルトリユーの外套がバサリと男の顔に覆いかぶさった。

「だあれえがあ……」

左腕を少し曲げ、すぐに伸ばす。その反動で男の背後に跳躍。右手に持っていた刀を水平に振り男の背中を浅く斬りつけた。その痛みに耐えかねたのか、男は持っていた刀を手から落とした。

「ヒンニユーだって……」

男の目の前に瞬時に移動し、落ちた刀を完全に地面に落ちる前に

掴み刀を鞘にしまう。そして、一瞬で男の背後に跳躍し男の頸椎を蹴り飛ばし着地。シャルトリューは崩れ落ちた男に覆いかぶさった外套を剥ぎ取り胸の辺りで巻いた。胸が隠れ、怒りが収まったと思っていたもう一人の男は怒りが収まらない様子のシャルトリューを見て逃げ出そうとしていた。

「ひ、ヒンニューだつて……貧乳だつて……」

俯きながらブツブツと呟いているシャルトリューを見て逃げられる。と思ったのか男はその場から逃げた。しかし、彼女の目は蛇のように鋭くなり、狙った獲物は逃がすことはなかった。

男は女達が　　金髪の貧乳女が　　追いかけてきているのかを確認するために走りながら後ろを振り返る。女は俯いたまま動いていなかった。男はその場から姿を消した。

だが、男は安心してはいけなかった。怒り狂う金髪の悪魔はその男を目の端で捕らえ続けていたのだから。

\* \* \*

『サーカス館』のメンバーが廊下に倒れているリアを発見するのに時間はかからなかった。背中越しではあるが、胸の辺りが忙しく上下しているところを見ると呼吸はしているようだ。その呼吸の間隔がおかしい。上下はしているものの、間隔が一定ではない。なにかに苦しめられているか、もしくは他の要素がリアの体を蝕んでいるのだろうか。

リスが駆け寄りリアの体を起こす。顔は脂汗を浮かべ右手は蒼白色を超え、もはや完全なる白。どう見ても普通じゃない症状が逆に『サーカス館』のメンバーを冷静にさせた。

黒のボロボロのローブを羽織り、とんがり帽子を深くかぶり、左手には先端が渦を巻いた櫛の杖を持ったいかにも『魔法使い』といった容貌の老人、ワイズ・コロファは顎鬚あごひげを撫でながらしゃがれた声を出した。

「『ブラット』じゃな」

その一言に繋げるようにレンナは言葉を吐く。

「『ブラット』！？ 昨日の今日だよ？ なんだってそんな……もしかしてリア、あんた『ブラット』に触ったのかい！？」

レンナは強引にリアの胸倉を掴み引き寄せた。リズが止めようと手を伸ばしたが、レンナの目が恐ろしかったため伸ばした手を戻した。

「どうなんだい！？ ええ！？」

今にも噛み付きそうな勢いでレンナはリアに問いただす。だが、容易に答えられる容体ではない。それでも無理やりに口を動かしたりアは答えた。

「買い物の帰りで会ったんですよ……。右手が……ほんの少し触れた。だけです」

「……………リア。俺にそんなこと言わなかった……」

座り、俯いたままリズはぼそりと呟いた。リアの胸倉を掴んだままレンナも俯き、そのまま隣にいたアイアンにリアを渡した。

「寝かせてやって。『ブラット』を殺してくる」

「待てよ。リズの判断がまだだ。まあ、寝かせてはくるがな」

リアを抱え奥の休憩室に消えていった。

「リズ。どういうことだい？ 『ダルク』や『ブラット』に触ると危険だつてリアに教えたんだろ……？」

「教えてないよ。こんなにすぐ『ブラット』とかに会うとは思わなかったし……」

その言葉を聞いたレンナはリズに近づき彼を持ち上げる。服が引っ張られ、体が重力とレンナの腕の引力で一瞬だけ<sup>せめ</sup>闘ぎ合ったがレンナの腕力が勝ちリズの体は宙に浮いた。

「あんたはいつもそうだよ。問題を先送りにする悪い癖。だからリアがこうなった！ 違うかい？」

「……………せえな。」 リズの右手がレンナの腕を掴む。その刹那、レンナとワイズは体感温度が下がった気がした。体感温度が下がった理由はリズから発せられる殺気だった。怒りからリズは『神秘』

を使い、室内に暴風が吹き荒れていた。

リズの口から出た一言は二人を戦慄させた。

「うるせえんだよ。少しは黙れ小娘。」

口調が違う。いつもの少し子供っぽい口調ではなく攻撃的な口調はリズに似つかわしくなかった。だが、似つかわしくはなくとも、明らかにリズは怒っていることだけは2人はその身に感じていた。リズから発せられる容赦のない殺気は、鋭い針のような物で全身を刺している感覚を錯覚させた。

リズの変貌にレンナは怯えたのか、リズを持ち上げた手を開放しリズはストン。と床に着地した。

「……俺が何も教えなかったのはリアのため」

俯きながらリズはぼそりと言った。仲間には優しいリズのことだ、もしまた『ダルク』や『ブラット』に遭遇すればリアには危害を加える前に、一瞬でそれらを葬ろうと考えていたのだろう。しかしその考えは行動に移ることはなかった。事実、今回遭遇した『ブラット』はリアや自分に危害を加えていなかった。ただ『偶然』、リアの右手に『ブラット』が掠ってしまった。ただそれだけのことだった。

いつの間にかリズから発せられていた殺気はなくなっていた。

「でも……教えなかった俺にも責任はあるよ……」

「……………なら」

レンナは急かすようにリズに詰め寄った。彼女の髪がリズの目の前で揺れていた。

「うん。わかってる。俺はギルドの長だからね」

少しだけ口角を緩め何かを決意したかのようにリズは勢いよく前を向き直った。丁度リアを運び終えたのか、アイアンが休憩室のドアを開けて戻ってきた。精悍な瞳は血に飢えた肉食獣のように爛々と輝き、口角を歪ませている。ギルド『サーカス館』の館長兼ギルド長であるリズは口を開いた。

「ギルド長権限は嫌いなんだけど……レンナとアイアンは俺と一緒に

『ブラット』 搜索。特徴は男で右手がないってことだけだけど探して。ワイ爺はリアの看病と店を守ってほしい。俺は空から探す。アイアンはダブルディー区域を中心に搜索。レンナは自由市場を探して。見つかったら不用意に戦いはしないで。相手は一応『成り立て』ではありけど『ブラット』なんだ。見つかり次第『これ』を上空に投げて。そうすればすぐわかるから」

そう言ってリズは両手に『創った』高速回転する風の塊を2人に渡した。

「これは？」

アイアンは何も言わずに受け取っていたが、レンナはこの不思議な物体を手にとった瞬間に問うた。

「俺が創った風の爆弾。敵にぶつければ爆音と一緒に破裂するけど、周囲にも爆音は行き届くから周りの人の鼓膜は破れる。もちろん自分もね。だから上空に投げて。一定気圧でしかそれは形状を保てないから上空に投げれば破裂して居場所を知らせてくれる。結構上まで投げなくちゃいけないけど2人なら大丈夫」

「お前はとうすんだよ？ 見つけたら俺等と呼ぶのか？」

その言葉に一瞬だけレンナは眉をひそめる。リズのことだ。間違はなく他の2人は呼ばないだろう。自分ひとりですべてを引き受けようとするのがリズの悪い癖だ。見つけようとすればリズの欠点は見つかることができる。欠点の集中するところは全て、仲間が関係しているのだがリアだけはそのことに気づいていない。

レンナの考えは見事に当たった。リズの口からは彼女の考え通りの台詞が出た。

「いや。俺は一応ギルド長だから。皆に助け求めてもあれだからさ……」

案の定。リズは誰の助けも借りないつもりだった。だが、リズはすぐにそれが間違いだと気づかされた。

リズの頭に置かれた手はアイアンのものだった。

「お前はいつもだな。助けは呼べ。それがギルドだろ」

そう言つて、強引にリズの頭を撫でるアイアンはまるで気の強い兄のようだった。

「そうだね。じゃ行こうか。ワイ爺、リアのこと頼んだよ」

その言葉にワイズは頷き部屋の奥に消えていった。

「さて…と、行くか」

アイアンは気だるげに首をパキパキと鳴らした。

「そうだね。リアを助けないと」

包帯が巻きついた右手を、レンナは強く握り締めていた。

「『ブラット』を見つけたら…殺してやる」

恐ろしいことを呟き体に微弱な風を体に纏いつつ、リズは『サーカス館』を後にした。

\* \* \*

「はあ…はあ…。ここまで来りや大丈夫だろ…」

男はダブルディー区域の路地裏まで逃げていた。相方がたかが小娘2人　主に貧乳の女　にコケにされた。しかも自分はそ

れに恐れて逃げてきたのだ。「ったく…あいつ、あんな女に倒されてんじゃねえよ！　せつかくの媒体もおじゃんだぜ…」

顔に伝う汗を拭いながら肩で呼吸する男は安堵しながら会い方の悪口を言っていた。男は小娘たちを完全に振り切ったと思い込んでいた。後ろを振り向くまでは。

「貧乳って言つた罪は重いわよお…」

ビクリと肩を震わせゆっくりと後ろを振り向く。そこにはツインテールの女が腕組みして立っていた。「あたしはあんたを絶対に許さないわよお…」

ビクリと肩を震わせゆっくりと前に向き直った。そこには誰もいない。だが、確かに誰かいたのは確かだった。砂が巻き上がっている。

「許さないわ…貧乳だって…貧乳だって…貧乳だってえ…！」

カチャリと刀に手を伸ばし、抜刀。男の背中に刃を突きつけその

まま押し込む。

「が……あ……」

鋭利な切っ先は骨を避けて男の体内を貫き、腹から突き抜けた。俯いたままシャルトリューは刀を引き抜いた。

「貧乳はレアなのよ……感度だつてある……成長すればナイスバディになる希望がある。それを馬鹿にするものは……あたしに斬られて逝っちゃえ……」

振り上げた刀は男を切り裂かんと煌めいていた。それを見ていたアラシがシャルトリューの腕をつかんだ。

「もういいですわ。行きましようシャル、アーバスの館が近いんですから」

「関係ないわよ………全世界の貧乳の怒りは今、私の中に沸きあがってるのよ……」

制止した腕を振り払うように自身の腕を振り下ろしたシャルトリューは男の鼻先で刀を止める。恐怖に耐え切れなかったのか、男は意識を手放した。それに満足したのかシャルトリューは刀を納め男に背を向けた。

「今度あつたらマジで殺すわ。つと、ねえアラシあれつて……さっきのナンパ男？」

シャルトリューが首でアラシの背後にいる男に意識を向けさせる。それに促されるようにアラシも後ろへと振り向く。

そこには先ほど二人をナンパした一人の男が立っていた。

「あなたが右手を落とした男ですわね？」

「何かしら？　またナンパ……じゃないわね雰囲気は普通じゃないし。右腕変だし」

シャルトリューの言うように男の右腕は普通ではなかった。斬られた右手からは黒い霧のようなもので覆われている。だが、それ以外に変なところは見受けられない。男はニヤリと笑い口を開いた。

「曲芸師……」

#### 四：鉄の騎士、紅の舞踊士、道化は銀…

「はぁ…はぁ…ぐっ！」

顔から汗を大量に流し胸を押さえ、苦しむリアをワイズはただ見ているしかなかった。彼は医学的な知識を持ち合わせてはいたが体調不良の起因が『ブラット』ではどうすることもできないのが現状ふう。とため息を吐きワイズは部屋を後にしようとしたが不意に後ろから聞こえた声によって首を振り向かせる。

「種は蒔かれ、薔薇は咲き誇る。皮肉な言葉だと思いませんか？ワイズさん…」

不可解な声はリアのものだが『彼は喋っていない』。いまだ胸を押さえ呼吸を荒げているのだ。とんがり帽子を深く被りワイズは一言だけ台詞を口にして部屋を出た。

「薔薇は淫猥、種は色欲。か…」

\* \* \*

ダブルディー区域には人だかりが出来ていた。ダブルディーの出身者、または移住者が一人の男を取り囲んでいる。アイアンだ。

周りの奴らはナイフや電撃剣スタンソードを持っていた。そんなものはアイアンにとっては何の恐怖もない。もとより、そんな武器を持つこと自体、自分は強いと相手に思わせているものだからだ。

「アイアン。真に強いものは無用に武器を振り翳すことはしない。覚えておけよ」

脳裏に『あの人』の声が思い出された。頭をガシガシと掻き、周りの誰にも悟られないように口角を歪ませた。頭を掻いているときに彼の結った髪が動物の尻尾のように左右に振られていた。

痺れを切らしたのか、周りにいた者達が一斉に襲い掛かってきた。「こんなところに『ブラット』がいるわきゃねえよな……出直すか。いや、奥にいるかもな」

平然と歩き、四方八方から襲い掛かってくる者達をまるでいないかのように振舞っている。

背後から背中を切りつけてくる電撃剣は体を捻り半身になり避け、正面からの男のナイフの一突きは足を振り上げ、ナイフを男の額に返す。襲い掛かる者達を無視しているようですべてを相手にしているアイアンの怒りのボルテージは高まっていた。

「このくそつたれ共が……邪魔だつづの」

アイアンの愚痴は周りに聞き入れてもらえるわけはなく、尚も攻撃は続いている。ナイフや拳、蹴りは受け止めることが出来るが電撃剣だけはそういうわけにはいかない。電撃剣の通常電力は掠っただけでも生物を数秒気絶させることができる。だがおそらく、ダブルディーにある電撃剣は不要に改造がなされているはずだとアイアンは考えているだろう。

事実、その通りだった。利害の一致で協力関係にあるダブルディーの住人は連携などは不得手、そのために同じ住人に攻撃を加えているのも多々見受けられた。その際、電撃剣が掠った瞬間、または直撃した瞬間に電撃剣を食らった者は死に絶えていた。通常の電力では考えられないほどの電力があればから発せられている。何度目かの剣閃を回避した後アイアンが呟いた。

「ああー面倒くせえ……もういい、死ね」

一瞬。まさに一瞬で周りの者達は壁や地面に『鋼鉄の剣』で磔にされていた。ダブルディー区域で音もなく襲撃が始まり、音もなく惨劇で幕を閉じた。ゆつたりとした足取りでアイアンはダブルディー区域の奥に足を踏み入れた。

\* \* \*

「右手がない男ねえ……見たことないな」

「そうかい……」

自由市場。ここは『合法な商品しか』売ってはいけないワノール唯一の平和区域と都市内では噂されている。自由市場の表の顔は噂

どおり、しかし裏の顔は『違法な商品しか』売ってはいけないという差の激しい市場ということは知る物は少ない。

「悪かったなレンナ。そうだ、お前の部下共にやらせればいいんじゃないか？」

野太い声で露店の店主はレンナに提案する。板に飾ってあるのはネックレス、地面の布に置かれているのはブレスレットやピアスなどからアクセサリー屋なのだろう。

店主の指示にレンナは笑いながら答えた。肩を震わせ笑う度に彼女の赤い長髪が揺れ動く。

「あはは…そんなの無理だね。あいつらは……」

レンナの声のトーンが一つだけ落ちた。

「最悪のクズ野郎どもなんだから……」

声と共に殺気が彼女から発せられる。百戦錬磨の屈強な男でも、今の彼女と目を合わせればおびえて逃げだすのは必至だろう。それほどに彼女は怒っていた。

失言と思ったのか店主は咳払いをした後に口を開いた。なにかを話すときは店主は顎髭を触るのが癖のようだ。

「ああ…っと、そうだレンナ。それならアーバスに訊けば良いんじゃないか？ アーバスなら何かしらの情報は持つてると思うぜ。何せ彼女は――」

「情報屋……だっけ？ あんまり信用は出来ないけど……ありがとおツチャン」

「いいってことよ。ってか俺はオツチャンって年じゃ――」

レンナは店主にウインクをした後にその店の前から姿を消した。取り残された店主は涙目になりながら呟いた。

「俺…これでもまだ26だぜ？ やっぱ髭か？ 髭なのか…？」

店主の呟きは呪いのように市場の雰囲気を暗くした。後日、店主が髭を剃ったことで店は繁盛したらしい。

ため息を吐きながら市場を歩き回るレンナは怒りが収まっていな様子だった。まさか『数年前の人生の汚点』を言われるとは思っ

ていなかったからだ。あの事は今でも記憶に残っているのが尚、自身の嫌悪感を増加させていた。

「お嬢さん」

ついには両手を腰に当てて体内の酸素を全部吐き出す勢いでため息をつく始末だった。

「お嬢さん。そのため息ついたお嬢さん」

「ああ？」

『お嬢さん』と呼ばれ自分とは気づかなかったが『ため息をついたお嬢さん』と言われれば自分と気づいたのか、明らかに不機嫌そうな顔で露店の店主を見やった。彼女はその服装に奇妙な違和感を感じた。

店主はワイズに似た服装だった。ボロボロの黒のローブを羽織り、とんがり帽子を深く被っている。だが、それ以上にレンナが奇妙に思ったのは露店で何故占いをしているのかだった。明らかに露店でする商売ではない。その上、本来『自由市場』で情報の売買はあまり儲からない。情報などは合法か違法かは店主の独自の判断によって決められる。合法的な情報などは高値で売りさばけないためにやはり儲からないのだ。

「この先の未来…知りたくないかい？」

声を聞く限りでは若い女。

「未来？」

「そう…。未来。占ってあげるわよ？」

女の台詞を鼻で笑いレンナは腰に手を当てて口を開いた。

「はっ。あたいの未来を見る前に過去を見てみたら？ 見れないだらうけど…」

レンナはそう言い捨て長髪を翻し、その場から姿を消しダブルデイー区域に向かった。

占い師は水晶玉を覗き口を開いた。

「舞踊士……呪われた腕……血の髪。約束は守っているんでしょうか？」

占い師は音もなくその場から存在を消した。

\* \* \*

場所は『自由人』上空。そこには銀髪の道化が浮かんでいた。

格子柄の服装、右頬に赤い星、左頬には水を模した黒のペイント。誰が見ても彼は道化<sup>ヒーロ</sup>とを感じるだろう。そして、空中に浮いている様がそれを一層際立たせた。

「リアをあそこまでするなんてね……………マジで許さねえ。見つけ次第…消してやる」

双眸は青玉のような色で物静かな雰囲気があるのだが彼から発せられている殺気は静かな雰囲気<sup>サファイア</sup>を微塵も感じさせなかった。だが、それ故に妙なこともあった。

リズは動かなかった。何かを待っているのか、それともただ気まぐれで動いていないのか。理由は定かではないが彼は動かない。

「アイアン、レンナ。5分だけ時間をあげるよ。必死に探せ……………信じてるからね」

リズは二人のことを信じている。だが、どこかそれが信じられなかった。

二人のことは信じているが、自分のことが信じられない。ふと、そんな考えが頭に浮かんだリズは頭を振り幻想を振り払った。

「ま、探したところで無意味だろうね。俺が着くまでに来てくれると嬉しいな…」

一人歪んだ笑いを口元に貼り付けながら銀の道化は二人が行き着く場所へ向かった。

五：銀灰・金・鉄・紅・『闇』（前書き）

約3ヶ月近くの更新停滞をお詫び致します。  
評価、感想、指摘、リクエストなど随時お待ちしております。

## 五：銀灰・金・鉄・紅・『闇』

空を切る黒い霧。シャルトリューは紙一重で回避する。彼女の本能が告げていた。「アレに触るな」と。

外套に隠していた二振りの刃は抜かず、ただ敵の不規則な攻撃を避け続けていた彼女だったが、さすがに不可能と判断したのだろう。刃を勢いよく引き抜くと同時に襲い来る黒霧を容赦なく切り裂いた。「シャル！」

「ダイジョブよ……とりあえずアラシはここから離れて！」

逃亡を促すシャルトリューだが、アラシは応えずに腰に差しである細剣を引き抜く。彼女にとって逃げるといふ選択肢は端から持ち合わせてはいないらしい。アラシの目が細められる。

「私が逃げる？ 馬鹿なことを言わないでくださいな。私を誰だと思っ

ていますの？ 元黒獅堂エージェント、ヒストリックですわ！」  
真半身になり敵と向かい合うアラシ。シャルトリューは忘れては

『株式会社 黒獅堂』

そこは様々な依頼を請け負いそれを完遂し報酬をもらう、一般的に言ってしまうと『何でも屋』の拡大版。しかし、それは文字通り『何でもやる』ということ。赤ん坊の子守、買い物、家事。さらには魔物の討伐、殺人や、戦争の支援といったものまでだ。シャルトリューは殺人の依頼はあまり請け負わない。それは偶然だったのだろうかアラシは違う。

彼女はコードネームとは違う異名を持っていた。その名は『処刑執行士』。その名の示す通り、彼女は殺人の依頼を数多くこなしてきた。その処刑率は約100%。

「アラシ。お願い、今回だけは退いて！ こいつはなんだか知らない

いけどヤバイのよ。アラシの剣じや多分『取り込まれるわ』！」  
『言ってくれるな小娘。あまり俺の主を侮辱<sup>マスター</sup>することは言っんじやねえよ』

聞こえてきたのはアラシとは対照的な低く、そしてどこか下品な声。声はアラシの持つ剣から聞こえてきていた。

「テイル。剣の形が変わってもその声は変わらないんだ…まあいいわとにかく行つて」

「……わかりましたわ。シャル、死なないで下さい…」

「冗談はテイルの声だけにしておしいもんだわ」

『てめえ…いい度胸だ！！ 主<sup>マスター</sup>、斬り刻』

テイルの声はアラシが剣を収めると同時に消えた。アラシは敵に背を向けその場を走り去った。彼女は逃げる際、背後を襲われる事を危惧していたが奇襲はなく敵は常にシャルトリユーのみを狙っていた。

\* \* \*

前から見知らぬ女が走ってきた。髪はツインテールの銀灰色、着ている服はドレスに似た服、腰には随分と高価<sup>たか</sup>そうな細剣。どう考えてもダブルデー<sup>このくいき</sup>には不釣り合いな格好だった。

「あ？ んなとこに何で貴族がなんだ？ お嬢様の探検つてか」

アイアンは酒を飲みながら大通りの真ん中を歩いていた。一方の彼女も大通りの真ん中を駆けていた。

アイアンは女が避けると思っているのか道を譲る気がない。

彼女は必死にこの場を離れようと、一心不乱に駆けているため前方を見ていない。その状態で起こりうる結末は当然、衝突だった。

「おいおい、ちゃんと前見て歩け。じゃねえか前見て走れお嬢様」

「っ！！ あなたこそ気づいていたなら避けなさい！」

双方が自己正当を訴えていた。これではキリがないと先に判断したのは少女の方だった。アイアンの右を抜けようと走り出したが、アイアンが右手を掴んだために走れない。ここで一般人を見つけた

のは運が良かった。一般人なら『ブラット』の情報も少なからず持っているはずだと彼は踏んでいた。アイアンが振り向くとそこには左足を自分の側頭部に振り上げる少女の姿があった。

「また痴漢ですか？ 今度は息の根を止めますわ。私の蹴りを食らって地面に這い蹲りなさいな。っ！？」

手応えはあった。しかし、振りぬいた足が未だに地に着かないことに違和感を覚え彼女は男を見る。

「いきなりこめかみに蹴りとは…なかなか転婆てんぱなお嬢様だなおい。まあいい。俺は人探しに来てんだ。体の一部が全身が黒い霧みてえのになつてゐる奴しらねえか？」

少女の蹴りを左手で受け止めた状態でアイアンが問う。彼女の蹴りは長年の戦闘経験が無意識に体を動かし、見事に防いでいた。

アイアンの問いが少女を驚愕させていた。まさかこのお嬢様は『ブラット』を知っている？という期待がアイアンの胸にはあった。

期待は現実になり少女はアイアンに掴まれていた右手をそのままに路地へ戻ろうとした。右手を掴んだまま半ば強制的にアイアンは少女の後を追った。

\* \* \*

「あんまり来なくなかったねえー……ここは嫌いなんだよまったく！」

頭を掻きながらダブルデュー区域に到着したレンナは開口一番に愚痴をもらした。『昔』はここでイロイロとしていた彼女が一番慣れ親しんでいることを嫌悪している。昔の知り合いには会いたくないと心から願う彼女は情報屋の館に向かう。しかし、少し進んだ先に赤く大きな水溜りが幾つも見つかった。

足を止め、辺りを見回せば数人だが『見知った顔』があった。だが、彼女は数秒足を止め、それからすぐ歩みを再開した。誰がこの惨劇を作り出したかは理解したからだ。

「やっぱりここはガラが悪いねえ。ま、あたいには関係ないけど」

無数の死体を無視し、レンナは先に進む。途中、ピチャリと血溜りを踏んだ。自分の髪とよく似た色。そんなことを思ってしまったレンナは憤慨し地面を右手で思い切り殴りつけた。ドゴン。と地面が響き、土埃が辺りを覆った。土煙が晴れるとそこにはただ死体だけが無残に残されていた。

\* \* \*

「まったく…なんなのよコイツは!!」

生気のない人間がシャルトリューの眼前に『ある』。右手首の先から『黒い霧』を鞭のように変形させて彼女を襲う敵は直立のまま『黒い霧』のみを操っていた。一方、シャルトリューは向かってくる『黒い霧』、否『黒鞭』を二振りの刀で斬り捨てる。最初こそ苦戦したが、コツを掴めば彼女には乱軌道の鞭を斬り捨てるなんて事は造作もなかった。隻眼故の死角からの襲撃には持ち前の勘と高速の剣技が襲撃を無意味にした。

「処刑士……賢者……舞踊師……騎士……曲芸師……道化……」

敵は理解不能なことを言いながら攻撃を続けていた。だが、一つだけ理解できた言葉が彼女にはあった。幾度となく繰り返される攻撃をしながら彼女は黙考する。

『処刑士』。

それは間違いなくアラシだとシャルトリューは確信していた。理由は分からないが、何故かその単語に当てはまる人物がアラシだと彼女の持つ何かがそう断定していた。だが、それにしたってこの男は何故自分を狙ってきているのかがシャルトリューには理解できなかった。『黒鞭』は速度を上げ尚も彼女を狙う。

「キリがないわ…!!」

一向に変わらない状況を歯噛みするシャルトリュー。あと一人でも助けがいるだけでこの劣勢を覆えることは分かっている。しかし、彼女に味方する者はいない。それどころか、周りには味方どころか人がいない。ここでもし死ねば無残な死体が作られ野犬の餌になり

かねない。そんなことは断じて嫌だ。『黒鞭』の攻撃は止まず、『霧』は枝分れを繰り返し、敵の攻撃の手は増えていくばかりだった。それを全て斬りおとしている彼女の剣の腕は間違いなく一流のそれだろう。しかし、体力は徐々に減少し、先が見えない持久戦は体力より精神力を削っていった。

「もう限界だわ……ごめんねアラシ。あたしはここでサヨナラよ」  
迎撃していた刀をカランと落とし汗だくになった顔は俯き、彼女は地面に膝をついて死を覚悟した。敵の『黒鞭』は一斉に先端の形状を鉗状に変形させ彼女の全身に降り注いだ。

彼女が最後に見た光景は目を覆わんばかりの『闇』だった。

## 六：金は『闇』、銀灰は紅鉄と共に：

アラシが見たものは『黒いドーム』だった。大きさこそ、人間を一人包むぐらいの大きさだがそこにいたはずの自分が知る人間がいなかった。

シャルトリューが『黒いドーム』に呑み込まれていた。『黒いドーム』の周りには二振りの刀が無造作に捨てられていた。

「シャル！！」

男を掴んでいた右手を払いシャルトリューがいる所に駆け寄った。だが、男の右手がアラシの腕を取り制止した。男の腕を払うことはせず、更に前へ進もうとしたが男の膂力が強すぎるために前には全く進めていない。

「離しなさい！！ 殺すわよ！」

「あ？ 共通語で話せ。通じねえよお嬢様」

「黙れ！！ あんたなんか構つてゐる暇は無い！ シャルが……」  
感情的になった所為か『母国語』を話してしまったアラシだが、今は関係ない。大切なパートナーの一人が危機的状況下に置かれているのだ。感情的にならないわけが無い。一瞬、男の腕を掴む力が弱まった。隙を突きアラシは敵に突撃した。

「おい馬鹿女やめろ！！ ったく、呑まれるぞ……」

腰の剣を抜き、一瞬にして敵の眼前に移動。剣を腰の回転とともに前へ突き出す。アラシの剣の腕は高くはない。しかし、彼女は『処刑執行士』。一撃で対象を殺すことにかけては類を見ないほどに上手い。だが敵は、彼女のことなど眼中になくただシャルトリューがいるところだけを濁った双眸で見ている。彼女の刺突は容赦なく敵の心臓を貫いた。手応えはある、確実に命は絶った。手応えの所為で彼女は一瞬油断した。彼女は知らなかったのだ、敵はそれこそ『生物』として殺すだけでは無意味ということが。

「主！<sup>マスター</sup> すぐに引き抜け。なんか……ヤバイ！！」

いち早くそれを感じたのがアラシが使用していた剣、テイルヴィングだった。彼の声に反応し彼を引き抜こうとしたが。

「そりゃ無理だろ。そんだけ深く刺したんだ」

後ろから聞こえた男の声。不愉快だったがアラシは男に問う。本来、剣は引き抜く際にも両刃、片刃問わず対象を斬りながらでも引き抜けるはず。だが、この敵は違う。引き抜くことも、ましてや押し込むことも出来ない。それどころか、先程まで喋っていたテイルヴィングが喋らなくなった。長年使っていればこの剣がどんな性格かわかってくる。こんな状況なら真っ先に、文句なりアドバースなりを自分に言ってくるはずなのだが。

「どうして抜けないんですの！？ そのあなた、答えなさい」

尚も強気な姿勢を変えずアラシは男に問う。男は腰に吊るした酒瓶を手に取り飲んでいた。この状況でふざけた男だ。アラシの男に対する感情は怒りしかなかった。酒を一口飲み男は口角を吊り上げて答えた。

「そりゃそいつが『ブラット』だからな。その剣はお生憎。もうあなたの手元には帰ってこねえよ」

「意味がわからないですわ！　じゃあ、シャルは……！！」

考えたくない。男の口から出るのが希望だと信じたい。だが、現実には甘くない。男は淡々と言い放った。

「もう無理だ。シャルつてのが何者か知らねえがもうそいつは『そいつ』の腹ん中だ」

その言葉は彼女から魂を奪った。ペタリと地面に膝から倒れた。もう何も考えられなくなっていた、アラシにとつてのシャルトリューは相棒であり、仲間であり、親友であり、家族だった。身を引き裂く想いも沸かない。敵はそんな彼女に送る視線は無く、ただ『黒いドーム』を凝視していた。

\* \* \*

アイアンは悩んでいた。『ブラット』は見つけたが一般人が犠牲

になっていた。どうするべきか。否、もう助かるとは思えない。一人は既に呑まれもう一人は戦意を失くしていた。

「やれやれ……どうしたもんかね。なあ、『レンナ』」

「そうだねえ。取り敢えず、あの『剣』だけは救ってあげようか」

レンナが到着したのは先程のアイアンの台詞が言い終わった直後だった。どうやら場を見ただけで状況を理解しているようだ。それなら話が早い。

右手を地面と平行になる程度の高さまで上げ、五指は不自然にならないほどに開く。レンナは『ブラット』までの距離を詰めるために、まるで地を縮めるように駆けた。ジパングの一部の人間が昔使っていたと言われる移動術、『縮地』。

彼女は齧る程度だがジパングの武術も習得している。もちろんそれは『齧る』程度なのでそっち方面に精通しているものに比べれば兎戯に等しい。

「どうやりやいいんだ？」

「とりあえず『剥り抜いて』くれれば何とかするわ」  
「了解」

五指を力強く開く。一瞬、その場にいた全員の耳に甲高い、金属同士をぶつけ合わせた音が聞こえた。それを合図にレンナは速度を上げ左腕を振りかぶる。ツインテールの少女が視界に入ったが今は無視。右足を強く踏み下半身を固定すると同時に振りかぶった腕は上半身とともに円を描くように『ブラット』に刺さっていた剣の柄を殴り、勢いを殺さず振りぬいた。

「せええい!!」

剣は勢い良く『ブラッド』を貫通し廃ビルの壁に鏢の部分まで刺さった。これはこれで引き抜きにくそうだが。

「っは……なあんか底なし沼にはまった夢見たぜ」

「そりや良かったな『魔剣』。そのまま死んでも良かったんだがな」  
やけに親しそうに話すアイアン。彼はこの剣について知っていることがあるようだ。一方の魔剣と呼ばれたティルヴィングも傲慢な

態度で答えた。

『ああ？ お、アイアンじゃねえか。久しぶりだな』

『まあな。だいぶスリムになったんだな。気づかなかったぜ』

そう言いながらアイアンはティルヴィングの所まで歩き『彼』を引き抜いた。あれほど深く刺さっていたにもかかわらずアイアンは易々と引き抜いた。引き抜きティルヴィングを少女の下に投げ、レンナと共に『黒いドーム』に近づく。

『ティル……』

ガランと音を立て剣は少女の下に転がった。ティルヴィングは声を出すことなく、静まり返っていた。剣は救出したが、問題はこっちの『黒いドーム』だった。便宜上、『黒いドーム』なんて言うてはいても元々は『ブラッド』の一部。急襲されないと制限らないのだ。油断することなく二人は近づいた。

『そついやリズはまだかい？』

『まだ来ちゃいねえが心配ねえだろ。命令には従うだけだ』

心底リズを信頼しているのかアイアンは迷うことなく答えた。アイアンは『サーカス館』ではレンナ、ワイズより早くに所属していた。期間にしては数十年以上前には所属らしい。そのためカリズの事を信頼、もしくは慕っているのかもしれない。今はそんな事より現状をどうするか。レンナはアイアンの隣に立ち、右手を腰に当てながら片足のみに重心を預けている。

『シャルは助かるんですの？』

後ろから聞こえてきたのはツインテールの自分のようなガサツな女とは対照的なほどに高貴な雰囲気纏っている少女の声だった。少女は気づいているんだろうか。その問いは自分の首を絞めるということに。二人は『沈黙』を返答とし、振り返って口を開く事はしなかった。その『答え』は少女の心を破壊するのには十分な威力だったろう。またしても俯き少女は何も喋らなかった。

『取り敢えず…アイアン。周り削ってみようか？』

『ちっ…面倒だ』

愚痴をこぼすもアイアンは言葉に従った。右腕を振り上げ、直ぐに振り下ろす。甲高い音が辺りに響く。直後に撒き散らされるのは土塊。『ブラット』は削れることなくその周りの地面のみが削り取られていた。アイアンの『神秘』はこの『ブラット』との相性は悪いらしい。すぐに諦め腰に付けていた酒を飲み壁に背を預けた。

「あたいのは無理だからねえ……リズに任せようか」

レンナはそう口にした後、少女の隣に腰を落とし、静かに肩に左手を添えた。

少女は同情されることを嫌い、レンナの手を払いテイルヴィングを鞘に収めた。少女は『黒いドーム』に近づき、ただ祈るしかない自分に苛立っていた。だが、この少女は真に強い心を持っていた。自分が何もできない事を受け止め、すべてを認める事ができている。レンナはこれ以上同情せず、アイアンの隣に立った。

「『神秘』を遮断する『ブラット』なんて聞いた事ねえ。アレはもしかすると……」

「進化した『ブラット』？」

少女に聞かれないようにアイアンたちは話す。ついこの間、リアが予想した事が形になったのか。本来、『ブラット』は定形がなく、その都度(こども)に自身を変え獣や武器、若しくは霧のように形をとらないものもいる。だが、その全てに当てはまる事は『神秘』でしか攻撃できないということ。

「わかんねえ……可能性としちゃゼロとは言えねえな。けど……」

「けど？」

一瞬表情を曇らせたアイアン。それは不安ではなく心配だった。『もしあの中が空洞だったら』。そして、『まだ中の人間が無事だったら』。入る事も出る事も出来ない隔離空間。リズならどうにか出来るだろうが、今はただ待つ事しかできない。それが心配だった。人間は暗闇に永久にいる事はできない。詳しくは知らないがワイズ曰く、「精神がやられる」らしい。

レンナの訊き帰しにアイアンはため息を吐き答えた。

「いや、何でもねえ。今はリスを待てば…そういや何か貰ったよな？」

言いながら懐に忍ばせていた球形の『風の玉』らしきものを取り出した。レンナも同じ物を短パンのポケットから取り出した。リスは『ブラット』を見つけ次第上空に放り投げると言っていた。

「上に投げていいんだよね？」

「ああ。おもいつきりぶん投げりやあいいんじゃねえか？」

一歩前に出て体を反らすレンナ。その際に大いに育った胸が天を向き大きさが強調される。そのまま腕を半月状をなぞる様に振り上げ、その途中で持っていた『風の玉』を手放す。重力を無視した『風の玉』は重力で勢いを殺すことなく上空へ向かっていった。

\* \* \*

「もうそろそろ始まった頃かな？」

空中を自由に漂っているリスは口の端を歪めながらゆつくりとダブルデュー区域に向かっていった。彼はまるで『全てを知っている』かのような発言をしている。

それはまるで全知全能の『神』であるかのように。

ゆつくりと空中散歩をするリスだがダブルデュー区域から上がってきた球形を見ると一瞬驚いた顔を見せそれからすぐに顔をほころばせた。パァン！！と大きな音をあげ球形の物体は弾けた。

「早いね。じゃ行こうかな。リアの容態が悪くならないうちに」

リスは速度を上げ二人の元へ急いだ。

## 七：無力な金、万能の銀

「すう……すう……」

静かな寝息を立てるリアは傍<sup>はた</sup>から見れば『正常』だ。この少年が『ブラット』に感染しているという事実を知っているものから見れば今のリアの状態は極めて異常だと言える。

助かる余地すら見つからない。

本来ならこの表現しか浮かばず、もし近くに誰かいるのならば間違はなく『絶望』で心を埋めることになるだろう。だが、この少年はそんな感情すら湧くことないほどに安らかに寝息を立てている。

『狸寝入りも難しいものだよね。リア？』

空間に響き渡る声は寝ている少年、リアのものであった。彼は寝ているが声は空間に響き渡る。矛盾した光景が室内を埋め尽くす。そんななか、ふとリアが目を開いた。

ベッドから起き上がることはせず、ただ天井を見つめる。そこにはシミなど一つもなく綺麗なものであった。ただ一点をのぞいて。

『あんな世界の影に喰われるほどオレ達は弱くないよね。だってオレ達は』

声はそこで消えた。消えるが早い、天井に張り付いていた『骸骨』の図柄のカードはひらりとリアの胸元へ落ちてきた。カードを握り潰そうと右手に力を込めるが、右手どころか体全体に力が入らない。苦しい表情をした後、リアは口元を綻ばせた。

「『世界』なんかに……選ばれなくてもよかったんですけどねえ……」

僕は、つくづく道化のようだ」

そう言い終わったリアは、まるで懺悔をするかのように、まるで神に助けを求めるかのように必死に両手を合わせ、深く祈った。他の誰でも、自分でもなく、『喜劇』のために。

\*\*\*

『風の玉』を上空に放り投げてから数分。未だに『闇』は球状を保ったままだった。さすがに常人の精神力ではこれ以上の『暗黒』は堪える筈、それでもアイアンとレンナの二人は『闇』をただ睨みつけるしかできなかった。

ツインテールの少女は『ブラット』の前で膝を折り、ただ祈っていた。神すら見捨てたこの都市で祈ったところでどうにかなるわけでもない。だがそれでも少女は祈り続ける、大切な仲間のために。やがて痺れを切らしたのかアイアンが舌を打つ。それを見てたレンナも呆れた様子で溜息を吐く。

「遅いねえリズは」

眼前に垂れ下がってきた前髪を優雅な仕草でかきあげ後頭部を壁に預ける形でレンナは上空へと視線を移す。

「一般人が巻き込まれるのは今回が初めてだからな…クソツたれ。気がのらねえタダ働きだ……」

「あたいは二度目、かな。最初は教会のときにリーナって女が『吞まれた』よ」

後悔もなく、起こった事実を『第三者』のような立場で話すレンナ。たしかにそうだった。彼女はもう既に『ブラット』に『侵食』されたリーナしか見ていなかった。リアとリーナが接吻したところから彼女は『その物語』に加わったのだ。間違いなく彼女は第三者だが、それでも彼女の台詞には違和感があった。

「毎度のことながら思っただけだよ？」

「ん？」

レンナと同じような態勢で空を仰ぐアイアンは気を使う様子すら見せずに考えたことをそのまま口に出した。

「お前、『昔』っから死んだ奴とか殺された奴に対して思い入れしねえよな。『ここ』に入る前になんかあったのか？」

一瞬、唇を噛むレンナだったが自嘲気味に笑う。

「ハハ。『昔』はイロイロあったさ。勿論、『イロイロ』ね。でも、『これ』はあたいの性格みたいなもんなんだよ。薄情とかヒトデナ

シとか言われるのももう慣れっこさ。でもさ、やっぱり死んだり殺されたりした奴をいくら想ったって帰ってくるわけじゃないだろ？

『レイン』だってそう　　」

言い終わる前にレンナは息を呑んだ。首の端に、剣が二本。音もなく壁に突き刺さっていた。どうやらアイアンの『逆鱗』に触れてしまったらしい。

ため息をつくこともせず、レンナは心の底から謝った。

「ごめんよ。今のは失言だったね。ごめん」

「ああ。いや、悪いな、俺も訊きすぎた。悪い」

自らの行動に非があつたのを自覚していたアイアンはレンナの謝罪を打ち消すように謝り刺さった剣を奇術のように一瞬で消してみせた。

このままでは延々と謝り合戦が続きそうなのを二人は感じていたのか、別の話題に変えようとする。

「……………あのさ」

先に切り出したのはレンナ。しかし肝心の話題が出ない。息苦しい雰囲気が続いたことはいうまでもない。

ただリズを待つばかり、もうそろそろリズが到着してもおかしくはないほどの時間は経っていた。しかし、唯一の救いの道化がくる様子は未だにない。

\* \* \*

場所は上空。空气中を漂う蒲公英の綿毛のようにリズは浮遊している、わけではない。彼は自分の持てる力を使い高速で『風の玉』が爆ぜた場所へと向かおうとしていた。だが一向に体が動かない。まるでその空間に『隔離』されてしまっているかのようにも見える。腕を伸ばすが感触のない『何か』にあたり伸ばせない。

「何だ…これ？」

不可解な状況下でありながらもリズは冷静に状況を分析する。  
有りえない『空間』。有りえない『能力』。在りえない『存在』。

目の前には『死神』が浮いていた。

\* \* \*

「ふう。なんとか体は動きますね…まだダルイ感じはありますけど」  
体の所々を触診しながら肉体の健康を確認するリア。本来、起き上がることにすら出来ない筈の彼は今、普通に動いていた。

「さて、そろそろですね……っ！！！」

急激に襲う頭痛は視界を歪ませる。まだ『ブラット』の残滓が体に残っているのだろう。頭痛を払うように、頭を左右に振るが、それは痛みを増し鈍痛となつてリアの頭蓋を揺さぶり続けた。

「『世界の影』ですか…それはどちらかと言えば『僕』のような気がしますよ。ねえ？ 『カミサマ』…」

ポケットにしまったカードを取り出し絵柄を見る。そこには、先ほどまで描かれていた『骸骨』ではなく、『二つの箱の前に立つ道化』が描かれていた。それは奇術マジックを起こす前のような状態、とでもいえばいいのだろうか。一つの箱は『夜色』ヨルイロ、隣には『無数の剣』。もう一つの箱は隣に『黒いローブを着た人形』が立つ『空色』の箱だった。

リアはただ一言だけ奇妙なことを呟いた。

「『トリックヒエロ奇術道化』……………」

\* \* \*

眼前は暗黒。周囲は静寂。自身は脆弱。覚えているのは『黒い鞭』を切り落とすのに体力的な限界を迎え、『黒い何か』に自分が飲み込まれたこと。

冷静にあたりを観察しようにもこう真つ暗では観察しようがなかった。

右足を動かすとカランと金属が転がる音がする。

手を伸ばすと指先に感触があった。妙にツルツルした鉄、刀だ。

一瞬、ヒヤリとしたものが指に当たったので反射的に指を引っ込

めるがよく考えれば触っていたのは刀の『腹』にあたる部分だ。徐々に指先を柄に這わせる。

「それにしても……こっつて何所おー？ 誰かー。誰かいませんかー？」

彼女、シャルトリューは声を出してみたが声が反響しないことがわかると、ここは狭い空間で自分は閉じ込められているのだと理解した。こんな状況でも恐慌状態にならないのは、単衣ひとえに彼女がエージェントを務めていて、極限の状態を体感したことがあるためだろう。

「周りには何もなしなあ……うわっ！！」

呟きながら周りの『壁』らしきものに触れた瞬間、彼女は触れた左手を引っ込めた。感触がおかしかったからだ。

ザリザリした、何所か『凝固した血液』を思わせる感触だった。それに触れた左手を鼻に近づけ臭いを嗅ぐ。案の定、それは『鉄のニオイ』。ただの錆ならよかったがこれは嗅ぎ慣れた血の臭いだった。

「もう……早く誰でもいいから助けにきてえ……」

震える声でシャルトリューは助けを求めるしかできなかった。

## 八：『コク』銀

アイアンたちの眼前に急に現れたのは『黒い箱』だった。いきなりの事態に混乱することなく、アイアンとレンナは背中を預けていた壁から離れ左右に跳んだ。

レンナは腰を軽く落とし両腕を上げ構える。

アイアンは一瞬で自身の周辺に『鉄の剣』を顕現させた。

「合図は？」

「『イーグル』。10秒で決着<sup>ケリ</sup>つけるぞ」

何かを確認したようにレンナが頷く。おそらく、リアがサーカス館に入る以前の戦闘においての呼吸の合わせ方だろう。

神経を集中させる。今は『黒いドーム』を無視し、不確定要素の排除のみに全力を注ぐ二人。『黒いドーム』の前に座っている女は邪魔になることはないが気を払っておく必要性がありそうだった。

「跳べ」

アイアンの掛け声。瞬間、レンナは壁に向かい跳躍。壁に『着地』と同時に更に上へ跳躍。それを数回繰り返し、壁の鉄骨を掴む。

「剣を」

レンナの掛け声。刹那、彼女の周辺には数本の剣が出現。右手だけで支えていた体を回転させ、鉄骨の上に右足をのせる。間髪をいれずに鉄骨から離れ、切っ先が全て『黒い箱』に向かっている剣の柄を狙い打撃を繰り返した。

「やれ」

体を回転させながら肘で一発、回転を殺さず右足の甲で柄を蹴る。続けて両の掌で剣の柄を弾く。重力に負け、落ちそうになる体を鉄骨を掴んで阻止する。打撃を加えた剣は重力も相まって速度を増し『黒い箱』を強襲する。その光景はどこか地を這う生物を捕らえる大鷲の爪のようにも思えた。

瞬間。ガラスが割れるような音と同時に突風が吹き荒れた。

「っ！！」

『黒い箱』に襲い掛かる鈍色の剣は、一本も余すことなく突風に絡めとられる。風が爆ぜれば剣は周囲に放り出され、壁や路地に刺さっていった。爆風にも似た衝撃はアイアンをも襲うが彼は飛散した剣の一本を空中で掴み自らを回転、遠心力に任せ剣を振るうことで自身も風を纏い相殺する。一端の剣士には出来ない芸当を彼は悠々とやってのけた。それだけでも彼の剣士としての力量は相当なもの、そしてそれ故にアイアンはリアとの『戦闘』が不思議でしうがなかった。只の一度も掠ることはなく、本気の『不意打ち』にまで反応した彼の反応はおよそ人間の取れる行動ではないのだ。そんなことを考えていて不意に『お嬢様』が気になった。『ブラット』の前で必死に祈っていた女は『黒い箱』に反応はしたもののそれが自分に『敵意がない』ことがわかると早々に視線を戻していた。その後ろで突風、否、爆風が吹き荒れることを予想出来ずに。

急いで『ブラット』へ視線を移すと案の定、女はいなかった。だが、心配は無駄に終わったらしい。

レンナが彼女を抱きかかえていたのだ。レンナはおそらく、風が吹いた瞬間、自分が吹き飛ばされるであろうと予測していたのだろう。急いで壁の鉄骨を掴み体を壁に引き寄せ、壁を足場に跳躍し地面に着地。着地の反動の威力をずらし、その力で『縮地』を行い女のもとへと急いだのだろう。回転して剣を振るった瞬間、下に見える人影はレンナだったのだ。一先ず女に怪我がないことを安堵し、次いで『黒い箱』に向き直る。

やはりというべきか、『黒い箱』は原形をとどめておらず辺りに破片らしき物体が散乱している。周囲には土煙が激しく舞っていて視界をふさがれていた。だが気を張る必要はなさそうだった。『黒い箱』があつた場所から滲み出る気配は自分の良く知る人物のものだ。

「げっほ！ えほ……うー…埃っぽい」

咳き込みながらも周りを警戒していた人影は大人より小さく、幼

い少年、リズだった。

「遅えぞ。レンナの投げた『玉』に気づかなかったわけねえよな？」  
万が一を考えて、突風でも吹き飛ばされなかった周囲の剣を消し、アイアンは問う。もし、まだリズが『完璧に怒っていたら』、止めるのは自分しかないのだ。リズと一番長く付き合っているのはアイアン、故に彼はこの少年の考えが大体判つてしまう。恐らくだがリズはもう怒ってはいない、だが何か得体の知れない違和感が自身の体中を嘗め回していた。

「いや…気づいてただけださ、『死神』が急に現れてさ…」

頬を伝う冷や汗は『死神』という単語にはなかった。よくわからない違和感が冷や汗を流させた。目の前にいるのは間違いない。リズだ。リズのはずだ。リズのはずなのに。何故、違和感が拭えなかったのか。平常を保ったままなんとか口を開くことは出来た。

「『死神』ってアレか？ お前に似てるけど目が赤いつて奴か」

「そう。急に現れてビックリしたら何か『ガラス箱』にでも容れられたらしくてさ。とりあえず『神秘』で壊してみたんだ。そうしたら」

そうしたら、景色が変わっていた。要訳するとそういう話につながる。早い話が『死神に出会ったら空間を移動していた』ということになるのだろうか。まったくもって理由は不明だが違和感の正体は解明した。今さらだったのだが『リズがいきなり現れた』ことに違和感を持っていたのだ。何もない場所に『黒い箱』が現れ、それの中からリズが現れる、なんてことは少なくとも『サーカス館』では誰の『神秘』でもできない。

脳内で頭を振り、一旦考えを強制中断させる。今やるべきは『ブラット』の消去だ。元々考えるのは得意ではない、このことは今の事態が落ち着いてから全員で話し合えばいいことだ。

「はあん…まあいいか。とりあえず見つけたぜ。こつちだ」

興味がないふりをしてリズを『ブラット』が在る所へ案内する。だが案内しようにも土煙がまだ空气中を舞っているため、いまいち

場所が特定できない。少々の憤りを感じ舌を鳴らす。

リズが口を開いた。

「ああ。そっか、目瞑ってて」

言うが早い。突風が吹き荒れる。突風というよりは下から持ち上げられているような、上昇気流とでも呼ぶべき風が吹いた。数秒で土煙は上空へ飛ばされ霧散していく。辺りを見回せば、しゃがんだ状態で、顔を右腕で隠したレンナ、その隣には左腕で庇われている様に見えた一見お嬢様に見える異国の少女。少し離れたところに『ブラット』が変化した『黒いドーム』が鎮座していた。

リズはそれを見て状況を理解したのか、ゆっくりとした足取りで『黒いドーム』に近寄っていった。

「『これ』？ リアを苦しめてるのって」

「ああ。たぶんな」

「この娘の友達こが中に取り込まれてるらしいよ？ もっとも、完全な半球体なのかドームみたいに覆っているのかわかんないけどねえ……」

補足、といった感じでレンナがリズに情報を与える。リズは一度だけ顎に手を当て「ふむう……」と子供らしくない唸り声を上げてから『ブラット』に触れるか否かのギリギリの位置に右手を差し出した。

「……………」

何かを呟く。次の瞬間、パキンと小気味良い音とともに『黒いドーム』は砕け散った。

「さっすが、だねえ……………」

誰に聞こえるでもなくレンナがポツリと漏らす。その声は感心するほかに、呆れが混じっていたのをなんとか聞き取れたアイアンは感じていた。

ともあれ、元凶である『ブラット』が『消滅』したのだ、リアの体調はじきに回復するだろう。アイアンはその場から去ろうと大通りに足を運んだ。が、レンナとすれ違った瞬間、左腕に違和感があ

った。レンナが彼の腕をつかんでいたのだ。

言葉を発さずに視線のみで不快感を露わにするアイアンだったが、そんなもので怖気づく彼女ではない。レンナは顎をクイと上げリズを指す。

「あ？ 赤黒いドーム……いや、『茨』か……？」

つい数瞬まで『黒いドーム』があつた場所には不可解な物体があつた。

『血のような』という表現ではなく、完全に、完璧に、まごうことなき『血の薔薇』がそこにはあつたのだ。

「『ブラット』の次は何だリズ？ まさか二重に『ブラット』があつた、なんてことはねえよな？」

「それはないよ。でも、これってどう見ても……」

「『血』、だよねえ。まあ考えられるのは『神秘』以外にない。よね」

一瞬、何らかの敵意を感じたアイアンは、掴まれていたレンナの腕を逆に掴み返しそのまま大通りに放り投げた。

世界が反転するレンナだった。体が回転させ着地。顔を上げれば、裏路地から自分と同じようにアイアンに投げられたであろう少女が、受け身すら取れない状態で自分に向つて飛んできた。

「げっ！！ うわっ……ってちよつとアイアン！」

「そこにいろ。とりあえず俺たちも出るぞリズ。リアはもうダイジヨブなんだろ！？」

リズに退避を促すが彼は動かない。というよりは、動けない、が正しい。さきほどまであつた『血の茨』はリズの周囲を取り囲んでいた。

「先に出てていいよ。てゅーかさ……」

急に膨れ上がる殺気はアイアンを後退させるのに十分だった。仲間を危機に晒すことも躊躇せずに彼はレンナの隣に移動したのだ。

あのままいれば、俺が死んでたな。

自分のした行為に間違いはないと改めて確認するアイアン。隣に

いたレンナは恨めしそうに睨んできたが無視。今はリアがまだ生きているかということが気にかかっていた。とりあえずだが最悪の状況は回避できているのだ。

あそこから全員を助けることはほぼ不可能だとアイアンは確信していた。確実ではないが相当数の戦争を経験している故の感覚的なものが『生者は一人』と告げていた。レンナの頭に手を置き「まかせた」の意を無言で告げ彼はその場を去った。

「……アイアン？　はあ、どこまでも忠実だねえ……まだ『引き摺ってる』んだねえ……」

置かれていた手の場所を触り自分で頭を撫でるレンナ。哀愁を帯びた瞳でアイアンを見るが、その悲しげな視線は先の彼には届かないのだろう。彼は主に忠実な騎士のままなのだから。

ぐしゃぐしゃと髪をかきむしり、その髪を手櫛で直す。やつあたりは終了。視線を前に、気持ちも前向きに。

裏路地にある風景は異常、対峙しているのはリズと『血の茨』。リズが近づこうとすれば、茨は振り払うように、一本一本が別個の生物のように蠢き襲いかかっている。リズが離れば沈静化し半球状に戻る。まるで、中のモノを護るかのよう。

「あれは『神秘』だねえ……、ねえ、あんたのツレって特別な能力とか持ってた……っていないし！」

わきに抱えていた少女はいつの間にか自分の拘束を抜け、走っていた。

道化に遊ばれている茨のもとに。

\* \* \*

アラシは走っていた。相棒の生存を考えて、家族の無事を悩んで、友人の助力を悔やんで、シャルトリューの現在を。

「シャル！　シャル！！　シャルトリュー！！！！」

裏路地どこか大通りにも響きそうな張りのある声が発せられる。「うるさいな。今助けてあげるからさあ、ちよつと待っててよ。…

…ね？」

不機嫌な声が奥から聞こえた。幼い少年、先程のアイアンと呼ばれていた男はリズと呼んでいた少年だ。銀系のような髪、幼さが強く成人している男にはない可愛らしさが前面に浮き出た顔立ち。無邪気に微笑む様は心安らぎ、こちらの身を案じる声には顔に笑顔を取り戻させる。ただ、そのすべてに、色で表わすならば『全ての色を混ぜ合わせた黒』を彷彿とさせる殺気がなければの話だが。

アラシはここに来るまでは『黒獅堂』と呼ばれる組織に属していた戦闘要員<sup>エージェント</sup>だった。一般人よりは視線や殺気には敏感だと自負している。だがそれは、今この場では最悪の結果を生み出した。

足が震えた。平衡感覚が消えた。地面に倒れた。頭<sup>しんく</sup>を垂れ命乞いするような体勢になっている自分がいた。リズは、この少年は間違はなく自分だけに殺気を放っていた。殺気のみで看破されるなんてことは初めてだった。

「あ、怖がらせちゃった？ ……大丈夫」

そう言ってリズはアラシに歩み寄り耳元で囁いた。

「助けるけど…手前<sup>てまえ</sup>が邪魔したら、殺す。」

口調が一瞬だけ変わり、最後のセリフは機械のように感情がない声だった。いつの間にかアラシは泣いていた。息も絶え絶えだった。自分より年下の少年に心を崩されて悔しいのではない。彼女はただ一つのことを必死に祈っていた。

『もうやめてください』

シャルトリユーをこれ以上弄ばないでください。

自分をこれ以上苦しめないでください。

どうか助けてください。

様々な懇願は収縮し一つの願いになっていた。自分にできることは、ただここから動かずに祈り続けるしかなかった。

\* \* \*

「やれやれ…道化ですねえ。僕<sup>リア</sup>も貴方<sup>リス</sup>も、いや、誰も彼も道化だ…

…フフフ」

体調は回復したが足取りが覚束なかったリアはベッドにもぐった。

枕の隣に置いたカードが示す絵柄は、『道化の仮面』。

その意味は、隠匿。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8024c/>

---

遠き日の約束

2010年10月16日21時20分発行